

いで獨りほちの除外者になりたと思つてゐた。

廷吏が例の片道寄の足を運んで、再び陪審員を法廷へ呼出しに來た時は、ネフリユードフは自分が裁判するよりは裁判されに行くやうな心地がしてドキリとした。心の奥底では確かに自分も他人と顔を合はす瀬がない罪人の一人であると思つてゐたが、情力のお蔭で平日と同じやうに従容と高座の自席に就き足を又構へて鼻眼鏡を弄くつてゐた。

被告は一端退廷を命ぜられたが、再び呼出された。法廷には新顔の證人が見えた。其中の一人で勾欄の前の腰掛に就いたは頗る肥満した女で、此女をマースロワが眼も離さずに見てゐるのをネフリユードフは早くも気が付いた。天鵝絨と絹とを裁合はした華美な衣服に、仰山な飾を付けた帽子を被つて、眩まで露出しの腕に綺麗な小さい網袋を下けてゐた。此女は證人の一人、マースロワが勤めてゐた妓樓の女將である。

證人の審問が始まつた。先づ其氏名宗教等を訊問した後、是等の證人の審問に先だちて宣誓せしむべきや否やを副檢事達に諮つてから、例の老僧は危なツかしさうに足を引指りつゝ來

て、再び胸の金の十字架を指さしつゝ證人及び鑑定人等を宣誓せしめた。前と同じく悠然と沈着拂つて非常な一大事でも行ふやうな態度で。

證人は悉く宣誓してから再び退廷した。妓樓の女將のキターエワだけ残つて此事件の顛末を知れる限り訊問されたが、一句毎に仰山に大きな帽子を動かさしつゝ頷いて、虚々しく微笑しながら、甚だしい獨逸訛りのある調子で詳しく陳述した。

先づ初めには兼てより見知越の旅館のシモンといふ男が來て、西伯利亞の金持に女を一人見立てゝ呉れと云ふ頼みでリユードフを遣りました。暫らく經つてからリユードフはお客を伴れて歸つて來ましたが、其お客は大變な逆上せやうで有頂天になつてました——と云つて微笑し——夫から御酒を飲んだり娼妓を總揚けしたりしましたが、持合せのお金が失くなつたのでリユードフを旅館へ取りに遣りました——餘程惚くなつたから這般な片手落な最負をしたのですワネーと云ひつゝマースロワを流盼に見た。此時マースロワも矢張微笑したやうで、ネフリユードフは堪らなく不快な氣持がして、何とも形容出來ない一種奇妙な不愉快の念が心中の苦

悶と混雑になつてムラ／＼と胸中に湧いて来た。

『元來マースロワは如何な女だ？』と若い辯護士は少と緘白みながらキターエワに訊くと、『頗るつきの上玉でムいますワ』とキターエワは答へた。『容貌が美しくて藝が何でも出来るんです。上等社會の中で育つたツてますが、佛蘭西語まで知つてるンですからネ。御酒も随分飲ける方ですが、前後を忘れるやうな其様な事ア決してムいませんワ。眞個に調子の好い子でムいます。』

カチユーシヤは此時まで一心は女將の顔を見てゐたが、俄に視線を陪審員に轉じてネフリユードフを見ると、忽ち眞面目に屹となつた。ネフリユードフは思はずヒヤリとしたが、見當の違つた眼で睨めらるゝと知りつゝも怎うしてもツヤツヤした白目を避ける事が出来なかつた。

偶つと彼の物凄かつた夜の景色が胸に浮んで来た。一面に狭霧に閉ぢられた中に川の氷の罅裂れる音が聞え、片割月の下弦が明方近く霧を破つて淋しい光を薄暗く朦朧した怪しい物の影に投じた景色が眼の前に顯然として、現在睨み付けられてる此の二つの黒い瞳が其夜の恐ろし

い物の形を思出させた。

『カチユーシヤは氣が付いたナ』と思ふと俄に空恐ろしくなつて、宛も打つて掛らうとする拳を避けるやうに思はず後ろに引退つた。が、カチユーシヤは矢張ネフリユードフに氣が附かないので、聽て吻と溜息を吐きつゝ再び視線を裁判長に轉じた。ネフリユードフも亦歎息を吐きつゝ、『テキバキ進行して貰ひたいもんだが——』と心中に思つた。

此時の感情は、例へば獵に行つて首尾よく鳥を射留めは射留めたが殺し損なつたと同じ鹽梅で、負傷をした鳥が獲物袋の中に苦んでるものを見るのが極めて不快でもあるし可憫相でもあるし、寧ろそ一と思ひに殺して了はうかと煩悶すると同様の減茶苦茶な感じが證人調を聞いてるネフリユードフの心に一杯となつてゐた。

第二十回

處がネフリユードフの註文通りに行かず、審問は中々長く引張られ、證人は一人宛別々に調

べられた。一番末が鑑定人で、副検事や辯護士から宛も一大事のやうに無用な質問を山の如く試みられてから後、裁判長は漸く證據物件として提出された品物調べを陪審員に請求した。其中には小さな金剛石を幾許も嵌めた花彫の指環があつた。確かに食指に穿めてゐたもんだらう。夫から毒物を分析した試験管があつた。何れも封印を施こし一々紙を貼付けてあつた。

愈々陪審員が證據調べに掛らうといふ時、副検事は起立して證據調べに先立ちて検屍調書の朗讀を請求した。

裁判長は一刻も早く裁判を済まして可愛い瑞西の女に會ひたいばかりでなく、検屍調書の朗讀は列座の面々を哀屈させて晩飯時を遅らせる外何等の效のないのを知らないではないが、此朗讀を請求するは副検事の職權であるから許すより外仕方なかつた。

書記は再び起立してRとLを同音にした舌の廻らぬ聲で醫師の検屍報告を讀上げた。先づ身體外部の調書は次の通りであつた。

『(一)スメルコーフの身長は六呎五吋なり。』

『見事な男でけすナ、』と例の元氣者の紳商は頗る興がつてネフリユードフの耳に私語いた。

『(二)年齢四十歳前後と見えたり。』

『(三)全身悉く水腫を生じたり。』

『(四)皮膚は濃藍色を帯び諸處黒斑を生じたり。』

『(五)身體諸處大小一様ならざる發胞を生じて其中壞裂したるものもあり。』

『(六)毛髮栗色にして濃密なり。手を觸るれば容易に脱毛す。』

『(七)眼球は眼窩より脱出して角膜は暗色を呈せり。』

『(八)鼻孔、耳腔及び口より薄き鼠色の粘液を分泌し、且半ば口を開きたり。』

『(九)頸は顔面及び胸部の腫脹のため殆ど區別し難し、云々。』

四頁二十四行の詳細なる検屍調査はツイ此頃此町で盛んに浮れた西伯利亞商人の大きなデブぐと水脹れのやうになつた死體の外貌を顯現と説明した。ネフリユードフは之を聞くと、去らぬだに最前からの不快な心持が太と愈増して、カチューシャの賤しい渡世、鼻や耳や口か

ら流れ出した粘液、眼の窩から飛出した眼球、夫や是やは昔し己れがカチューシャに對して振舞つた非道の行爲と同じ種類、同じ性質のものらしく、八方から似たり寄つたりの汚穢ないものに取捲かれて其中に吸込まれて了ひさうな氣持がした。

外部の検屍報告が漸く濟んだ時、裁判長は吻と息を吐き、先づお終ひになつたと面を上げると、其途端に書記は續いて内部の解剖報告に移つたので、裁判長は再び首を垂れて眼を閉ぢた。ネフリユードフの隣席の商人君は頻りに眠氣が催したと見えて彼方へ寄つたり此方へ寄つたりコクリコクリと船を漕ぎ出した。被告と憲兵とだけは凝然と沈着き濟ましてゐた。

内部の解剖報告は次の通りであつた。

『(一) 腦蓋骨の皮は容易に骨より分離して、血液の凝固したるを見ず。

『(二) 腦蓋骨の骨は適度の厚味ありて完全したり。

『(三) 腦膜は鈍色を帯びて直徑四吋の變色したる斑點二箇所を有せり、云々。』

其他十三ヶ條あつた。

其末に助手の記名調印があつて、最後の醫師の検案書には死後の檢視報告其他の書類に明記されたる胃中の變化及び腸並びに腎臓中の小變化に由てスメルコーフの死亡が胃中のアルコールに混じたる毒に基因する事略ほ明確なりと論結してあつた。勿論胃の状態から推して其毒の何であるかを決定するのは困難であるが、胃中に大量のアルコールが存在したのを以て其毒のアルコールに混入して胃に入つたのは明かであつた。

『一服盛られたのサ、夫に違エねエ、』と商人君は漸つと眼を攪ますと同時に呟いた。

此報告の朗讀は小一時間掛つたが、副検事は尙だ中々満足しないらしく、裁判長が『内臟解剖の報告を讀ますとも十分でせうナ?』と云つても、副検事は慄ともせず、裁判長を願ひもしないで嚴乎とした調子で、

『本官は朗讀を請求します。』

と云ひつゝ少しく身を起して、自分は此報告朗讀を請求する権利があるから其権利を主張するので、若し裁判長が許可しないなら之を廉に控訴する権利があると云ふ意氣込であつた。

胃加答兒を憂つてる鬚の判事は誰よりも此朗讀に惱まされて裁判長に向ひ、

『一體何の必要があつて那樣な長たらしいものを朗讀するのだ？ 時間を引張るだけぢやアな
いか。夫だから新らしい帚木は掃除をする役に立たんで暇潰しだけだといふんだ。』

金縁眼鏡の判事は何にも云はずに鬱々と面白からぬ顔して前の方を睨んでゐた。現在の細君
とさへ面白からぬ匪合をしたものが所詮世の中から好い消息を聞かう譯もなく何面白からう筈
もないのだ。

報告の朗讀は再び始まつた。

『千八百八十□年二月十五日醫務局より命じられたる下名は——』と書記は再び嚴然として滿
庭の面々を襲ふ睡魔を追拂はうとして故更に大きな聲を張上げ、

『検屍官助手立合の上第六百三十八號の内臓檢視調書を作る——』

『(一)右肺及び心臓(六磅硝子壘入)』

『(二)胃の含有物(六磅硝子壘入)』

『(三)胃臓(六磅硝子壘入)』

『(四)肝臓、脾臓、腎臓(九磅硝子壘入)』

『(五)腸(九磅陶製壘入)』

爰まで讀掛けた時、裁判長は一人の同僚に耳語り、又最一人に身を屈めて同意を得ると共に
直ちに宣言した。

『法庭は此調書の朗讀を無用と認めて中止を命ず。』

書記は直ちに朗讀を中止して紙を疊んで了つた。副検事は勃然として何事かを紙へ書付け
た。

裁判長は更めて、

『陪審員諸君は證據物件を一々御調べ下さい、』と云ふと、陪審員長始め一同は立つてテーブル
の側へ行き、指環や硝子壘や試験管を見たが、怎うして調べて宜いのか全然解らなかつた。

紳商バクラシヨフ君は件の金指環を穿めて見て、

『此奴ア大きな指だ、』と笑止しさうに笑ひながら、『全て胡瓜でけすナ、』と、被害者スメルコーフの馬鹿馬鹿しい大男であつたを心中に想像して面白がつてゐた。

第二十一回

證據調べが終つてから裁判長は其終結を報告して直ちに副検事に論告を命じた。且副検事も矢張人である以上は烟草も喫みたらうし、食事もしたからうから、成るべく他人の情をも察して貰ひたいと希望した。が、此男は他人にも自分にも忍んで一向容赦なく其様な同情は少しも無かつた。元來性質が愚鈍である處へ、氣の毒な事には中學を卒業するとき金牌を貰ひ、羅馬法の地役論に關する大學卒業論文でも褒美を取つたので、先生大に増長して大天狗となり澄ました。其上に又婦人連に款てたのが毒になつて到頭圖抜けの大愚鈍となつて了つた。

扱て論告を許されたので、副検事どのは悠々と起立し、金モールの縞をした制服に堂々たる威儀を作つて、片手を卓上に突いて四邊を見廻しつ、少しく頭を下けて被告の視線を避けつゝ、

検屍調書の朗讀最中に準備した辯論を初めやうとした。

『陪審員諸君。諸君の前に今提起されたる事件は本官をして云はしむれば現代の最も特徴ある犯罪であります。』

副検事どの、考だと、夫子自身の辯論は後年赫々の名を揚げた著名な辯護士の著名な初辯論と同様に常に必ず公衆の注意を牽くものだと思つてゐた。處が實際當法庭の傍聴人と云つたら、針妙と炊婦とシモンの妹と、夫から辻馬車の馭者と唯ッだ四人だけしか無いのだが、其様な事は一向お關ひなしで、著名になるのは恁んな場合だと思つてゐる。博學多識を鼻に掛けて犯罪の心理的原因の奥を搜り、社會の病患を赤裸々にして示すが此男の得意であつた。

『陪審員諸君。諸君の眼前には極めて奇異なる犯罪がある。本官をして云はしむれば十九世紀末の特徴を具へた犯罪で、此の慘憺たる社會現象の有らゆる各特徴を有してゐる。此特徴や一言以て覆へば現代社會の腐敗で、一度此事件をX光線の下に照せば社會の各要素盡く侵蝕されざるはない——』

此前口上で長々と、腹案の箇條を一つも漏すまいとし、凡そ一時間と十五分少しも淀みなく滔々と流るゝやうに遣つて退けた。

其間、唯ツた一度休んで、暫く唾を呑んで立つてゐたが、聽て精力を集中して前よりは更に雄辯滔々と一度に盛り返した。或時は右へ歩いたり左へ歩いたりして、陪審員を見ながら柔しい猫撫聲をしたり、或時は手帳を見ながら妙に沈着冷ました俗吏然たる聲を出したり、或時は傍聽人から辯護士へ眼を配つて叱り付けるやうに故と聲を張上げたりした。が、己れに視線を集むる被告等三人の方は避けて決して見なかつた。

近來渠等法曹社會に頻りに流行つてゐる新しい癡狂の名や外學的知識の術語は少と古臭いのも出来立てのホヤ／＼も總括めて盡く辯論中に列べ立てた。例へば遺傳、先天的犯罪、ロンプロッ及びタード、進化及び生存競争、ヒプノチズム及び催眠暗示、シャルロット及びデカダ等。

此説明に由ると、商人スメルコフは時代の進歩に伴はない質朴正直なる生一本の露西亞人

の典型で、人に欺さぬ易い寛大な好人物であるゆゑ、墮落社會の惡漢の手に乗せられて非業な最期を遂げたのである。

シモン・カルニチンキンは奴隸制度の困襲の惡徳を受けた產物である。無知文盲で、物の道理も解らない、剩つさへ無宗教の白者である。ユウフェミヤは其情婦で、矢張遺傳の犠牲で、墮落者の特徴を悉く具へてゐた。又此事件の重なる縦縦者のマースロワは即ちデカダンの好標本で、最も下劣なる墮落を體現してゐる。

『此女は、』と副検事はマースロワを見つゝ、『唯今抱主が當法庭に證言した如く、此女は立派な教育を受けてゐる。嘗に露西亞語を讀み又書き得るばかりなく佛蘭西語をも知つてゐる。然るに此女は孤兒であつて、生れながらにして罪惡の芽を身に宿してゐる。生れ落ちると直ぐ立派な身分ある家に引取られて養はれたのだから、正直にさへしてゐたなら正常な生活を送る事が出来たのである。然るに其恩人を捨て、己れが自墮落をしたさに身を持壞して、好き好んで妓樓に身を沈め、他の娼妓と變りて教育のあるのを賣物にし、陪審員諸君も今抱主の陳述した

のを聞かると通り、一種の不思議なる魔力で客を騙した。此魔力を近頃の科學者殊にシャルコート派の學者は研究して催眠的效果と稱してをる。此の如き一種の魔力で好人物の佛何兵衛とも云ふべきお目出度い金持の西伯利亞人を掌中に丸めて。金を奪つた上に無残にも毒殺したのである。』

『吹立てるナア、』と裁判長は微笑しつゝ、首を屈めて厳格な同僚判事に笑耳語いた。

『馬鹿ッ面だナア!』と厳格な同僚判事は云つた。

副検事は再び辯論を續けた。

『陪審員諸君、』と威儀端然として細い腰を前に屈めつゝ、『諸君は嘗て是等被告の運命を掌中に握つてをらるゝばかりではない。諸君の決定如何に由つては或度までは社會の運命を動かす事が出来る。願くは此犯罪の性質を十分御合點ありて、吾々が病的人物と假稱するマースロワ如きものゝ爲め社會が如何に毒毒さるゝかを御勘考ありて其危険を豫防し、健全無垢なる社會の分子をして此病毒に感染し、之が爲めに破滅を生じないやうに保護して、社會をして此危険

から隔離せしめん事を希望します。』

と、陪審員の決定の重大なるを大袈裟に吹立て、御當人までが吹倒されたかのやうにドツカと自席に就いたが、自分の辯論の出來榮を満足した大得意の色が歴然と満面に現はれた。

此の形容澤山に飾立てた辯論の意味は、マースロワはお客の商人を巧く綾なして迷はし、其所有金を卷上げやうとして鍵を持つて旅館に行き、宛も犯罪を行はうとした時シモン及びユウフエミヤに見咎められて、餘儀なく三人して贓金を分配し、且罪跡を蔽はん爲めに再び商人を旅館へ伴ひ歸りて毒殺したと云ふに過ぎないのである。

副検事の辯論が終つてから、胸開きの廣い燕尾服の胸衣の下から眞白な蠟引の襦衣が見える中年の紳士が辯護士席から起立して、カルニチンキン及びボーチコワの爲めに辯護した。此辯護士は三百圓で二人に雇はれたので、二人ながら全然無罪だと主張し、マースロワ一人に罪を被せて了つた。マースロワが鞆から金を出した時兩人が立會つたとマースロワが陳述したのを悉く非認し、毒殺の嫌疑を受けた犯罪者の證言は何等の價值が無いと極力主張した。又ボーチ

コワが銀行に預金した一千八百圓は正直律義な兩人が毎日旅客から貰う三圓乃至四圓の祝儀を溜めたので、金を盗んだのは全くマースロワ一人である。勿論マースロワは常識を喪つてゐるから、贓金は誰かに遣つて了つたか、或は失くして了つたかも知れない。毒殺一條に到つては無論マースロワ一人の仕業であると云つた。

で、此理由から辯護士はカルニチンキン及びボーチコワの竊盜犯を放免せられたいと陪審員に乞ふた。若し又竊盜犯が全然否認出来ないから、之だけは止むを得ないとしても、毒殺には全く關係ない事を承認願ひたいと云つた。

副検事の論告に對しては辯護士は下の如く答辯した。曰く、此の學識ある紳士の遺傳に關する大議論は十分に科學的研究の説明を盡して餘蘊がないが、ボーチコワの如きは兩親共に不明なれば適應すべき限りでない。

副検事はブリ／＼しながら紙片に何事か書留めつゝ、左も辯護士の得意滿面を輕蔑するやうに肩を聳かした。

マースロワの辯護士は續いて起立した。些と氣怯れた氣味合で躊躇しながら辯護を始めた。金を盗んだ一條に就ては更に打消さないで、唯毒殺一方ばかりの辯護をして、無論藥劑を薦めた事實は有つても謀殺の意志は少しも無く、全く眠らせやうばかりに藥を與へたのだとクド／＼と主張した。で、更に進んで、マースロワが斯の如き不徳の生活に墮落したのは、抑も無垢なる處女時代のマースロワを誘惑した男の罪であるに關らず、此の誘惑をした男は少しも罪せられないで女ばかりが墮落の罪過を一身に脊負つて了ふといふは社會の不公平であると、稍や意氣込んで辯じ立てた。が、此の心理學の範圍に踏込んだ辯論は甚だ奮はしないで誰も彼も皆意屈して了ひ、世間一般の男の輕薄や女の心弱く腑甲斐ない事をモグ／＼辯じ立てた時は、裁判長は事件の事實以外に走らぬやうにと注意さへした。

此辯護が終るや否、副検事は再び起立した。先づ最初の辯護士に對して、ボーチコワの父母が不明であらうがあるまいが遺傳説の眞理は明々白白争ふべからず、今日の科學の進歩にては遺傳より犯罪を推定し能ふのみならず、犯罪からして遺傳を推定する事さへ出來ると反駁した

マースロワの辯護士に對しては、縱令マースロワが其初めに或る想像したる（と此「想像」と云ふ語に力を入れて）誘惑者に欺かれて墮落したにしろ、現在の事實には何等の關係が無い、目前の證據より云へばマースロワ自身が却て其手中に落ちたる犠牲（即ちスメルコーフ）の誘惑者であつたは燎々明かである、と云つて仕たり顔に着席した。

續いて被告等は各々自身に辯論すべく許されると、

ボーチコフは再び己れは何等の關係がなく、何事をも知らぬ存せぬと繰返してマースロワに悉く罪を被せた。

カルニチンキンも矢張同じ事を何度も繰返して、

『そりやア何とお思召さうと旦那方の御勝手でもムリですが、全く以て飛んでもねエ事で、手前は一向記憶が、へい、ムリやせん。憚んながら少と御無理なお捌きかと——へい、』

マースロワは何にも何はなかつた。裁判長が十分に辯明したが宜からうと云つても唯だ面を擧げて四邊を見廻したばかりで、再び首を垂れつゝヨ、と聲を上げて泣いた。

此慘澹たる光景を見るに見かねたネフリユードフは迫ぐり来る涙に堪り得ず思はず鼻を塞りするを、隣席のバクラシヨーフは氣が附いて妙な顔をした。

『怎うなすつた？ エツ、怎うしたのでけす？』

怎う訊かれると、ネフリユードフも我身で我身が實は解らず、何故如此に悲しくなつたか、其理由は解らなかつたが、唯だ何かなしに胸が一杯になつたのだ。之といふは畢竟氣が弱くて女々しいからだ、涙を秘さうとして鼻眼鏡を掛け、ハンケチを出して頻りに鼻を拭んだ。が、此時のネフリユードフは矢張自分の昔日の不行跡が露顯れはせぬか、若し滿庭の人達が知つたなら如何なる不面目が自分の頭上に落ちて來るだらうと、夫ばかりが心配で、此心配が何よりも恐ろしかつた。

第二十二回

被告等の最後の陳述が終つてから、陪審員の審議に移す諮問項目の形式を議するため若干時

を費やし、臆て出来上つたので、裁判長は全體を概括して説明しやうとした。

で、愈々陪審員に審判を附託するに先立ち、裁判長は極めて快活に且慇懃に説明した。曰く強盗は強盗である、竊盜は竊盜である、鎖鑰のある場所より盜取したのは鎖鑰のある場所より盜取したのである、鎖鑰のない場所から盜取したのは鎖鑰のない場所から盜取したのであると。此説明中裁判長は度々ネフリユードフを願ひいて、宛も君だけは此重大な眞理を特に會得して貰ひたい、若し又合點が行つたら君の同僚にも能く理解まして呉れと頼むやうであつた。で、陪審員連が十分會得したと見ると、裁判長は更に一步を進めて、殺人とは其結果として人間の死を生ずる行爲である、随つて毒殺は又殺人である事を説明し、再び此眞理が陪審員の腑に落ちたと見てから、此故に竊盜及び殺人が同時に行はれた場合には竊盜及び殺人の俱發を以て罪を論すべきものである、と説明の追加をした。

裁判長は成るだけ早くお終ひにしたかつたのだ。可愛い瑞西の女が定めし待草臥れてるだらうと思ふと氣が氣でないが、有繋に職務に關係はるとツイ時を忘れ、一と度口を開いたら中々

止められないで、十分合點が行くやうに愈々精しく説明しやうとして、若し被告を有罪と認めたら有罪の決定を與へ、若し無罪と認めたら無罪の決定を與へ、若し一の犯罪を認めて他の犯罪を認めないなら一方に有罪で他方に無罪である決定を與へるべき權利がある事を細かに説き、且此權利は陪審員に與へらるゝが故に願はくは道理に由つて此權利を行はん事を希望し、更に又如何なる條項に就ても單に確認を與ふる時は其條項中に含まれたる各項を悉く確認するものと見做す故に若し此條項の全部を確認せざる時は明かに何々の廉を除きて確認すと云はざるべからずと注意した。

此時、偶つと時計を見ると最う五分で三時だから、此上の説明は省略して左までに精しく説明しないでも思慮分別ある陪審員は必ず十分合點してゐるものと決めて、扱て本問題に入つて、『此件の眞理は次の通りである、』と檢事や辯護士や證人やが數回辯論陳述した事實を繰返し反覆して一々精しく説明した。陪審員連は勿論熱心に謹聽してゐたが、有益にしろ、イヤ有益には違ひあるまいが、少と長過ぎるのに閉口して始終時計を出して見た。辯護士、檢事を初め

法廷に列なる面々は皆同感であつたが、漸とこさとお終ひとなつた。

之ほど丁寧周匝を極めたのだから何も彼も遺憾なく言盡したやうだが、裁判長は尙だ中々自分の發言權を停止する氣になれなかつたは、人を感動する力のある自分の聲を聞くのが自分ながら如何にも心持快かつたからで、尙だ尙だ云ひ洩らした肝腎要めの事——即ち陪審員に與へられたる權限の重大なる事、陪審員は其權利を行ふに細心周密なるべき事、決して濫用せざるべき事、及び法廷に行ひたる渠等の宣誓は重んずべき事、竝に渠等は社會の良心なる事、會議室の祕密は神聖なるべき事等を諄々と反覆して説明した。

裁判長が説明を仕初した抑もの瞬間から、マースロワは一語をも聞漏らさじと一心になつて裁判長を凝視めてゐた。其お蔭にネフリユードフは相互の眼と眼が衝突る心配なしにシゲくとマースロワを見てゐた。

誰でも暫らく會はなかつた人に邂逅はすと何よりも先づ年來別れてゐた間の容貌の變化に驚くもんだ。けれども暫時凝視めてゐると年の移り行くに伴れた變化は次第々に失せて段々と

昔の面影を現じ、各自の特異の相貌が自づから歴然と心眼に映じて来る。

身には獄衣を着けてゐやうと、身體に鱧が出来て胸幅が廣くなつてゐやうと、前額から額へ小皺が出来てゐやうと、腫れ眼縁の下服れ顔になつてゐやうと、カチューシヤは矢張カチューシヤ——復活祭の夜の嬉しさに充滿した活き／＼した愛嬌のある眼で戀する男を無邪氣く見上げた時のカチューシヤと同じカチューシヤである。

『不思議な因縁もあるもんだ。何年か會はずにゐて、陪審員で出庭した今日といふ日に這般な事件が持上つて、罪人席に坐つてゐるカチューシヤに再會しやうとは實に思ひ掛けなかつた。怎う結着が着くものだらう？ 何卒成るだけ早く落着を附けたいものだがナア！』

だが、ネフリユードフの心中には、漸と後悔の芽を萌したといふがけで、尙だ中後悔に負けて了はず、飽くまでも唯の一時の出來事と信じ、時さへ経てば忽ち消えて了つた、自分の一生には何の影響もないものとはかり思つてゐた。例へば悪戯をして主人に首根ツ子を押し入れた小犬が鼻の頭を板の間に摩られて、キャン／＼鳴いて折檻を逃げやうと悶躁いても後退りし

ても、無慈悲な主人が中々放して呉れないやうなもんだ。ネフリュードフも己れが従來の不行跡には愛想を盡かし、恰も首根ツ子を眼に見えぬ大威力の手に押へつけられたやうな気がしないではないが、併し實を云ふと何故如此な目に會うものか、自分の罪業が夫程重いと云うしても思はれない。現在眼前に横はる事件を己れが過去の業の産出したものとは怎うしても信じたくなつた。唯何がなしに或る大威力の慈悲もなき手に取つて押へられて怎うしても逃げられぬと観念したばかりであつた。勿論、本來の元氣は猶だ少しも沮喪しないで、矢張平日の通り泰然として第一列に座し、無造作に足を交叉しつゝ、鼻眼鏡を弄くつてゐた。が、其間絶えず心のドン底では嘗に此一條ばかりでなく、是迄の怠慢懦弱な放蕩無頼な生活の卑怯未練、陰忍酷薄を身に染みて感じ、既往十年の罪惡を得知れぬ魔術で自ら欺いて包み終せた恐ろしい幕が今や漸く動き初めて、幕の中の慘澹たる光景がチラリホラリと瞥見されるやうな心地がした。

第二十三回

裁判長は説明を終つてから陪審員に諮問する項目の廉書を手に持つて、故と嚴べらしく勿體振つて、彼方より進んで請取りに來た陪審員長に交附した。

陪審員は何よりも評議室へ寛ぎに行かれるのが嬉しくて、一人一人に莞爾莞爾者で席を離れ、何だか羞恥のさうな風をしつゝ之から先き怎うして宜いのやら無我夢中で順々に法庭を退いた。

陪審員が退庭して園が閉められると同時に、憲兵はキラリと劍を抜いて肩に捧げつ、突と進んで戸口を警戒した。續いて判事連も席を起ち、被告も亦庭外へ引出された。

陪審員等は評議室に入ると、前と同様、先づ第一に紙笈を燻かし初めた。法庭に列してゐる間は誰も彼も柄に無い演劇をしてゐるやうな心地がして何分尻が落着かなかつたが、評議室に引退つて紙笈を一服喫つてから初めて吻と息を吐き、漸く肩抜けがした氣になつて俄にガヤ／＼

と饒舌り出した。

『彼の女の知つた事ツちやアねエ。可憫相に速累を喰つたんでけすぜ、』と好人物の紳商君は云つた。『思切つて寛典を加へてやらざアなりませんめエ。』

『そこが大に考へ物だテ、』と陪審員長は勿體らしく、『個人の感情の爲め偏頗つた判決をしてはならぬからノウ。』

『裁判長の説明は大出来だツた哩、』と退職大佐は云つた。

『大出来！ 何が大出来！ 此方は眠くなつて堪らなかつた。』

『先づ一番の目の着け處は、若しマースロワが共謀しないなら、旅館の傭人達が金の有處を知りやう筈がないぢやアないか、』と猶太人の店商人は云つた。

『すると君はマースロワが金を盗んだ發頭人だと云ふんだネ？』と一人の陪審員は云つた。

『俺やア爾うは思はねエ、』と何處までも親切な紳商君は云つた。『一から切まで彼の赤眼玉の極道婆の小細工に極つてらアな。』

『悉皆臭い哩。一つ穴の曲者ぢや、』と大佐君は云つた。

『だが、あの赤眼玉の婆は被害者の座敷へ入らたら云ふぢやアないか。』

『彼の婆が何云ふか。阿呆らしい、那樣な奴の出鱈目を眞に受けて怎うなるもんか。俺やア金輪際信じませんや。』

『貴君が信じると信じないと此問題を決定する譯に行きませんナ、』と店持商人は云つた。

『そぢやがノウ、あの若い女郎が鍵を持つたのぢやナ、』と大佐君は云つた。

『持つてれば怎うするンでけす？』と紳商君は勃然となつた。

『夫から指輪もぢやテ？』

『指輪は女が陳述した通りぢやけエせんか、』と紳商君は息巻荒く、『スメルコフと云ふ奴が全體一風變つた變挺れんな奴で、御酒の廻つた勢で女を打擲した事はしやしたが、そこは根が善人でけすから氣の毒になる。是りやア左もあるべき筈、當然でけすテ。そこで氣の毒になつたから、一氣に掛けて呉れる勿、和睦の印に與るぞ、』と平詫まりに詫まつて指輪を呉れたんでけす

ぜ。能く有る奴でござア。處で六尺五寸の大男だつてやすから、大丈夫三十貫以上の貫目があつたでせうが、其の三十貫以上の大男の力で……』

『其様な事は問題にならない。』と學校の先生のビョートルは云つた。『問題は此事件を發意し若くは教唆したのは彼の女か、或はホテルの雇人か何方かと云ふのだ。』

『だが、ホテルの雇人達ばかりでは出来ぬ仕事ぢやといふは彼の女が鍵を持つてたんぢやからネ。』這般な埒もない小田原評定が暫らく續いた後、陪審員長は言葉を更め、

『諸君、之から討議に掛りますから、何卒各々御着席なすつて十分に御意見を仰しやつて下さい。』と陪審員長は自ら議長席に就いた。

『那樣云ふ茨掻きの阿婆指は何でも行りかねまじだ。』と店持商人は此事件の主犯が確かにマースロワである意見を證據立てやうとして、自分の友達が大通りで美人の拘盜に時計を掏り取られた咄をした。

退職大佐は更に之よりも甚だしい例、即ち銀のサモワール(湯沸し)を矢張同じ質の毒婦に盡

まれた一件を話した。

『諸君』と陪審員長は鉛筆でテーブルを叩きながら『之より諮問の項目を一々讀上げますから御注意を願ひます。』

一同は静まり返つた。

諮問の條項は次の通りである。

(一) クラビエンスキー郡ボールカ村の農シモン・カルニチンキン三十三歳は他と共謀して千八百八十〇年一月十七日商人スメルコーフに毒酒を與へて謀殺し且凡そ二千六百圓(ルブル)に該當する金員及び金剛石入り指輪を盗取したり、此犯罪は確認すべきや？

(二) 平民ユウフエミヤ・ボーチコワ四十三歳は亦前項同罪なりと確認すべきや？

(三) 平民カテリーナ・マースロワ二十八歳は又第一項犯罪と同罪なりと確認すべきや？

(四) 被告ボーチコワの第一項犯罪に就き若し其全部を確認せざる時は、千八百八十〇年一月十七日マヴリターニヤ旅館(ホヤル)に被傭中宿泊の旅客スメルコーフ所有の鎖鑰したる鞆より其目的を

以て齎らせる贖金を用ひて解鎖して二千六百圓を盗取したる一部の犯罪のみを確認すべきや？
以上の四項であつた。

陪審員長は先づ第一項を讀上げ、

『諸君、諸君の御意見は？』

此諮問は何の議論も面倒もなく即座に『有罪』と速決してカルニチンキンが毒殺にも竊盜にも關係した事を一同確認した。唯つた一人、職工組合頭取の老人だけが無罪を主張した。陪審員長は、此奴必定理由が解らないのだナ、と考へて、カルニチンキンの犯罪に關する事項を一一反覆して聞かした。處が、老爺は十分解つてるのだが、何處までも慈悲を加へてやらねばならぬ、『吾々は皆聖人でない、』と剛情に主張し、何と云つても持説を曲げなかつた。

第二項のボーチコワでは議論が中々に喧ましかつたが、結局辯護士が剛情に主張した通り毒殺の證據は頗る不十分だと云ふ事に歸して、無罪と一致した。例の紳商君だけはマースロワを放免したい計りに、此事件の主犯は疑ひもなくボーチコワだと云ふ説を極力主張した。多勢の

中には無論此説に賛成したものも多かつたが、法律一點張の陪審員長はボーチコワを毒殺の主犯と認める根據が少しも無いと堅く執つて動かさず、散々評定を凝らした末、到頭其説が勝利を得た。

第四項の同じくボーチコワに關する一條は直ぐ有罪と認めて了つたが、例の老爺の職工組合頭取の主張で寛大な沙汰を乞ふ事に決した。

第三項のマースロワでは非常な大議論が沸騰した。陪審員長は毒殺竊盜二罪ともにマースロワが關係してゐる事を主張し、紳商君は之に反對した。休職大佐、店持商人、職工組合頭取は何れも紳商君の肩を持つたが、殘餘の連中は曖昧にグラ／＼してゐたので、結局陪審員長の説が成立し掛つたのは強ち此説が理由があるからでなく、陪審員連が何れも意屈して了つて、何でも關はぬから少しも早く結局を附けて自由の身體になりたかつたからである。

此事件の顛末から考へても、昔し知つてるマースロワの性質から推しても、ネフリードフは堅くマースロワの無罪を信じてゐた。殺人にも竊盜にも何の關係もないのは明々白々で、彼是

れ云ふまでもなく陪審員連中は悉く無罪説に一致して了うと信じてゐた。然るに紳商ベクラシヨーフの下らぬタワイもない辯護説と、(此剽奪者がマースロワの美貌に悉皆打込んで了つたのは心に包み切れないで顯現と顔に出してをる。)陪審員長の剛情一徹の理窟で一同は倦き／＼して了ひ、何でも關はぬからマースロワを罪人と決めて了はうとする形勢を見て、ネフリユードフは堪らなくなつて一と議論しやうとしたが、若しやマースロワを辯護し過ぎて昔しの關係が氣取られやしまいかと云ふ心配が先に立つてツト躊躇した。が、此場合は逆も這般な悠長な沙汰ではないと、斷然勇氣を鼓して自分の意見を吐かうとして赤くなつたり青くなつたりしてゐる最中、學校教師のビョートルは突然座を起つて叫んだ。

『暫らく、異議が有ります。』

ビョートルは今まで黙つてゐたが、陪審員長の横柄顔が小癩に觸つて異議を容れやうとして、丁度ネフリユードフが云はうとしたと同じ事を云つた。

『暫らくお待ちなさい。陪審員長はマースロワが鍵を持つたのが竊盜罪の何よりも有力な證

據のやうに考へられるやうだが、ホテルの雇人共は何もマースロワの鍵を借りなくたつて、マースロワが去つて了つた後で質鍵で靴を開けた方が餘程世話なしぢやアないか。』

『でけすとも——でけすとも、』と紳商君は云つた。

『第一マースロワは金を盗む筈がない。境涯が境涯だから金を盗んでも怎うする事も出来ない。匿す場所からして無い。』

『其事、其事、俺も其處を云はうと思つた處でけすテ、』と紳商君は我が意を得たりと云ふ調子で云つた。

『畢竟するに、マースロフが偶然旅館の座敷に來たのが災難。悪人奴等は是れ幸ひと巧く機會を利用して自分達の罪をマースロフに塗り付けたのだ、と、斯う鑑定した方が遙かに實際を穿つてやしまいか。』

ビョートルの議論の仕方が如何にも激昂した調子なので、陪審員長も矢張激昂して頗る頑固に反對した。が、ビョートルは陪審員の多數が必ず自分の味方をする頭から呑んで掛つて、飽

く迄もマースロワの窃盗罪は兇狂である、指輪は無論貰つたのだと極力主張した。

夫から毒殺一件が問題となると、マースロワの熱心な辯護人の紳商君は、本とく毒殺する意志がなかつたのだから放免するのは當然だと主張した。が、陪審員長はマースロワ自身に既に薬を薦めた事を自白した以上は放免したくも放免出来ないと言つた。

『ですがマースロワは鴉片劑だと思つてたんでけすぜ、』と紳商君は云つた。

『鴉片劑だつて人命を絶つ事が出来る、』と兎角に問題外に走りたがる休職大佐は喙を容して、自分の義理ある兄弟の妻が鴉片の過量で危なく死なうとした處を漸く醫者が間に合つて助かつたことがあると話した。此話を大真面目で一生懸命に勿體振つて力瘤を入れて話すので、誰しも止めるだけの勇氣がなかつた。其中で店持商人は毎度大佐の話には中てられつけてるので、負けない氣になつて横槍を入れやうとして、

『だが、中には服み慣れて了つて四十滴位服んでも一向平氣なものも有りますぜ。現に私の親戚に——』と話出した。が、大佐は一向辟易まないで、義理ある兄弟の女房の鴉片騒ぎを平氣

で饒舌り通した。

『諸君、最う五時になりますよ。』と一人の陪審員は云つた。

『夫では諸君、怎うしたら宜からう？』と陪審員長は、『マースロワの事實は承認するが、竊盜の意志は毫しも無い、且何にも盗まなかつた——』としたら怎んなものだらう？』

ピョートルは自分の説が勝つたので得意になつて賛成した。

『何分寛大に取計らひたいもんでけすナ、』と紳商君は云つた。

一同は皆賛成した。獨り例の職工給合頭取だけは何としても判然と『無罪』としなければならぬと主張した。

『結局は同じ事になる、』と陪審員長は説明した。『盗むと云ふ意志はない、且何にも盗まない。

夫故に無罪——』と云ふ譯で、極めて明々白々である。』

『夫なら可也、夫で結構。寛大の上にも寛大を願度いのでけすナ、』と紳商君は大御機嫌だつた。

一同は既う意屈して了つた。散三面倒臭い評定で飽きくして、遮二無二速決を急いだの

で、毒殺事件に就ては、マースロワが投薬した事實を承認したゞけで、毒殺する意志なしと云ふ肝腎要めの但し書を如へなければならぬといふ事を誰しも氣が付かなかつた。

ネフリユードフ其人ですから矢張逆上せ返つてゐたから、此手落には少しも氣が付かなかつた。で、答辯書には其通りに『毒殺の意志なし』といふ但し書を抜かしたまゝで法廷に提出する事となつた。

ラベレーの昔話に、昔し或る法律家が事件を決するに當つて、凡そ關係ある法律文は洗ひざらひ悉く引照し、無意味の羅旬法文を二十頁も讀上げてから、扱て愈々といふ時になると骸子を振つて、若し奇數が出たなら被告、若し偶數なら原告の勝利と決定せん事を判事に申告したと云ふ咄がある。

此事件も丁度這般なものである。犯罪の決定は陪審員の總員が盡く一致して認めたからでなく、裁判長が永たらしい説明をしながら斯ういふ場合には『其事實を承認すれども生命を絶つ意志なし』と答へるのだと云ふ肝腎要めの一番大切な注意を陪審員に與へるのを忘れたから

である。休職大佐が問題外の義理の兄弟の女房の鴉片騒ぎを長々と話したからである。ネフリユードフまでが茫然して『生命を絶つ意志なし』と云ふ但し書を抜かしたのに氣が付かなかつたからである。學校教師のピョートルが諮問に對する答辯書を讀上げる肝腎の時に退席したからである。第一、何より彼よりも陪審員一同が怠屈して了つて、何でも關はぬから一刻も早く濟まして了はうと急いだからである。

陪審員は鐘を鳴らした。法廷の扉口を警戒する憲兵は劍を鞘へ納めて退き、判事達も各々自席に復し、陪審員も亦一人々々に着席した。

陪審員長は重々しく容體振つて答辯書を裁判長に提出した。裁判長は受取つて一と目見ると喫驚して同僚に相談しかけた。何故なら陪審員等はマースロワに關する最初の項に——竊盜の意志なし——と但し書を付けて置きながら肝腎の第二項には——生命を絶つ意志なし——といふ但し書を落してあるからで、此答辯書通りだと、マースロワは金は盜まなかつたが何の理由もなく毒殺した事になる。

『何ていふ馬馬けた決定をしたもんだらう、』と裁判長は左方の同僚に耳語いた。『之だと西伯利亞へ流し者だ。何にも罪はないのだがナア。』

『えッ、何にも罪が無い——無罪だつてのかネ？』と小難かしい判事は云つた。

『無罪とも、無罪とも、確かに無罪だ。之は訴訟法第八十七條を適用する場合だ。』（第八百十七條には法廷は陪審員の決定を不法と認めたる場合破棄するを得とある。）

『君は先ア何と思ふ？』と裁判長は最一人の同僚に對つて訊いた。此の柔しい判事は直ぐ答へないで、例の數字のお呪ひをしやうと、自分の前の書類の番號を見て、此番號に或る數字を加へて三で割つて見た。若し割り切れたら一も二もなく裁判長の説に賛成する筈であつたが、生憎割れなかつたので少しく躊躇したが、結局矢張、裁判長に同意して、

『僕も適用説だ。』

『君は？』と今度は又小難かしい判事に尋ねた。

『不可ん、絶対に不可ん、』と此判事は斷乎として首を掉つた。『左もなくてさへ陪審員は兎角に

罪人を放免したがる」と新聞が攻撃しをる。若し法廷が其様な手緩い事したら何と云ふ。怎んな情實があらうとも吾輩は斷じて賛成出来ぬ。』

裁判長は時計を出して見た。『可憫さうだが、怎うしたもんだらう？』と獨語ちつゝ、答辯書を陪審員長に渡して朗讀を命じた。

一同は起立した。陪審員長は右へ歩いたり左へ歩いたりして、大氣取に氣取つて咳拂ひしつゝ、諮問と答辯とを一々讀上げた。

法廷は悉く、書記も辯護士も、イヤ副検事さへが意外の結果に一驚を喫した。被告等には此答辯書の意味が解らぬから、一向平氣に放念してゐた。

一同は再び着席した。裁判長は如何なる刑を適用すべきかを副検事に質問した。

副検事どのはマースロワの犯罪を確認せしめた意外な結果に得意満々として、之も全く自分の能辯の爲めだと自惚れて、意氣揚々として起立しつゝ、

『シモン・カルニチンキンは刑法第一千四百五十二條及一千四百五十三條第四項に照らし、ユ

ウフェミマ・ボーチコワは一千六百五十九條に照らし、カテリーナ・マースロワは一千四百五十四條に照らして各々處分すべきものとす。』

と云つた。此求刑は三人ともに刑の最も重きものに問ふたのである。

『法廷は此決定を識する爲め暫く休憩を命ず、』と裁判長は宣言して直ぐ退廷した。陪審員連は何れも暢氣に立派なお手柄をやつた心持で、仕たり顔に其後から續いて退出したり其處らあたりを逍遙いたりしてゐた。

『飛んでもない馬鹿を行つちまつた、』と學校教師のビョートルは陪審員長と話してゐるネフリユードフの傍へ来て、『何にも罪の無い女を西伯利亞に流しちまうなんて、何の事だ。』

『エツ、何ですと？』とネフリユードフは喫驚して此男の例の癢に觸る馴れ／＼しい態度をも忘れて訊くと、

『何ですつて、君、「生命を絶つ意志なし」と云ふ但し書を落して了つたからナ。書記の話だと、副検事奴は十五年の徒刑に處すると云ひ臭るさうだ。』

『爾うとも、其通りに定つて了つたのだ。』と陪審員長は云つた。

ビョートルはマースロワが金を盗む意志がなかつた以上は殺人を行ふ意志も亦随つて無かつたのは自然の結果だと盛んに主張し出した。

『だが君、今になつて其様な理窟をいふが、我輩が評議室で答辯書を讀上げた時は誰も異議が無かつたぢやないか、』と陪審員長は自ら辯護した。

『其時は僕は在なかつた、』とビョートルはネフリユードフに向ひ、『君は亦アツケラカンと放念してゐたんだらう。』

『私も實は氣が付かなんだ、』とネフリユードフは吻と息を吐いた。

『氣が付かんて事があるもんか。』

『全く氣が付かなかつた。だが、何とかしたら恢復が出来さうなものだが。』

『最も無効だ、終結して了つたんだから。』

ネフリユードフは被告等を見ると、今や運命の決定されんとする彼等は憲兵を背後に勾欄を

前に身動きもしないで凝乎としてゐた。マースロワだけは微笑してゐた。

ネフリユードフは心のモシヤクシヤと撥亂れて來た。今の今までは的確マースロワは無罪放免となつて矢張此町に住へる事と思つてゐたから、之から先きの結局を怎う着けやうと云ふ考も尙だ浮ばなかつた。勿論、今更怎うしやうもないが、西伯利亞へ徒刑になつて了つては全然縁が切れて了ふ。籠の中に悶いてゐる負傷鳥は助かる希望が既う失くなくなつて了つたのである。

第二十四回

果してビョートルの思はく通りであつた。

裁判長は評議室から宣告文を齎つて歸ると、直ぐ次の通り朗讀した。

『千八百八十〇年四月廿八日皇帝陛下ノ勅ヲ奉ジテ當巡回裁判所刑事部ハ刑事訴訟法第七百七十一條第三項、第七百七十六條及ヒ第七百七十七條ノ第三項ニ由テ陪審員ノ決定ニ從ヒテ宣告ス。農シモン・カルニチンキン三十三歳、平民カテリーナ・マースロワ二十八歳ノ兩名ハ刑法第

二十五條ニ照シテ公權及ヒ財産所有權ヲ剝奪シ、カルニチンキンヲ徒刑八年、マースロワヲ徒刑四年ニ處シ、各々西伯利亞ニ於テ服役ヲ命ズ。平民ボーチコワ四十三歳ハ刑法第四十八條ニ照シテ公私ノ特權ヲ停止シ禁錮三年ニ處ス。本裁判費用ハ被告三人各自分擔スベキモノトス。但シ被告等支辨シ能ハザルトキハ國庫ノ負擔トス。證據物件ハ公賣ニ附シ、指環ハ原所有者ニ還附シ、試験用硝子管ハ盡ク破棄ス。』

カルニチンキンは指の股を廣げた手をダラリと垂下けたまゝ、眞直ぐに突立つて頬をビクビクと動かしてゐた。ボーチコワは平氣で沈着き冷ましてゐた。

が、マースロワは此宣告を聞くと同時に眞蒼になつて了ひ、『冤罪です、冤罪です、』とワツと聲を上げて法庭の隅から隅まで響渡るやうに泣出した。『餘りです。何にも悪い事を仕た覚えのないものを、窃盜だの人殺しだのと、思ひも附かない、飛んでもない事を。何にも知りません。今申上げた通りで嘘でも偽りでもない。そんな大それた、飛んでもない事を……』と腰掛に泣類れて歎息上げ、カルニチンキンやボーチコワが退庭しても尙だ泣止まずに動かないので、

到頭憲兵が袖を引張つて無理遣りに引立てた。

『こりや捨て置く事は出来ん、』とネフリユードフは獨語ちつて、胸に洩るゝ懊惱をも忘れて、心も徐ろにマースロワの跡から續いて廊下へ飛出さうとした。唯何となく最う一度マースロワの顔を見たいばかりに。

入口は一杯人集りがしてゐた。辯護士や陪審員は左に右く用事が済んだのを大喜びで、一度にドヤんゝと法庭を退出した。ネフリユードフは仕方がなしに雑沓の透くまで待つて、漸とこさと廊下へ出た時はマースロワは遙か前方へ行過ぎて了つたので、人が怪訝な顔して見るのも關はずに周章てふために追駈けざまに呼留めた。此時マースロワは最う泣止んでゐたが、尙だ啜泣をしつゝ涙に赤らむ活きてる空の無い顔を手巾の端で拭いてゐた。が、ネフリユードフの呼留めたには一向氣が付かずにトットと行つて了つた。

ネフリユードフは仕方がなしに小戻りしつゝ、今度は裁判長に面會しやうと急いだ處が、最う既つくに退庭して了つた後なので、周章てゝ玄關まで追駈けて、丁度薄鼠の外套を引掛け銀

の把柄のステッキを給仕から受取つて今出掛けやうとする處で追付いた。

『一寸と貴官にお話し仕たい事があります、只今の裁判一件で、』とネフリユードフは懇懇に、

『私は陪審員の一人です。』

『おう、ネフリユードフ公爵でしたナ。何處かでお目に掛つた事があつたツけ、』と裁判長はネフリユードフの手を握りつゝ、いつぞや或る夜會で初めてネフリユードフに會つた時、好い縁をした自分が若いものよりは大浮れで盛んに踊つた事があるのを憶出した。『怎ういふ御用ですかナ？』

『外でもないですが、マースロワに關する陪審員の答辯書に脱漏が有りました。あの宣告だと、彼の女は罪が無くて徒刑に處せられたわけです、』とネフリユードフは滿面に愁色を浮べた。

『左様、法廷は諸君の答辯書に従つて宣告したのでムる、』と裁判長は一向膠もなくスタ／＼玄關口の方へ歩きながら、『諸君の答辯書は些を撞着してゐるとは認めましたがナ、』と卒氣ない返答をした。が、自分が陪審員へ説明した時「殺人の意思なし」と云ふ但し書が無ければ有罪と

決定するのだと注意するのをツイ云ひ忘れた無念に偶つと気が付いた。

『無論御しやる通りだが、併し此錯誤を修正する事は出来ませうまいか。』

『控訴するのですナ。控訴する理由は十分有ります。辯護士に御相談なすつたら宜からう、』と言棄てつゝ、裁判長は帽子を横たに被つてスタ／＼行つて了はうとした。

『併し夫は困る。』

『だが貴爵、貴爵も御承知の通りマースロワには二つ道が有つたんです、』と裁判長は成るべく叮嚀に心持快く敵對はうとして、襟の上に被さる頬鬚を綺麗に撫でながら、ネフリユードフの腋の下に自分の手を入れて、『貴爵もお歸りになるんでせうナ？』

『はア、』とネフリユードフは素早く上衣を引掛けて一緒に出掛けた。

で、ボカ／＼した氣持の好い日向へ出ると、敷石を轆る車輪の音が騒々しいので二人は思はずも調子を張り上げた。

『餘程奇妙なわけです、』と裁判長は、『元來マースロワは放免になるか、でなければ一時拘留さ

れる位な處で、西伯利亞なんぞにやられる筈が無いのです。貴爵方が「殺人の意志なし」と但し書を附けてさへ下すつたら文句なしに直ぐ放免されて了うのでした。』

『全く其の但し書を抜かしたのは我々辯審員の勘辯出来ない大失策——』

『そこですテ。そこを御思案なさい、』と裁判長は微笑しながら時計を出して見ると、之は大變だ、戀しい可愛い奴のクララに約束した時間に唯つた十五分だけしか無い。

『辯護士に篤と相談して御覽なさい。控訴する理由は幾許でもあるから容易に出来ませう、』と急いで口早に云ひつゝ、辻待馬車の馭者を呼び、『ゾヴオリヤンスカヤハ三十錢、増しては與らんどぞ。』

『へい、宜しうムいます、さア旦那。』

『では急ぎますから失敬します。御用があつたら宅の方へ——ゾヴオリヤンスカヤ町のゾヴオリニコフと御尋ね下さい、』と馴れ／＼しくネフリユードフに會釋しつゝ、周章た馬車へ飛乗つて別れた。

裁判長と相談したり、新らしい空気を吸つたりしたお蔭に、ネフリユードフは多少か心持が落付いて来た。畢竟如此な風に気が上摺つて逆氣せ上つたのは全く今朝から一日意外な豪い目に邂逅はし續けたからであらう。

『奇妙な因縁もあつたものだ。全力を盡して、少とも早くマースロワの運命を軽くしてやらすは俺の義理が濟まぬ。斯うなつたら片時も猶豫してはをられぬ。早速ファナーリンか、ミキーンに頼むのだが、一體何處に住つてゐるのか、左に右く此處の法廷で聞いて行くが上分別、』と偶つと有名な二大辯護士の名を憶出し、法廷へ取つて返して、外套を搔ぐり捨てつゝ急いで二階へ行くと、出會頭に廊下でファナーリンに邂逅はしたのを幸ひに直ぐ引留めて、實は用件があつて今捜しに來た處だと云つた、

ファナーリンはネフリユードフの顔を見覚えてゐたし、名は本より知つてゐたから、喜んで

御相談に乗らうと云つた。

『實は私も非常に草臥れてをりますが、餘りお手間を取りません事なら大凡の御用件を伺ひませう。』
 『怎うです、此室へ入らしつては？』と判事の私用室らしい部屋へネフリユードフを案内し、卓子を中央に相對ひとなつて、

『怎ういふ御用件ですナ？』

『只今お話してませんが、其前に一つ御承知置き願ひたいのは此件に關し秘密を守つて戴きたい。私が此事件に特別に身を入れてる事を世間に餘りバツとさせ度くないのです。』

『如何にも、無論でゝる。』

『實は私は陪審員となつて今日出廷したのですが、陪審員會議で誤つて何の罪もない或る婦人を西伯利亞へ流刑に決定したのです。私も陪審員の一人であつて見ると、與つて多少の責任があるゆゑ、實は良心が咎めて甚だ氣の毒でならんのです。』

と云つてる中に我知らず眞赤になつてドギマギして來たには自分ながら驚いた。ファナーリ

ンは素速すすくこく此容子を瞥さると見て取つたが、直ぐ下を向いて何喰はぬ顔をした。

『如何にも。』

『全く罪もないものを謀つて重刑に處すべき決定を與へたんですから、何分氣の毒で。——夫故私は高等法術へ控訴してやりたいと……』

『元老院へですかナ？』

『左様です。そこで此事件を御引受け願ひたいので——』と首尾よく此の厄介極まつた難問題に勝ちたい餘りに、『勿論訴訟入費は幾許要らうと厭ひません。盡く私が支辨しべんします。』

『宜しうムる。お引受けませう。』と辯護士はネフリユードフが斯ういふ事には不案内なのを見て慇懃いんぎんに微笑しつゝ、『が、元來先ア怎ういふ事件でムるナ？』

と云ひつゝ、ネフリユードフが事件の經過なごりの概略あらいを話すを聞取つて、

『宜しうムる。明日能く調べて研究して見ませうから、明後日——イヤ——木曜日の方が都合が好い、木曜日の午後六時に拙宅へお運びを願つて、其時に精しく御挨拶する事にしませう。』

夫では今日は——尙だ之から數件調べるものがありますから失禮致し升。』

と云つて互に別れた。先づ首尾よくマースロワの辯護を引受けて貰つたので、ネフリユードフは漸つと安心して町へ出て、春日和の長閑ながかんさに搗かて、加へて新らしい空気を吸ふと、初めて心持が爽然せうぜんして來た。で、辻馬車に取巻かれて煩うるさく勧められるのを漸おだとこさと拂ひのけてアラ／＼と歩き出したが、カチューシャの顔や姿がチラクラしたり、昔しカチューシャを弄んで勝手に棄てた我が輕薄かふまな所業しよごふが何から彼まで一時にムラ／＼と心に湧いて來て、クル／＼と頭腦まの中を廻つて、俄に頭を壓へ付けられるやうな氣持がすると、急に鬱ふさいで來て泣出したくなつた。

『イヤ、如此こゝな事は後日ユル／＼と考へるべしだ。今の今、目前の急務は此の心中の懊惱おんぼうを一掃せうしなければならぬ。』と思つた。

僂ふつと此時、コルチャーギン家の晚餐に招待されてゐる事を憶出し、時計を見ると尙だ十分に時間があるので、丁度通り掛つた市内鐵道の鈴ベルの音を聞くや否、飛乗りして市場いちばまで來て復

た辻馬車に乗換へて、十分経つか経たぬ間にコルチャーギン家の堂々たる邸の門に着いた。

第二十六回

『何卒此方へ、』とコルチャーギン家の馴れくしい肥満した玄關番は専賣の音のしない英吉利製の蝶鉸の着いてる鬨をスゥンと開けて『お待ち申してをりました。皆様食堂に在らつしやいます。閣下が入来しつたら直ぐお通し申せと云ふ仰しやり付けでいます。』と階段口まで案内して鈴を鳴らした。

『お客様は有るかネ?』と云ひつゝネフリユードフは外套を脱いだ。

『お宅の方の外にはコーロソフさんとミハエルさんだけでいます。』

此時、美しい頬鬚を生やした美男の用人は燕尾服の白手袋で二階から下りて来て、『さア、何卒お二階へ。先刻からお待兼でいます。』

ネフリユードフは案内されて二階へ行き、お親昵の美々しい大廣間の舞踏室を通り抜けて食

堂へ行つた。

コルチャーギンの一家族は、居間から外へ一步も踏出した事のない公爵夫人の外は悉く食卓を圍んでゐた。上座の老主人公の左にはお抱への醫博士、右には主人の友達で以前は地方の貴族長、今は銀行頭取の自由黨員コーロソフが着席してゐた。醫博士の次には四歳になる末の令嬢と保姆のレイナー女史、其對席は一人息子のペーチャで、中學校の第六級生だが、此子の試験が尙だ濟まぬばかりに全家が尙だ田舎へ出掛けないのだ。ペーチャの家庭教師の大學生が其隣席を占めて、其次がミーシャと呼ばれてる主人の甥のミハエル、其對席は四十になるが猶だ獨身の老嬢カテリーナ女史、其次がネフリユードフの約婚の公爵令嬢のミツシーで、その隣席が席に空けてあつた。

『オ、能うムつた。さア、何卒、其席へ。大分待兼ねましたんでナ、御免を蒙つてお先へ、唯今やり初めた處でゐる、』と老公爵は入齒で念入にクチャ／＼と穀を噛みながら骨の折れる顔をしつゝ、睫毛の無い赤味の帯した眼を釣上げてネフリユードフを見たが、直ぐ視線を轉じて、

『スチーブン、』と口一杯に頬張つた含み聲で辟然と肥つた品のある執事に向つて空席を眼で知らした。

ネフリユードフは以前からコリチャーギン老公爵を能く知抜いてゐて、度々食卓を共にしたから、舌打して喰ふ癖のある下作な唇の赤ら顔、昨衣へビタリと掛けたナブキンの上からぬつと出てゐる太い頸筋、軍隊生活で鍛上げた赤銅作りの逞しい筋骨を十分看慣れてゐるが、今日といふ今日は此の骨太の頑丈作りの身體つきが非常に癢に觸つた。此老人の殘忍酷薄なるは、昔し或る地方の長官をしてゐた時分、何の理由も絲瓜もなく、唯自分は金があるから何時までも在職する必要もなく、所詮一時の腰掛なら人民の面倒を見るがものは無いといふだけで、配下の人民を撲つたり蹴つたりして、剩つさへ縊り殺した事すらあつたのを偶つと憶出した。

『はア、只今、』と主人の命を承はりたるスチーブンは澤山の銀器を飾り立てた戸棚から大きなソップ匕を出しつゝ、美男の用人に願で合圖をすると、心得顔の用人はナイフやフォークや隅に定紋を縫附けたナブキンの綺麗に疊んだのを公爵令嬢の隣席へ準備した。

ネフリユードフは順々に食卓を廻つて一人々々に握手の禮をした。老公爵と婦人達の外はネフリユードフの来る前に一々席を起つて會々した。定つた禮式ではあるが、此の食卓廻りや平生疎々口を利いた事もない人達との握手が此日は何となく馬鹿けて笑止に思つた。

で、遅刻の謝辭をしつゝミッシー令嬢とカテリーナ女史の間に着席しやうとすると、老公爵は『ウオッカを飲らんなら蝦だの鹽漬だの鹽漬の魚卵や乾酪を準備した彼方の卓子で先づ腹拵へをしたら宜からう』と云つた。ネフリユードフは格別腹が餓いたとも思はなかつたが、一口味はつて見ると初めて空腹が解つて、麵麩と乾酪を夢中になつて平けた。

『慙うです、首尾能く社會の基礎を顛覆しましたかナ？』とコーロソフは陪審制を攻撃する反對新聞の慣用文句を皮肉に引照つて、『有罪者を放免して無罪者を處分したんでせう——はッはッ！』

『何ぢや、社會の基礎を顛覆する——基礎を顛覆する？』と老主公は笑ひながら云つた。此老公爵は莫逆の友の學問見識を深く信任してゐるのだ。

ネフリユードフは迂闊に口を滑らして危なく無禮をしてはならぬと要領して、何とも答へないで間流し、聞えぬ振して蒸氣の昇てる肉羹を夢中に啜つてゐた。

『この人は打棄らかして食べさしてお置きなさいよ、』とミツシー嬢は笑ひながら、故と耳立つやうに「この人」と云つて夫となく二人の深い中を仄かした。

コロソフは大きな聲で陪審制に反対する新聞社説の受買をして盛んに大氣焰を上げた。主人の甥のミハエルも一緒になつて陪審制の反対説に雷同して同じ新聞紙上の別項に載つてものを引張出した。ミツシー嬢は此論戦には加はらないで、例の通りの花やかなお粧りをした上に、十分の嬌態を作つてネフリユードフに向ひ、

『嗚お勞れでせうネ。お腹がお飢き遊ばして？』

『いゝや——時に貴嬢は畫を見に入らしたか？』

『否エ、畫は此次にして、サラマトフさんの許でテニスをしましたの。成程クルックスさんは非常な名人ですワネ。』

ネフリユードフが此席に臨んだのは、一つはムシヤクシヤ腹を紛らさう爲めであつた。元來コルチャーギン家は萬事が贅澤づくめな上に、行く度毎に八方から款待されるから何處よりも一番好きであつた。が、不思議に此日は全家の有りと有らゆるもの——玄關番の馴れくしい親切面、幅廣の仰山な階子段、眼の攪めるやうな見事な盛花、鞠躬如としてヘイコラする用人、美しくピカ／＼した食卓の飾付け——何から何までが頓と面白くなかつた。當の御本尊のミツシー令嬢其人からして、男に見せやう爲めの精一杯のお化粧から萬事の扮作や嬌態までが空々しくて氣に喰はなかつた。況してや自由主義を鼻に掛けるコロソフの獨りよがりの馬鹿さ加減や、老公爵の横柄な下作な極道面や、スラヴ最負のカテリーナ女史の自慢の佛蘭西語や、保母や家庭教師の幫閑然たる卑屈面は鼻持もならぬ程不快で堪らなかつた。其中でも取別けて氣色に觸つたのはミツシー嬢の口から屢々洩れた「この人」と云ふ言葉で。

ミツシー嬢に對するネフリユードフの心は實は尙だ今日まで判然と定つてゐないので、或時は月夜に物を見るやうに唯妖艶かに美しくばかり見えたとと思ふと、或時は又日が燦然と射

すやうな氣がすると共に、瑕瑾が顯然して來たのを見免すわけに行かなかつた。丁度今は白晝の場合で、顔の皺が見える、髪の毛の縮れてゐるのが解る、腕の尖つてゐるのが目に立つ、別して拇指の爪の馬鹿々々しく大きいと云つたら老爺酷似である。

『テニスは半間なもんだよ、』とコーロソフは云つた。『吾輩が小兒の時分はラプタをやつたもんだが、ラプタの方が遙かに面白い。』

『否、貴下は喰はず嫌ひなのよ。テニスだつて随分面白いワ、』とミツシー嬢は「随分」といふ言葉に力を入れたが、ネフリユードフには之が故とらしく思はれて氣障で堪らなかつた。すると、ミハエルとカテリーナが傍から容嘴をして、爰にテニスとラプタの優劣論が沸騰して、保母と大學生と小兒が駄つてゐる外は各々盛んに議論を戦はした。

『能く議論をやりをるワイ、』と老公爵はカラ／＼と笑ひながら胴衣へ掛けたナブキンを掻ぐり捨てつゝ、椅子から起たうと後ろへガタ／＼揺ぶるのを見て、用人が急いで椅子を押へると、直ぐ座を起つて別席の卓子へ行つた。

其後から續いて一同も椅子を離れて各々別席の食卓に豫て準備してある玻璃器を取つて、香水入りの湯で口を嗽いでから、面白くもない下らぬ話を復た始め出した。

『ねエ、爾うぢやなくて、貴郎は爾う思はない？』とミツシー嬢はネフリユードフに向つて、人の性質は遊戯の趣味から割出す事が出来ると云ふ自説に贊成して貰はうとした。が、ネフリユードフは無愛想な顔をしつゝ、膠もなく、

『私には解りませんナ。其様な事は考へたことが無い。』と答へた。

其の答へ振から容子までが平日とは違つて尋常でないので、ミツシー嬢は心配して何が原因で機嫌が悪いのかを知りたくてならなかつた。が、何喰はぬ顔して話を紛らさうとして、

『ネエ、貴郎、阿母様の處へ入來ッしやらない？』

『爾うですナ、』とネフリユードフは一向氣の乗らぬ返事をしつゝ、紙笈を握み出した容子が會ひたくもないといふ風であつたから、ミツシー嬢は怪訝な顔をして何にも云はずに男の顔を睨と看守つた。

が、有繋にネフリユードフも偶つと氣が付いて心に恥入つた。『人の家を訪ねた時は不快な氣持をさせないのが作法である』と思返して、勉めて機嫌の好に顔をしやうとして、若し母御の公爵夫人さへお構ひないなら喜んでお目に掛りませうと云つた。

『阿母様は喜びますとも。紙良なら貴郎、阿母様のお部屋で喫つても宜いワ。コーロソフさんも矢張りつてらッしッてよ。』

ミツシー嬢の母なる公爵夫人のソーフキヤは何時でも床に臥てばかりゐた。横になつて客に應接するのが今年で八年目で、レースとリボンに包まれ、天鵝絨や金びか物や象牙細工やブロンズや描金や花の中に圍繞れて、始終牀の中で寝たり起きたりしてゐた。で、一と足も室外へは踏出さないで、親友と呼んでゐる人達、即ち普通の平民共から超脱してゐると信じてゐる人達に限つて此部屋に出入するを許された。

ネフリユードフも幸ひに此特別待遇を受ける一人であつた。根が中々才子である上に、亡母と此公爵夫人と格別懇意の間柄であつたし、殊に可愛い娘と配合せやうといふ夫人の下心があ

るお底で此特典に預かる事が出来たのである。

夫人の部屋は大小二室續きの客間を通抜けて奥であつたが、廣い客間まで来ると、前へ立つて行くミツシー嬢は矢庭に屹と思込んだやうに佇立つて、金塗の女椅子の背を押へながらネフリユードフと向合つた。

豫てからミツシー嬢は縁談に氣を揉んでゐたのだが、丁度ネフリユードフが似つかはしい上に、人物が好いたらしいので、怎うでも此人を自分のものとしやうと思込んでゐた。(尤も自分を此人のものとするのではなく、此人を自分のものとするので)で、心の行き方の違つてゐる人には能く有勝な——自分では氣が付かんのだらうが——ネチネチした執拗い手管で目的を果さうとしたが、愈々爰で打明けて男の心を引いて見やうとして、

『ネエ貴郎、怎う遊ばしたの？變つた事でもあつて？』

ネフリユードフはぐツト胸に膺へ、顔を擧めて眞赤になつた。が、

『はア、有りました』と惡びれもせず飽くまでも眞直ぐに、『非常な大珍事が起りました。』

『大珍事で、何？ 話して頂戴な。』

『お話し仕ても宜いが、尙だお話しする時期でない。猶だ十分熟考して見ませんから。何れお話しする時が来れば詳しくお話ししますが、今日の處は何にも訊かないで下さい。』と云つて愈々眞赤になつた。

『爾う、話して下さらないんですネ？』とミツシー嬢は少と焦れ氣味にビクビクツツと顔の筋を動かしながら後ろへ椅子を引摺つた。

『はア、今はお咄し出来ません。』とネフリユードフは凛乎と答へた。此の斷乎たる返答は唯ミツシー嬢に對する挨拶ばかりでなく、實は大問題がヒシ／＼と迫つて來たのが解つて、氣が氣でないから、何方附かすに今だにグラ／＼してゐる優柔不斷の自分の心に對しても退くに退かれぬ背水の陣を布いたのである。

『そんなら宜うムいます。さア、參りませう。』とミツシー嬢は思返して屑よく、役にも立たぬ屈托を追退けやうと首を掉りつゝ、常よりは足前に前へ立つて案内した。

が、男の冷淡なのを怨む心の苦なさは迫來る涙を呑込んで強に制へつけやうとするミツシー嬢の容子に現然と讀めたので、有繋にネフリユードフは故と情なく當つたのを不便とも氣の毒とも思はないではないが、此場合生中に女々しく氣を弱くしたら取つて返しの附かぬ破目になつて、慈じひ女の縁が繋がれて了つたら最う一生切るに切られない關係が出来て了う。之が何よりも恐ろしかつたので、心強く凝乎と辛抱して、無言で其踵に附いて公爵夫人の居間へと行つた。

第二十七回

コルチャーギン公爵夫人のソーフキヤは丁度今、頗る贅澤な滋養物づくめの食事を濟ました處である。食事中は何時でも閉切で、殺風景な喰方を誰にも見せないのが夫人の常法であつた。

寢牀の傍の小卓には珈琲碗が載せて有つた。丁度夫人は此卓でバチトス(紙菓の名)を燻をして

るる最中である。頭髮も眼瞳も眞黒な、前齒の長い、瘦削のヒョロ長い婦人で、病人のくせに中々若がつてゐた。

此夫人と醫博士との間に特別の懇ろな關係が出てゐるといふ妙な評判が世間に傳はつて、ネフリユードフの耳へも既から入つてゐた事はるたが、目前に夫人の寢床の側に大氣取りに氣取つてゐる醫博士が念入に揃へた髻を油光りにテカテカさせてゐるのを見ると、今更のやうに世間の噂を憶出して不快な心持がした。

ソーフキヤ夫人と列んで、低い柔はりした椅子に腰を掛けてゐるコーロソフは頻りと珈琲を攪和してゐた。リキユールの杯が卓上に置いて在つた。

ミツシー嬢はネフリユードフを案内して來は來たが、自分だけは居座らないで、

『夫ぢやア貴郎、お母さまに飽きが來たら妾の方へ入來ッしやいよ、』と唯つた今がた客室で妙な衝突があつたのを忘れたやうに、何喰はぬ顔して嬉しさうに笑ひながら、地厚の絨氈を軽く音のしないやうに踏んで去つて了つた。

『御機嫌能う。さア何卒——怎うでしたエ？』とソーフキヤ夫人は助才なく莞爾と空笑ひをした。が、怎うしても空笑ひとは見えないほど上手で、眞白に磨き上げた長い齒を見せつゝ、『裁判所からお歸りになつてから大層鬱いでらつしやるツてネ。人情のある人は那樣な場所には居堪れませんワネ。』

『仰しやる通り、』とネフリユードフは萎れ返つて、『那樣云ふ場所へ出ると、人は誰でも自分の不完全——いや、人が人を裁判する権利がないやうな氣がしますナ。』

『Comme c'est vrai』(眞實)と夫人は宛もネフリユードフの言葉に感動したやうに力を入れた佛蘭西語で云つた。誰と談話をしても巧くお上手を云ふのが此夫人の性癖なのだ。『此頃は畫の方は——相變らず御勉強？ 妾し、畫は大好きですから、慙んな厄介病氣に罹つてなかつたら既に參堂つてお伎倆を拜見する處でした。』

『畫はカラ駄目です。既に廢めツちまひました、』とネフリユードフは一向率氣なく答へた。不思議に夫人の空々しいお世辭が秘し隠しにしてゐる齡と同様にまざくと解つたから、平日

の更まつた廻りくどい婉曲な言葉が口から出て來なかつた。

『惜しい事ネ、』と今度はコーロソフに向つて、『レビンの咄だと、ネフリユードフさんは全く畫才があるツテ事ツテすのに……』

『態く臆面もなく白々しい虚言が吐けたものだ、』とネフリユードフは心中に思ひつ苦々しい顔をした。

此容子が例になく不機嫌のを早くも見て取つた夫人は、ツイ鳥渡の手際では面白笑止しい世間咄に誘引めさうもないので、コーロソフに水を向けて新狂言の批評を訊き初した。宛もコーロソフの説次第でてんやわんやの評判が定つて了ひ、コーロソフの一言一句が千古不磨の金言であるかのやうに訊くから、コーロソフは得意になつて新脚本と作家との瑕瑾捜しをして藝術に對する己れの主張を滔々と陳べ立てた。夫人は其議論に感服してゐるらしかつたが、時偶は脚本作家の肩を持つ事もあつた。が、段々とコーロソフの説に全で降参したり或は少しづゝ自説を變へたりした。

ネフリユードフは二人の談話を見たり聞いたりしてゐたが、其實何を話してゐるのか耳にも入らなかつた。唯だ代る／＼に二人を見て氣が附いたは、二人ながら劇なんぞは怎うでも好いので、食消化しに咽喉の筋を釣つたり舌を動かしたり齒をカチ合はしたりして運動をしてゐるのだ。且コーロソフはヴオツカと葡萄酒とリキユールをチャンボンに呷つた御機嫌で、偶さか飲む百姓のやうにへゞらないでも、可成に酒量の強い上戸なみには酔つゐて、千鳥足こそ踏まらず管こそ巻かないでも、精神の居處は確かに變つてゐて、無暗と大御機嫌で得意になつてゐた。

此間夫人は横合の窓から射込む日が、寄る歳なみの争はれない顔を容赦なく照らさうと段々奥へ射込むのに氣を取られ、『全くねエ、』とコーロソフの話に調子を合はしながら度々顧盼いて見たが、聽て直ぐ牀の傍の電鈴の鈕を押した。其時醫博士は座を起つて、家族同様の心易立てに會釋もしないでブイと出て行つた。夫人は其後を目送りつゝコーロソフと談話を續けてゐた。處へ丁度美男の用人が電鈴に應じて來たので、『フキリツプや、帷帳を引いてお呉れ、』と命令けて置いてから又、

『貴下が何と云はうとも彼の人の作には神秘的な處があります。詩に神秘的の分子が無かつたなら詩と云ふものでなくなつて了ひます。』とソーフキヤ夫人は片眼を光らせて帷帳を引いてる用人を睨まへつゝ、『詩想を缺いてる神秘なら迷信で、神秘の籠らない詩なら散文です。』と寂しげに笑ひながら片時も目を離さずに用人と帷帳とを看守りつゝ、『フキリップや、其窓ぢやアない、大窓の帷帳だよ。』と面倒臭さうに云つた。で、這般な事まで世話を焼かねばならぬかと、自分の苦勞性を嘆息する容子であつたが、又思返して氣を紛らさうとしつゝ、指環の寶石で燦爛する指で芳い香のするバチトスを挟んで唇へ持つて行つた。

胸膈の廣い骨節の逞ましい美男のフキリップは詫まるやうに低く腰を屈め、太い臍の壯健さうな足で軽く絨氈を踏みながら、何にも言はずに唯々諾々と夫人の指揮した窓へ行き、夫人の顔を見ながら少とでも光線の射さぬやうにと氣を附け氣を附け帷帳を引いた。が、尙だ夫人の思ふ通りにならないので、復たもや夫人は焦りくして神秘のお話を中断しつゝ、飽くまで氣の利かないフキリップ肝癢聲で叱り飛ばした。フキリップの眼からは電光がピカ／＼と光つた。

『畜生、怎うすれば宜いんだ。』とは多分此時のフキリップが腹の中で云つた文句だらうと、此一埒を見物してゐたネフリユードフは思つた。が、體力逞ましい美男のフキリップは勸忍袋の切れかゝつたのを漸つと辛抱して病人の氣難かしやの放縱一杯の厄介者の夫人の云ふなり次第に溫和しく勸めてゐた。

『勿論ダーウキン説にも十分眞理は有りますがナ。』とコーロソフは低い脇掛椅子にガツクリ凭れて背ろへ揺りながら、眠さうな眼で夫人を見つゝ、『だが、ダーウキンは論點外に行き過ぎて了ひました。』

『貴下は怎う思ひます？、矢張遺傳記をお信じですか。』と夫人はネフリユードフに鋒を向けた。ネフリユードフの黙つてゐるのが何分氣に掛つてゐたので。

『遺傳記？ 私には信じませんナ。』とネフリユードフは答へた。が、實は何を答へたか解らんの、此時のネフリユードフは不思議と云はう乎、奇怪といはう乎、一場の奇妙な想像畫を眼前に髣髴して茫然としてゐた。

云つて見やうなら、美術家のモデルかと想像される筋骨逞ましい美男のフキリップの傍に、瓜のやうな腹や杵のやうに瘦せこけた腕を露出しにしてる禿頭のコーロツフの裸體姿が歴然と眼に映つた。直ぐ又傍なるソーフキヤ夫人の一丝を掛けない裸體姿も絹や天鵞絨の下から透徹つてまざく／＼と見えたので、自分ながら想像の餘り恐ろしさに慄然として眼を閉いで頭腦から此幻象を追退けやうとした。

ソーフキヤ夫人は此の尋常ならぬ容子を睨と見てゐるが、聽て、

『ミツシーが貴下を待ってますよ、』と云つた。『行つておやんなさい。グリーダの新曲を貴下に聽かせたがつてゐるんですから。随分面白いもんですよ。』

『ミツシーが弾きたがつてるものか。何かに付けては虚言を吐きたがる女だ、』と心中笑止しく思ひながらもネフリユードフは座を起ちつゝ、指環を穿めた骨と皮ばかりの夫人の手を握つた。

客間まで来るとカテリーナ女史が待受けてゐて、例の通りの氣障な佛蘭西語で、『陪審員てお役も御大抵ぢやありませんワネ。』

『失禮ですが、』とネフリユードフは膠もなく、『少と氣分が懊惱してゐますから、貴嬢方のお對手をして却て御不興になつては濟みませんゆゑ……』

『呀、怎う遊ばして?』

『何卒、何にも仰しやらんで下さい。』と面倒臭さうに云ひつゝ、四邊を見廻して帽子を捜した。

『爾う／＼、貴方は何時でしたつけ、何でも秘し立をしては不可んと仰しやいましたワネ。お忘れ遊ばして? 随分猛悪いお話まで平氣で遊ばしたくせに、今日に限つて何故秘してらつしやいます?』と云ふ處へ丁度ミツシー嬢が來たので、『ねエ、ミツシーさん、爾うぢやアなくて?』

『あれは勝負事をやつてゐた時——』とネフリユードフは嚴格べらしく、『勝負事なんぞの時なら何でも喋べれますが、全く今日は氣分が悪い。平たく云ふと口を利くのが嫌なんです。』

『勝負事の時にしろ何にしろ、御自分で秘し立をしては不可ないと仰りながら言直すのは御卑怯ですワ。怎うして开んなに氣がクサク／＼してらつしやるのか、眞直ぐに白狀遊ばせては、』

とネフリユードフが大真面目なのを知らず顔にカネリーナを史は言退けた。

「自分から気が鬱してゐるなんて、开んな卑怯な事はないワ、」とミツシー嬢までが云つた。『妾なんぞは开んな事は云はない。何時だつて此通り元氣よ。何しろ此方へ入來つしやいッてば。貴郎の懊惱を追拂つて上げますから。』

ネフリユードフは丁度馬が可愛がられて、口に鞭を穿められ、馬具を附けられるやうな氣がした。が、今日ばかりは平生になくミツシー嬢の甘言に中々乗らないで、是非とも家へ歸らなければならぬからと暇乞をした。ミツシー嬢は平常よりも長く男の手を握つて、

「ぢやア仕方が無いワネ。ですけれども貴郎の身に降掛つたて大事なら妾達にも矢張一大事なのを忘れちやア嫌よ——ネ、宜くつて——。ぢやア明日は入來しやるワネ？」

「さア——怎うですかナ、」とネフリユードフは云つた。で、自分の良心に對してか、夫ともミツシー嬢に對してか、何方とも解らぬが、眞朱になつて急ぎ足で歸つた。

其彼で二女は顔を見合せしたが、聽てカネリーナ女史は、

「怎うしたんでせう——ドミートリさんは？ 餘程變ぢやアなくて？ "Comme cela m'intrigue."

(妾くし氣に) 是非探つて見なけりやならないワ。"Affair d'amour propre" (艶事) かも知れない

ワ。"Il est tres susceptible" (あの人は易から) ですもの、ネエ——ミツシーさん。』

"Pulver une affaire d'amour sale" (汚ないワ)』とミツシー嬢は口まで出掛つたが、偶と思直して

口を噤むと同時に、今までの晴れ々とした顔色が何處へやら、俄に淋しい氣の抜けた顔をし

て下を向いて了つた。が、去氣なき體で、『誰だつて機嫌の好い時もあれば悪い時もあるワ、』と

ばかり云つた。が、其實、内心では、『矢張妾を欺してたのか知ら？』と氣が揉めて堪らず、腹

の中で、『散三種々な所爲をして氣を持たしときながら、若し爾うなら随分性悪だワ。』

と思つた。が、『散三種々な所爲』とは何の事だと訊かれたなら、恐らく取留めた返事は出來

ないであらう。が又、ネフリユードフが女の心を動かしたどころでなく、殆んど約束したと同

様な確かで、言葉でこそ約束し交換さないでも、口よりも物を云ふ眼や微笑や思はせ振で互

ひの心を許し合ひ、ミツシー嬢の方では既に自分のものと定め込んでゐたから、今更手を切

らうとしても滅多に切るわけには行かんだ。

第二十八回

『破廉恥で醜極まつてる、卑屈である、恥晒しである。』とネフリユードフは我が家を指して歩き慣れた町を歸る道く腹の中で思ひつ、ミツシー嬢と口を利いてる最中のクサクした不愉快が容易に忘れられなかつた。尤も之まで一度たりとも落花流水の情で仄かした事もなければ、勿論公然と申込をしたわけで無いから、表面だけでは何の疚しい事もなく、すこしも道を外れてゐないのであるが、實際白狀すれば、心中暗に許してゐたには違ひなく、口外こそしなくとも腹の中で約束してゐた事を忘れやしない。が、今日では最早到底結婚出来ないやうな気がした。

『破廉恥である、卑屈である、醜極まつてる、恥晒しである。』と再び心中に繰返した。唯單りミツシー嬢との關係ばかりでなく、己れの從來の行狀が何れも是も自分ながら愛想が盡きて了

つたので、『一から十までが破廉恥極まつてる、卑屈極まつてる。』と我が家の玄關に差掛つた時呟いた。

で、茶と晚餐の支度の出来てる食堂へ来た時、『晩飯は食はんよ。』と踵から隨いて来た給仕人のコルネーに向つて、『彼方へ行きなさい。』

『唯！』と答へたが、コルネーは直ぐ行かないで食卓の上を片付けてゐた。ネフリユードフは忌々しげに見てるたが、少とも早く一人法師になりたくて焦慮しつ、何から何までが自分の感情を刺戟しやうと挑發つてゐるかのやうに思はれた。

漸つとコルネーが晚餐の支度を下けて行つて了つたので、サモワールの傍で悠然一人で茶を煎れやうとした時、忽ちアグラフキョーナの蹙音が聞えたから、周章て、顔を見られまいと客間へ逃込んで、ハタと戸を閉めて了つた。

三月前に母が臨終を遂げたのは即ち此座敷である。亡き父母の肖像を二個の反射鏡付のランプが照らしてゐるのを見ると母の終焉の時がツイ昨日今日のやうに憶出された。之がまた實に卑

劣な恥かしい咄だといふは、其時自分は少しも早く母が死んで呉れれば好いとばかり思ひ、見す／＼助からぬ病氣に何時までも苦しめるよりはと、口前だけでは唯母の爲めを思つて臨終を急ぐやうに云つてゐるが、其實、母の安樂を願ふよりは此方が母の苦しむのを見るのが忌で堪らなかつたからである。

で、母の懐かしい美しい記憶を追懐しやうとして、五千圓の謝儀で高名の美術家に描かした肖像畫の傍へ行つた。襟開の廣い黒天鵝絨のガウンを着た姿で、畫工が十分に技倆を揮つて、首筋から兩肩、胸の美しい處を思ふさま仇ッほく描いた。怪しからぬ話であるが、夫よりも更に一層怪しからぬのは、半裸體の美人としての母の肖像には甚だ恥づべき且忌むべき不潔の聯想が伴つてをるのみならず、三月前に此の同じ座敷に此の同じ婦人が病みほうけて、木伊乃のやうに骨と皮ばかりに瘦せさらばひて、座敷中は魯か全家に鼻持ならぬ惡臭を瀰漫したのを憶出すと、忽ち何處からか此臭氣が臭つてくるやうな心持がした。で又、臨終の前五六日、骨と皮ばかりの青白い枯びた手で自分の手を握つて自分の眼を睨ツと見入つて、『ミーチャや、妾

が爲べき事を爲なかつたのを叱つてお呉れでない』と云ひつゝ、艶の抜けた瞳からハラ／＼と涙を覆した時の事を憶出した。

『あア不快だ！』と口裡に呟きつゝ、再び美しい玉を削つたやうな肩と腕とを露出しつゝ唇邊に優りがな微笑を浮べた肖像畫を見上げた。

丁度五六日前である。此畫と同じ姿をした若い婦人を見たのを偶つと憶出した。誰でも無い夫はミッシー嬢で、丁度舞踏會へ出掛けやうとする處へ行合はすと、舞踏服の仇な姿を見せやうために例の手臂で態々化粧部屋に請じた。今、憶出すと、其の玉のやうな肩や腕が堪らなく淫らしくて蟲睡が走つて来る。

『彼の無作法な、人外な、昔しは如何な所爲をしたか解らない殘忍無慈悲な狸爺と、妙な噂のある棒にも掛らぬ慶庵婆と！ 描ひも描つて氣色に觸る胸糞が悪い奴等ばかりだ。破廉恥である、卑屈である、恥晒しである？』

『いや、斯うしちやをられん』と忽ち決然として、『少とも早く自由の身體とならにやアなら

ん。コルチャーギン一家や、貴族長の女房のマーリヤや、家の財産相続の一件や、如此な虚偽の關係から一切離れ、綺麗さつぱりと腐れ縁を切つて了つて、夫から新らしい自由の空氣を吸ひに外國へ——いや、羅馬へ行つて畫の修業をするか、と獨語つ中に自分の畫才の甚だ覺束ないのを偶つと憶起して、『……畫なんぞは怎うでも關はん。自由の空氣を呼吸すれば可なりだ。先づコンスタンチノールへ行き——夫から羅馬だ。が、夫には左に右に此裁判一件を片付けて了はんとナ——何しろ辯護士に相談して見る必要がある。』

と左さま右うさま思案する中、忽ち隻眼が少し斜視である黒い獄衣の女囚の姿が顯然と眼前に髣髴んで来て、判事の前へ最後の陳述をしつゝシクシク泣いた聲が尙だ耳の底に残つてゐるやうな氣がした。

堪らなくなつて急いで燻半しの紙灰を灰皿に投捨て、更に最う一本を吸付けて部屋の中を歩き出した。

其昔し此婦人と一つ屋根の下に起臥した時分の記憶が順繰りに浮んで来た。最後の出會の時の

燃ゆるやうな動物慾や、其動物慾を満足さしてからの慚愧後悔を盡く憶出した。拂曉のお祭の青い帯の付いた白い衣服を今でも愕然と覚えてゐた。

『彼の晩は眞摯に戀してゐたのだ。天にも地にも恥ぢない清淨潔白の戀を持つてゐたのだ。イヤ、夫より最つと久しい前、論文を書き旁々暑中休みに初めて伯母の家へ逗留した時から愛してゐたのだ。』と徐ろに既往を憶起すとツイ昨日今日の出来事のやうに思はれ、其時分の青春の活き／＼した生氣や人生の盛りが憶出されると、今更のやうに悲しく傷ましくなつた。

其頃の我と今の我と此較すると何たる霄壤の差であらう。縱令彼の晩の教會のカチューシャと、今の西伯利亞商人を手玉に取つて裁判に引出された賣女のリュエバカとの差ほど甚だしくないまでも先づ似たやうなものだ。彼の頃は自由で、何の疚しい事もなく、前途の希望が洋々として、何事か成らざるは無いやうに思つてゐたが、今は無値らぬ愚劣けた薄ッぺらな空ッほの希望も意味も何にも無い目に見えぬ浮世の網の目に束縛されて、逃げやうとしても逃げられもせず、眞から又逃げやうともしないで萎縮けて了つてゐる。あの頃は直情徑行を誇つて、眞理

を口にするを日課とし、且又實際に眞理を行つてゐたのだが、今では虚偽の深み——虚偽が却つて眞實と認められてゐる極度の虚偽の中に陥つて、此の深みから逃ける道が中々に見られないので、段々と深みの中に落ちれば落ちる程最終には馴れツ子になつて、到頭虚偽を虚偽とも思はないほど平氣になつて了つてゐる。

怎うしたら貴族長の妻のマーリヤと手を切つて其良人や子供等と憚りなく顔を合はす事が出来るだらう？ 怎うしたら虚言を吐かずに公爵の娘のミツシーと縁を切る事が出来るだらう？ 怎うしたら土地私有を不正と認むる我が確信と悍格する亡母の遺産相続の處置を着けられるだらう？ 怎うしたら又カチューシャに對する罪を償へるだらう？ 他は左も右も此の最後の一條だけは片時も等閑にして置かれぬ。苟めにも眞情から戀した女が這般な境界に墮落したのを他處に見て捨てゝは置かれぬ。が、罪なくして宣告された不當の判決から救ふ爲め辯護士に金を費つたゞけでは決して濟まぬ。金で罪が償へるもんなら、カチューシャを辱しめた當時既に相應の手當をしたぢやアないか。あの時は金さへ握らせれば一切の罪が消えて了うやうに思

つてゐるぢやアないか。

と過ぎし昔を呼び起すと、廊下でカチューシャを引留めて無理遣に前垂の衣兜に金を振込んだ事を顯然と憶出した。

『オ、其の金の事！』と其當時と同じ不快な感情がした。『嗚呼堪らぬ、堪らぬ、何たる汚ない根性だらう！』と唯ツた今、怎んな不埒をして來たやうに聲張上げ、『匹夫下郎が得て怎んな所爲をする。苟くも俺が——イヤ、其の俺が匹夫だ、下郎だ、』と更に又聲高に、『だが、果して俺が匹夫下郎？』と直立つたまゝ暫らく口を緘んで沈吟して時、『匹夫下郎でなくて何だ？ 匹夫下郎も同前ぢや、』と再び自問自答した。『マーリヤ（ネフリエードフが私）や其良人に對する破廉恥極まる拙者の行爲を見る。亡母の遺産に對する卑怯未練な俺の態度を見る。富を不正と認めながら親から譲られたと云つてメク／＼と已れの物として勝手氣儘に費ひ捨てるとは何事だ。第一又、毎日の生活の遊惰放蕩は沙汰の限、言語道斷だ。殊に最も怪しからんのはカチューシャに對する大罪——匹夫下郎の爲べき破廉恥罪！ 人は之を見て何と云ふ。勿論、何と云はう

とも、人の批評は左まれ右くまれ平氣で云ひたい事を云はして置かれやうが、人を欺く事は出来ても、自分自らを欺く事は決して出来ない。」

と繰返し繰返し慚愧する間に、偶つと憶當つたは今日此頃、殊に今といふ今もコルチャーギン公爵、公爵夫人、ミッシー令嬢初めコロソフ其他の面々が誰彼の差別なく癩に觸つて蟲睡の走るやうな氣持がしたのは、翻つて思ふと、實は人よりは先づ我身で我身に愛想が盡きたからだ。不思議な事には、今更のやうに我が心の卑劣しさに氣が付くと、我ながら情なく思はないではないが、又幾分か罪が軽くなつたやうな氣がして何となく心が沈着いて來た。

是迄もネフリユードフは度々靈魂の淨めをした。此の「靈魂の淨め」といふは散三ツばら放蕩をした曉不斗した拍子に眼が覺めると、俄に眞人間になつて腐つた腸を洗はうとする事である。怎ういふ時は何時でも必ず自ら規箴を作つて永へにこの則に従ふ覺悟をし、二度と再び誤ちをすまじき覺悟で發心の日記を附け初めては自ら「新らしい頁を開く」と稱してゐた。が、怎ういふ殊勝な覺悟も三日坊主で、何時の間にか再た誘惑の捕虜となつて了ひ、却て前よりは

一層深みに墮落するのが大抵終局である。

怎んな風に淨めをしては墮落から浮び上り、浮び上つては復た墮落した。初めての淨めは暑中休みに伯母の家に逗留してゐた時で、此時は一番感奮して一番永續きがした。其次は戦争に招集され、筆を投じて劍を把り、國家の爲めに身を殉すべく軍隊に入營した時であつた。が、其時は潔氣な決心を鈍らすものがあつて忽ち墮落して了つた。三度目は軍隊を去つて美術のために身を獻じやうと外國へ行つた時であつた。

其時から今日までは暫らく淨めをしないから、心の底の道根が全て弛んで了ひ、今では良心の要求と實際の生活とは非常に枘格してゐて、此距離の著るしく距たつてゐるのに氣が付くと今更のやうに惘然として恐れた。怎うなつては最早淨めをしても逆も淨められさうも無い位に悉く腐敗し切つてゐた。

『汝は從來も度々悔悛めて眞人間にならうとしては矢張ズル／＼に元の木阿彌となつて了つたぢやないか、』と心の底で誘惑者が囁いた。『復たしても一つ事を繰返して怎うする。汝一人ぢ

やない、誰でも悔悛めては悪い事をする、悪い事をしては悔悛める、之が即ち人生と云ふものだ。」

這般な囁言が何處からともなく聞えた。が、今は健全な威力ある永恒不磨の自由精神が目を開ましてゐるから、中々誘惑に乗せられなかつた。縱令我が欲する處と現在とドレほど離れてゐるやうとも、新たに奮起した精神で躰えられないものは無い。

『如何なる代價を拂つても是迄の腐れ縁を斷つて了はう。誰にも彼にも眞實を話して眞實を以て處理しやう。』と決然として聲高く、『ミツシーにも眞實を話し、自分のやうな放埒者は迎も眞摯に婚禮する資格は無いと、今迄無益に醜弄してゐる罪を肩よく謝して了はう。マリーヤにも……いや、マリーヤには話さんでも、マリーヤの良人に自分の破廉恥を懺悔し、今まで眼を騙んでゐたのを詫つて了はう。母から譲られた財産は斷然放棄して了はう。カチューシャにも會つて、自分の破廉恥の爲めカチューシャの一生を誤らした罪を懺悔し、切めては俺の力の能ふ限りを盡し、骨が舍利になつてもカチューシャの運命を軽くしてやらう。先づ左も右も會つ

て俺の罪を宥して呉れと頼むのだ……』

『爾うだ、小兒のやうに平たく叩頭して詫まつて見やう。』と言葉を途切らしつ、『……若し何ならカチューシャと婚禮しても宜い。』と再た言葉を切つて、小兒の時から仕慣れたやうに胸に手を合せつ天井を仰いで、『神よ、願くは私を助け私を教へ給へ、私の心の中に来りて其の穢れを淨め給はん事を。』

と、只管に神が己れの心に宿りて穢れを淨め玉はん事を祈念した。が、此時は神既に心に座して良心の眼を覺まし給ふたから、神と共に往する心地がして生の自由や充實や悦びばかりでなく有らゆる正義の力をも感得し、人の力の爲し能ふ最善最美のものは何に由らず成し得られざるものは無いやうに思つた。

此の自問自答の中に涙が兩眼に溢れて來たが、此涙にも善惡二つの意味があつた。數年間昏睡してゐた精神の覺醒を喜ぶのが善の涙で、之といふも己れの天性の善に由るのだと己れに阿るのが惡の涙である。

すると急に時候が蒸しくして来たので、庭を見晴す窓の戸を開けると、物静かな清い照渡つた月の晩で、車の輾る音が行過ぎて了うと後は寂とした。見上げるやうなオブライが丁度窓前に綺麗に敷いた小砂利の上に葉を振つた枝の細かに錯綜んだ網の目のやうな影を印し、其左方には馬車小屋の屋根が月を浴びて眞白に輝き、正面には植込の枝越しに土塀の黒い影が見えてゐた。ネフリユードフは此の飽かぬ四邊の景色を眺めながら新らしい清い空気を吸つてゐたが、『爽快、爽快、オ、神よ、』と思はず聲を上げて靈魂の自づと澄渡るやうに清爽とした。

第二十九回

マースロワが監獄の穴に戻つたのは夕方の六時である。常から歩きつけない上に、暫らく寢足になつてゐたから、往復十哩もある小石のゴロゴロした道を歩いて草臥れ切つて底肉刺を踏み出した。加之、意外な苛烈な宣告で心を挫かれた上に空腹で苦まされた。

法庭へ引出される前から護衛の兵士が目の前で美味さうに麵包と茹卵を食べてるのを見て、

唾を催はして空腹を感じたが、彼等に物を請求るは見識に觸ると考へて昵と辛抱して了つた。

夫から三時間といふものは空腹を忘れ、唯段々と勞れて来たのだが、其時飛んでもない重刑を宣告されたのだ。初めは一圖に聞損じだと思ひ、自分が西伯利亞へ流される罪人だとは到底想像出来ないから、飽くまでも自分の耳を信じなかつた。が、裁判官や陪審員が宛も當然の知れ切つた事のやうに宣告文の朗讀を聞いてる平氣な沈着顔を見ると、俄に赫と取逆上せて聲を振りやりつゝ自分の冤罪を滿廷に訴へた。が、自分の叫き立ゝるのさへ矢張當然で知れ切つてゐるやうに見做されて、幾ら叫いたつて騒いだつて仕方がない事が解つて、怎うでも此の殘酷極まる不當の宣告に服罪せねばならぬかと思ふと、急に情なくなつて今度は失望の餘りにわつと聲を出して泣いた。

取分けてマースロワの奇怪に思つたは老人でなくて若い連中である。渠等は何れも目を細くしてマースロワの美貌に見惚れ、中にも一人の副検事は格別に妙な素振をしてゐたくせに、愈々といふと寄つて集つて飛んでも無い無法な宣告をして了つた。開廷前や數度の休憩時間中、

此の若い連中は用あり氣な顔をしては態々廊下を通つて被告人控所の開放しの入口を覗いて見たり、ゾウ／＼しい奴は臆面もなく入つて来て失敬千萬にも正面からシゲ／＼と顔を見たりなどして、一體なら肩を持つて呉れべき筈なのが、案に相違して辻褄も合はぬ出任せの理窟を捏ねて、本と／＼冤枉なのが解り切つてながら、西伯利亞へ徒刑に決定したのである。初めは泣きもしたが、段々と沈着いて來ると、今度は全て氣抜けがして了つて、茫然と手を束ねて監獄に還されるのを待つてゐた。で、今は何の念もなく唯煙草が喫みたい一方であつた。處へボ―チコワとカルニチンキンが矢張宣告が濟んでから同じ此控所に來て、マースロワの顔を見ると直ぐ、ボ―チコワは口汚く罵つて「咎人」呼ばはりした。

「怎うしやがつた、ヤイ？ 汝ばかりが好い子にならうたつて、ヘツヘツヘツ、爾う巧くは問屋で卸さねエや。イケツウツウしい踏張のくせに踏切の悪い阿魔だ。めそ／＼と吠面かゝねエで、汝が身から出た錆だと往生しやがれ。西伯利亞へ行つたら最うべたくさとお化粧しやうつたつて出來ねエぜ、ヤイ！」

マースロワは廣い袖口に手を引込めつ、首を垂れて汚い板の間を見ながら、凝然と身動きもしないでゐるが、唯つた一言、

「妾に關つてお呉れでない。妾もお前さんには何にも云はないから……」

「えッ、何だと……汝に關つて怎うする？ 人う、チャンチャラ可笑しい！」

と罵り叫く時、押丁が此二人を引立て、へ行つて了つた。マースロワは吻と息を吐いて氣が爽然とした處へ廷丁が來て、

「お前かい、マースロワてのは？ 何處かの貴夫人がお前に與つて呉れと下すつた、」と云ひつゝ三圓の金を渡した。

「貴夫人て怎んな方？」

「受取れば宜いんだ。其様な話をする暇は無い。」と愛想氣なく言捨て、へ行つて了つた

此金を呉れたのは誰でもない。妓樓の女將のキターエワで、法廷から歸りしなにワに少とばかりの手當をしても宜いかと廷丁に訊いてから、三ツ鈕の小羊革の手

膩切つた白い手で裾裏の衣兜から握み出した美しくいバースの中から債券の利券の
二圓半に當る一枚を抜き取つて（露國では公債其他の利券）二十錢貨を二枚と十錢貨
を二枚に頼んだ。すると廷吏は直ぐ廷丁を呼んで其の目の前で金を手渡しするのを見
て「間違ひのないやうにネ、何卒與つて頂戴、」とキターエワは云つた。

其の言ひ方が如何にも胡亂に思ふらしかつたので、廷丁は癡に觸つて堪らなかつた其の餘憤
がマースロワに當散らしたのだ。

が、マースロワは意外の金が入つて、丁度欲しくて堪らないものが直ぐ買へる嬉しさに、
呉れ人が誰だか解らないのも頓着なく、「煙草を買つて貰つて一服吸つたなら——」とばかり
心中に思つた。今では何も彼も忘れて唯煙草を喫みたい一方に凝つて、其の渴えさ加減たら非
常なもので、廊下へ開く入口から風がもてくる煙草の香がする時は、其の香ひのする空気を吸
ふのを切めてもの心床としてゐた。が、何時までも此控所に取残されて歸れないのに、ホト
ホト怠屈して了つたは、退出命令を傳達する役目の書記どのが罪人などは其方除けて、檢閱

官が禁止した新聞社説の一條を一人の辯護士と論じて夢中になつてゐたからで。

漸つと五時になつてから許されて、ニージニ人とチュワーシ人と二人の護衛兵に護送され
つゝ裁判所を出た。で、尙だ門を出切らない中にマースロワは二十錢貨を出して卷麵麩を二つ
に煙草を買つて呉れと頼むと、チュワーシ人は笑ひながら金を受取つて、「宜しい、買つてやら
う、」と直ぐ買つて来て、正直に釣錢を返した。が、囚徒は途中で喫煙するを禁じられてゐるの
で、途々待遠しくて焦りながら監獄へと歸つた。

聽て監獄の門まで来ると、汽車送りの囚徒が百人ほどもゾロ／＼と今着いたばかりで、鬚の
髭々した奴、綺麗に剃つた奴、齡を老つた奴、若い奴、露西亞人は無論だが外國人も交つてゐ
る。中には頭を剃丸めた奴もある。何れも足に重さうな鎖を附けたのを引摺りながらガ／＼
と叫き立つて、息切れの臭氣と塵埃とで控所を充たしてゐた。で、マースロワの傍を通ると誰
も彼も顧眄して、中には故意と摺合つて身體に觸つて行くのもあつた。

「ヨウ、別嬪——づるうるムムム、……」と一人は卷舌を鳴らした。

『今日は——姉さん!』と一人は片眼をバチクリさした。

顔から額まで綺麗に刺つて口鬚だけを残して色黒の男は、足の鎖を重さうにガラ／＼引摺りながら後ろから飛んで来て矢庭にマースロワに抱付いた。

『昔しの親昵を忘れちや不可ねエ。美つのお顔を拜まして呉ンな、』と齒を露出して眼を光らしたから、マースロワは喫驚して振離した。

『調戲けるない、此野郎、』と副看守が後ろから飛んで来たので、色黒の囚徒は縮上つて逃けて了つた。

『お前は元來——』と副看守はマースロワに向つて、『何しに爰へ来た?』

マースロワは今、裁判所から歸つて来た處だと云はうとしたが、草臥れ切つて口を利く氣力さへなかつた。護送兵の一人は帽子の廂へ手を舉げて會釋しつ、マースロワに代つて、

『裁判所から歸つて来た處です、』と云つた。

『それぢやア早く押丁に渡しなさい。我輩は其様な事をしちやをられん。』

『はア。』

『ソコロフ、』と副看守は聲高に押丁を呼んで、『此女を連れて行け。』

其聲に應じて忽ち現はれた押丁は荒々しげにマースロワの肩を突き、後から隨いて来いと願で指圖しつゝ女囚の檻房の廊下へ伴れて行き、一應身體を檢査めて禁制品を持つてゐないのを見届けてから今朝引出した同じ穴へと投込んだ。

マースロワは煙草の箱を麵麩の中へ秘して首尾よく押丁の目を眩まし終せたのだ。

第三十回

マースロワの檻房は間口十六呎、奥行二十一呎の細長い室で、窓が二つに破れ掛つた大暖爐が有つた。蠶棚然たる板張の寢床が室の三分の二を占め、板張は何れも乾燥切つて反返つてゐた。突當りの正面の壁には眞黒に燻ぶつた蠟燭附きの聖像が掛つて、何年経つたか解らぬ大時代の古い房が垂れてゐた。扉口の左方の薄暗い隅には臭い桶が置いてあつた。夕方檢閲を濟ま

してからは夜は閉鎖切である。

同室の女囚は十五人で、其中の三人は小兒である。マースロワが歸つた時は猶だ明るかつたので、二人だけしか眠てゐなかつた。一人は旅行券が無いので拘留された白痴で（露西亞では露行券の無いものは）、大抵眠てばかり暮してゐた。一人は竊盜狂の肺病患者で、上衣を疊んだのを枕に横臥になつてゐた。尙だ眠付かれないので、大きな目をバチクリさせつゝ咽喉元にゴロ／＼する痰を制へて咳をすまいとしてゐた。

此外の女は、大抵は粗末な茶色木綿の下襦袢ぎりで、窓から顔を出して新入の男囚徒がゾロ／＼來るのを見物してゐた。眞摯に裁縫をしてゐるのは三人だけで、此内の一人が今朝マースロワが呼出された時に知慧を付けた老婆である。コラブリヨワと云つて、脊の高い、強さうな、氣難かしさうな、年中顔を擧めてゐる、ダブ／＼した二重願の婆さんで、房々した短かい毛が額縁邊りで胡麻鹽になつて、後毛が頬ささうに頬に亂れてゐた。此婆は亭主が自分の連子に手を出したのを怒つて斧で殺した罪で西伯利亞へ徒刑に宣告されてゐるのだ。此檻房の牢頭で

内々で女囚達に酒を賣つてゐた。眼鏡を掛けて、百姓丸出しの大きな手で針を持ち、三ッ指で精々と何か縫つてゐた。

其傍でザク／＼した粗布の袋を縫つてゐる女は鐵道の線路番人の嫌で、汽車の通る時に信號の旗を掉る役目を怠つた爲め不思議な變事を出來した罪で三ヶ月の禁錮に處せられたのだ。色の黒い、脊の低い、鼻の扁平けた、小さな黒い瞳の、人の好きさうな女で、世話焼で多辯家であつた。

最一人の裁縫をしてゐる女はフキョードーシヤと云つて、ホンノリとした色艶の肌膚細な、小兒のやうに愛くるしい眼付の、尙だ極若い頗る附きの美人で、房々した長い髪を綺麗に編んで後ろに圓く結んでゐた。罪名は亭主を殺さうと仕掛けた毒殺未遂で、十六の時不承知の無理押付けに嫁にやられた結果が婚禮すると間もなく此大事件を仕出來したのである。處が保釋中の八ヶ月間に何時となく亭主と段々交が好くなつて、愈々裁判へ廻される時分には二人の間は漆膠も管ならずであつた。加之ならず、男にも（別して）姑にも大變氣に入つて了つて、

是非とも免訴にしたいと願下けを嘆願したが、到頭その効がなくて矢張西伯利亞へ徒刑に宣告されて了つた。柔和しくて、愛嬌があつて、何時でも莞爾くしてゐた。マースロワとは隣同士の寢床に起臥する縁で別段親睦くし、萬事妹氣取でマースロワの世話をしたり用をしたりするのを役目にしてゐた。

此外に尙だ二人、何にも爲すに床の上に座つてゐた。一人は四十恰好の青白い瘦枯れた、若い時は嘸美くしかつたらうと昔の色香を忍ばれる面貌の女で、瘦細つた青白い胸に乳香兒を抱いてゐた。此女の犯罪は、甥が徴兵に取られる時、村の百姓の考へでは不法な召集であつたので、巡査に抗拒して當の本人を逃がさうと大騒ぎをした事があつた。現在の伯母だから、猶更先へ立つて騒ぎ立ち、馬に乗せて作れて行かれやうとする馬の口を取つて動かなかつたので到頭捕縛されたのだ。最一人は人の好きさうな。猫脊の胡麻鹽頭の老婆で、暖爐の後ろの寢床に座つてゐるが、其前を四歳ばかりの男の兒が莞爾々々しながら駈けてゐるのを捉へやうとしてゐた。此の男の兒は頭髮を短かく刈つた可愛らしい元氣者で、老婆の前を摺抜ける度びに、『ホ

ラ、抑まへて御覽！』

此老婆は放火犯で捕縛されたのだが、入獄したのを却て喜こんでゐた。氣掛りなは一緒に捕縛つた悴の身の上で、夫よりも猶ほと心配してゐるのは娑婆へ残した老夫で、嫁は既に逃げて了つたし、誰が、服の洗濯や始末をして呉れるだらうと、夫はッかりを氣を揉んでゐた。

此七人の外に、鐵格子の窓へ立つて屋外を見てゐるのが四人あつた。マースロワが監獄の門で出會つた新入の囚徒が丁度今、窓外を通る處で叫びたり妙な手付をしたりして騒いでゐた。

此中の一人はデクハ、肥つて、頭髮は赤ツちやけ、顔や手は青く黄ばみ、釘鈕の脱れた襟から喰出す太い頸は斑點だらけであつた。大きな皺枯聲で大口を叩きながらグラ／＼笑つてゐた。竊盜犯ださうだ。

此傍に間の抜けた面をした、色の黒い、脊の低い、十歳ばかりの小兒位しかない小さな女がゐた。胴長の足短かの、腫物の汚痕だらけの赤ら顔で、眼の間が遠く離れた、厚唇の出齒である。窓外で何かあつたと見えてキャ／＼と轉がつて笑つてゐた。此女は放火竊盜犯に問はれ

てるのだが、お洒落が好きなので『お洒落さん』と綽名が付いてゐた。
 其後ろに立つてるのは贓品隠匿罪で捕まつた瘦せつほちの憫然な姪み女で、鼠色に汚れ切つた下襦袢一貫に大きな腹を包んで、何にも儂舌らないが窓下の騒ぎを面白さうに可笑しがつて見てゐた。

其又傍の脹れほつたい出目の氣樂さうな顔付のズングリした田舎女は、暖爐の後ろの老婆と遊んでゐる四歳になる男の兒と七歳になる女の兒の母親である。酒の密賣をして捕縛つたのだが、世話の仕人がないので兒供まで一緒に監獄に連れて來てゐる。窓から少と離れて佇立つたなりに沓足袋を編んでゐるが、他の仲間の大口を聞いては不快で堪らないやうに首を振り顔を擧めて眼を塞いでゐた。髮毛をジャンジャラに亂してゐる小さな下襦袢一つの七歳になる女の兒は青い眼を据ゑ、赤い毛の女の裾に攫まつて、窓の内外の男女の囚人が互に負けずに罵り合ふ猥褻な言葉を覺だまうと、耳を引立つて聞いている一心に口裡で繰返してゐた。

怎んな騒ぎには一切眼も呉れないでゐる十二番目の女は教會の執事の娘で、春のストラリとし

た立派な女だが、自分の産んだ私生兒を井戸に投込んだので捕まつたのだ。房々したブロンド色の髪を太く編んだのが解けて亂れて肩に振掛つたまゝ、薄汚ない下襦袢ぎりで裸足になつて他のものには一向頓着なく、側目も觸らずに檻房内を壁に突當るまで往つたり來たりしてゐた。

第三十一回

ガチリと魚輪の昔がして、マースロワが入つて來るのを見ると一同は皆願ひいた。今まで側目も觸らずに歩いてゐた教會の執事の娘でさへが佇立つて、一寸いと眉を釣上げて願ひいて見たが、何にも云はないで復た大股に力足を踏み出した。

コラブリヨールはザングリした粗布に一と針刺して、容子を聞きたけな顔をしつゝ眼鏡の中からマースロワを見、

『おや先ア、歸つて來たネ。怎うおしだい。必と免訴になるツて云つてたんだが、御免になつ

「たんだらうネ？」と男のやうな太い皺枯れた鈍聲で云ひつゝ、眼鏡を脱つて縫物を傍へ押遣つた。

『伯母さんと散三噂をしてゐたのサ、』と線路番人の嫌はリン／＼した聲で、『お前さんの明りが立つて直ぐ放免されるのは知れ切つてる。判事さんや陪審員さんや辯護士さんや皆さんが寄つて集つて氣の毒がつて、事に由つたらお金を呉れる人があるかも知れねエなんて、爾う云つた處なのサ。……だけでもネエ、恚うして復た妾達の許へ歸つておいでぢやア、餘まり話が面白く無エと見えるネ。眞個に氣が揉めるよ、妾達の推量の外れツちやツたかしら。えッ、恚うなつたの？ 神様のお思召が妾達と違つてるなら仕様が無エワナ——ネエ、姉さん、恚うなつたら覺悟が肝腎だよ。』

『其様な事はないワ。貴婦を罪に落すなんて——』とフキヨードーシャは柔しい氣性で心配けに、愛くるしい青い眼でマースロワを見つゝ、晴れ／＼した美しい顔を泣き出したさうに曇らした。

マースロワは何とも答へないで、端から二番目の自分の床に入つて、コラブリョーワの傍に坐つた。

『何か喰べて来て？』とフキヨードーシャは起つてマースロワの傍へ来た。

マースロワは返事もしないで、卷麵麩を床の上に投出し、塵になつた上衣を脱ぎ、眞黒な縮れ髪を包んだ手巾を脱つた。四歳になる男の子と遊んでゐた老婆もやつて来て其前に立ち、『チヨツ、チヨツ、チヨツ、』と舌打しつゝ氣の毒がるやうに首を掉つた。男の子も一緒に其傍に立つて上唇を突出し、眼を一杯に睜つてマースロワの持つて来た卷麵麩を見てゐた。

マースロワは今日一日に遭遇つた意外な不幸のあとで、此の同情ある多勢の顔を見ると、ワナ／＼と慄へて泣出したくなつたが、此時までは凝乎と堪へてゐた。が、老婆の親切な氣の毒がる舌打を聞き、小兒が罪も無い眼を睜つて卷麵麩とマースロワの顔とを交み代りに視るのを見ると、最う辛抱が仕切れなくなつて、聲を慄はして泣き上げた。

『だから言はねエ事ツちやア無エ。確固した辯護士を頼みなせエとアレほど執拗く云つたぢや

ねエか、』とコラブリヨーフは云つた。『エッ、何だエ？ 西伯利亞かエ？』

マースロフは籠上げる悲しさに返事が出来なかつた。で、巻物の中から襟開きの広い舞踏服の美人の寫眞入の紙筒を出してコラブリヨーフに渡すと、コラブリヨーフは見たばかりで首を振つて、如此な無駄なものに金を捨てるのを不感服な顔をしてゐた。が、一本取つてランプで火を點け、一服吸つてから強にマースロフの手に戻すと、尙だ泣止まなかつたが、嬉しさうに受取つて一服吸つてから『西伯利亞なの、』と低言で云ひ、パツと煙を吐出しつゝ復た泣き歎をした。

『眞個に罰中りの人非人ばかりだ、』とコラブリヨーフは呟いた。『如此な罪も咎も無エ可愛い子を西伯利亞へやるなんて。』

突然窓に立つてる連中がキヤツ／＼聲を立て、留度なくゲタ／＼と笑ひ、甲高な黄色い聲が皺枯れた苦なさうな鈍聲と混雜になつた。窓下の囚人が可笑しな所爲でもして笑はしたのであらう。』



「御覽てば——あの坊主ツくりが那樣な所爲をしてやがる、」と赤い髪の女はデクノノした身體を可笑しさうに揺りながら、格子に掴まつて聞くに堪えない卑猥い言葉を大聲で怒鳴つてゐた。

「ふんふツ、肥満女が復たガン／＼我鳴つてやがる。何が笑止しいんだ、」とコラブリヨウは口小言を云ひながらマースロワの方を向き、「何年だい？」

「四年、」とマースロワは云つた。丁度其時止度なく頬へ傳はる涙が一滴ホロリと落ちて手に持つ紙筒を濡らしたのを腹立たしげに捻曲けて捨てつ、又別に一本を抜取つた。線路番人の嫌は紙筒嫌ひで喫まないが、マースロワの捨てたのを勿體なさうに拾つて眞直ぐに直しながら無休にペラ／＼と、

「本統の誠の道てものがあればだけれども、今日日はお前さん、誠の道なんてものは豚が喰べツちまつて、各自が好き勝手な所爲をしてるノサ。だから妾達も散三噺をしてたんだがネ、伯母さんは必と御免になるツてたけど、妾は「否エ、伯母さんの豫言は外れる、那樣な奴に裁

判されるんだもの、必と辛い目に遭ふのサ。」て云つたのサ。そら御覽、生憎と妾の云つた事が
 お手の筋だらう。」と自分でも聲の好いのに聞惚れて得意に饒舌り立つてゐた。

新入囚徒の行列がお終ひとなつたので、鐵窓から見物してゐた女連もマースロワの周圍へ寄
 つて來た。一番駈に小さな女の兒を伴れて來たのは酒の密賣をした女で、

「怎うしてお前さん、其様な先ア、重荷を背負はせられたんだい？」とマースロワの傍にベツ
 タリ座つて編物を初めた。

「怎うしてツて、お前さん、地獄の沙汰もレコ次第だからネ、お寶が無エから馬鹿を見るん
 で、お寶せエあつて上等辯護士を頼みやア、好い加減な悪い事をしたつて、巧く辯口を奮つて
 無罪放免にして呉れるサ。何アに、心配する事アねエノサ、」とコラブリヨワは云つた。「何と
 か云つたツけナ、名前は忘れちやつたが、頭の毛の長エ鼻の高エ人——彼の人に頼みやア必と
 立證を立つて綺麗に巧く行つて呉れらアナ。彼の人にせエ頼んだらナア！」

「あの人なら眞物だとも、」と「お洒落さん」はベツタリ座つて出齒を露出しつゝ、「彼の人なら

立派なもんだけど、千兩から下ぢや請合つて呉れめエよ。」

「お前さんも悪い星に産れつたのサ、」と放火犯の猫脊の老婆は嘴を出した。「だが、俺の事
 も考エて斷念るンだネ。撥賊野郎に嫁をチヨロマカされて、此老齡になつて悴と一緒に牢屋で
 虱を飼つてりやア世話ア無エヤナ。」と百萬遍も繰返した愚痴のお復習をした。「所詮乞食になる
 乎、牢に入る乎、何方の道遁れつこは無エのサ。」

「落つれば同じ谷川の水ツてからネ。誰でも同じ事つたサ、」と酒の密賣をした女は小さな娘の
 頭を見てゐるが、急に編掛けを投げ出して娘を膝へ載せ、器用な指頭で娘の前髪の虱狩りを初
 めた。「何故お酒の密賣をしたつて？ 苦勞人にも似合はねエ事を仰しやいますよだ。密賣でも
 しなけりやア小兒を二人怎うして喰はして行かれるエ？」

此言葉を聞くとマースロワは俄に一杯飲みたくなつて、「伯母さん、ウオツカを少ツとネエ：
 …」と涙を袖で拭きながら時々咽喉に迫ぐり來る啜り聲を制へてゐた。

「あいよ、上げやうとも、」とコラブリヨワは合點いた。

第三十二回

マースロワは麴麴の中からキターエワに貰つた利券を出してコラブリヨーフに渡すと、無筆のコラブリヨーフは利券の文字が讀めないので物識の「お洒落さん」に見せ、二圓半に當ると聞いてからゾオッカの嚙を秘して置く風拔きの穴へ登つた。此體を見て一同は外して了つたが、其間にマースロワは上衣や頭を包んだ手巾の塵を拂ひつゝ、床に入つて麴麴を食べ初めた。「貴姉にお茶を取つて置いてよ。」とフキヨードーシヤは襦袢に纏んだブリキの茶瓶と湯呑を棚から取つて卸した。「だけれども冷めつちやつたかも知れなくてよ。」

成程、茶は全て冷えて、茶よりは茶瓶のブリキの味がしたが、湯き切つてるマースロワは一杯注いだの息をも吐かずに麴麴と一緒に飲んで了つた。で、其傍に立つて羨ましさうな顔してゐる小兒を見ると、

「さア、上げやう。」と云ひつゝ、麴麴を引割いて與つた。

處へコラブリヨーフはゾオッカの小嚙と猪口とを持つて来てマースロワに渡すと、一と口お毒見をしてから「お洒落さん」にもフキヨードーシヤにも薦めた。此三人は若干か金を持つてゐるので、牢仲間では「華族様」と渾名され、何時でも互ひに持つてゐるものを分配し合つてゐた。

二三分経つとマースロワは少と陽氣付き、徐々法廷の一伍一什を元氣に話し初し、副檢事の身振までして見せた。何よりも呆れ返つたのは裁判官始め陪審員達が申合はしたやうに目も離さずに自分の顔ばかり凝視めて、休憩中の囚人控所にまで煩さく附纏つて顔を見に来た事だと話した。

「護送兵でさへが爾う云つてよ、彼の連中が控所に来るのは貴娘の顔を見に来るんだ」つて。中には「斯ういふ書類は何處にある？」なんて、何アに書類も何も有るもんぢやアない。口の先で何を云つたつて、眼は妾の顔ばかりをチャンと見てるのだからネ。」と笑止しさうに首を掉りながら、「巧い事を仰しやるのサ。」

「爾うだつたらうネエ。」と線路番人の嬢は例の音物の音のやうな聲で、「砂糖に集る蠅見たやう

に迎も追切れやしないやネ。』

『夫から歸途にも痛い目に會つたのよ。丁度監獄の門へ入らうとすると、ソラ、汽車で着いた新入がドヤ／＼入つて來たらう。妾を見るとワイ／＼と騒ぎなんだから、怎うしやうかと思つてネエ。看守さんのお蔭で助かつたけれど、助倍つたらしい嫌な奴に囁り付かれた時はハツとして、眞實に怎うしやうかと思つてよ。』

『怎んな奴だエ、囁り付いたつてのは？』と「お洒落さん」は訊いた。

『色の黒い口鬚の生えてる奴さ。』

『それぢやア必と彼奴に違ひない。』

『彼奴て——誰？』

『シチエグローフて奴——今通つたからネ。』

『シチエグローフ、誰？』

『シチエグローフを知らないの。西伯利亞から二度まで逃げた男サ。復た捕まつたんだらうけ

れど、必と復た逃げ出すよ。押丁達も彼奴には持餘してゐるのだとサ、と常から男囚と通信して獄内の何も彼もを合點んでる「お洒落さん」は譯知り顔に、「必と復た逃けるのは定り申着サ。』

『所詮逃けるなら此方達も一緒に伴れてつてお貰れ申してエもんだ、』とコラブリヨーフは云ひつゝ、マースロワに向ひ、「だがお前さん、辯護士さんが控訴つて上げるつてな話があつたらうネ。控訴うなら今直ぐ出さないとネエ。』

『爾う、其様な話は無くてよ。』

其時赤毛のデク／＼した女は斑點だらけの両手で濃い頭髪をボリ／＼と掻きながら「華族様」が三人でウオツカの酒盛をしてゐる傍へ來て、

『其話なら妾が教へて上げやう、』と口を切つた。『取敢へず先づ宣告が不服だつて書面を出して置いてから副検事に申告するんだよ。』

『オイ、何しに違つて來たエ？』とコラブリヨーフは唐突りに劍呑を呉れた。『ウオツカの臭ひがするのにお氣が付かれねエかい。血の循環の悪い女だ。用もねエのにお饑舌りに來やがつて

汝達が餘計な世話を焼かねエだつて、此方は善ウツく御存じだよ。』

『汝に口を利いてるんぢやねエよ。餘計な嘴を容しなさんな。』

『何を吐かしやがる。ウオツカが欲しくて來やがつたくせに。ワイ／＼鳴り叫きやアがッて。』

『其様な事を云はないで、伯母さん、少とお與りなネ、』と常から持つてゐるだけは悉皆人に與つて了う意のマースロワは云つた。

『汝達に呉れてやるのは……』

『勝手にしや、』と赤毛の女はコラブリヨールワを目掛けてツカ／＼と進み、『汝等が恐くてお堪り拳があるもんけエ。』

『極道め。』

『汝の方が極道だ。』

『踏張め。』

『何だと？ 踏張だと？ 此撥賊！ 人殺し奴！』と赤毛の女は哭上つた。

『瘋癲、ツベコベ、儂舌らずに引込んでやがれ、』とコラブリヨールワは凄じい掃幕で叫りつけた。

が、赤毛の女は引込まないで段々チリ／＼と寄つて來た。コラブリヨールワは矢庭に其胸を撞くと、待構へてゐた赤毛は手早く片手でコラブリヨールワの髪を掴むと同時に横面を叩きつけた。其手をコラブリヨールワは素早く取つて掴んだ。マースロワは「お洒落」と一緒に赤毛の女を押へて強に引離さうとしたが、中々剛情に離さばこそ、髪毛を掴んだ手を弛めるかと思ふと今度は直ぐ拳に絡みつけて引摺る。此方は曳かれて横に首を傾けながら、力任せにデク／＼肥つた赤毛の身體を厭といふほど撲付けると同時に其手に喰ひ付かうとした。

同室の女囚は「ドヤ／＼」と寄つて來て、二人を圍繞いてワイ／＼騒いで仲裁へやうとした。肺病患者でさへが床から起きて來て、コン／＼咳をしながら立つて見てゐた。小兒は恐がつて互に抱合つて泣いてゐた。

此騒動を聞付けて女囚の取締と押丁とが駈付け、漸つと二人を引分ける事は引分けたが、コラブリヨールワは頭からズル／＼抜落ちる毛を拾ひつゝ、赤毛の女は下襦袢を裂かれ、黄ばんだ

胸まで引掻かれたのを押へて突立ちつゝ、互に聲高に罵つて、黒い白いを判けて貰ひたいと言合つた。

『先ア〜静かにしなせエ。結局喧嘩の原因はウオッカちやねエか。臭ひがするからチャンと解らアナ。待ちなせエ。明日になつたら典獄さんへ申上げるから、典獄さんが何とか捌いて下さるだらう。宜いかエ、最少と氣を付けて温和しくしねエとお前達の利益にならねエよ。』と女囚の取締は云つた。『俺は喧嘩の裁判をしてエる暇がねエから、さア、一同自分達の床へ入つて静かにしなせエ。』

が、騒は中々静まらないで、暫らくは各自思ひ思ひにゴタクサと罵つて、抑もの喧嘩の發端から何方が善いとか悪いとかベチャクチャ饒舌り立つて果しが附かなかつた。到頭押丁も取締も歸つて了つてから漸つと静まつて思ひ〜に各自の床に潜つた。放火犯の婆さんだけは聖像の前に跪座んで祈禱をした。

『悪玉が二人揃つてやがる、』と赤毛の女は端の方の床に潜りながら悪口雑言を散三に吐き始めた。

『何とでも言や。最う與らねエから覺えてやがれ、』とコラブリヨールは同じやうな毒口を吐いた。で、暫時は二人とも黙つて了つた。

『仲裁者が無けりやア、汝が眼の玉を刳抜いてやつたんだ。』と赤毛の女は復た悪口すると、コラブリヨールも負けずに返答した。復た暫らく黙つてゐるが、復た毒口を叩く。段々と其間が遠のいて、末は大雷雨の止んだ後のやうに寂とした。

一同は就眠いて、中には躰を發くのもあつた。何時でも長たらしくお祈禱するが例の老婆だけは、尙だ聖像の前に叩頭してゐる。教會の執事の娘は取締が行つて了つてから再び部屋を歩き出した。

マースロワは容易に就眠出来ないで、熟々と自分が最早徒刑囚の身の上であるを考へ、ボーチョコワにも赤毛の女にも咎人呼ばはりされたを憶出したが、扱て如何にしても自分が罪人だとは思切れなかつた。隣床のコラブリヨールはマースロワの方へ寝返りを打つた。

『怎うしたッて覺悟められないワ、』とマースロワは忍び聲で、『随分悪い事をして捕縛らない人さへあるのに、何にもしないで西伯利亞へやられるなんて、這般な平仄の合はない話があるだらうか。』

『心配する事は無エよ、』とコラブリヨーフは慰め顔に、『西比利亞だつて人が住んでる處だもの、死ぬ氣遣エはねエやナ。』

『妾だつて死なうたア思つてやしないが、辛いワネ。今まで暢氣に樂をして來た身體だもの。』
『神様のお思召だよ、神様に逆らう事は出来ねエと覺悟めるのサ』とコラブリヨーフは嘆息しつ

『凡夫の力ぢやア怎うにも怎うにもならねエワナ。』

『夫りやア知つてるともサ。だけでも伯母さん、辛い事は矢張辛いワネ。』

と云つて、二人共に暫らく途切れて了つた。

『オイ、お聞きよ、彼の踏張阿魔めが泣いてるやうだよ、』とコラブリヨーフが低音でマースロワに知らしたのは、隅の寢床から憫れッほい變な泣聲がしたからで。

正しく此聲は赤毛の女の啜泣してゐる聲である。散ニツばら馬鹿にされた上に到頭大好の物ウオツカを一滴も口に入れる事が出来なかつたを残念に思つたのである。情々考へると、是迄の生涯は他に弄ばれたり辱められたり辛められたり打たれたりしたばかりだ。唯つた一度嬉しいと思つたは、職人のモロデーシコフと出来合つた初めての戀情であつたが、此初戀も極飽氣なかつた。或日の事、男は圖部六に酔飽つて來て、酔つた紛れの悪戯に大切な處へ醜酸を注ぎ込んで女の七顛八倒して苦しむのを朋輩と一緒に見て面白がつてゐた。此事を憶出すと急に情なくなつて、誰も聞いてまいと思ふから、小兒のやうに泣出し、鼻を鳴らして涙を呑込んでゐた。

『可憫相だワネ、』とマースロワは云つた。

『可憫相でねエ事は無エが、餘計な嘴を容したがる奴だ。』とコラブリヨーフは云つた。

第三十三回

裁判の有つた翌る日の未明にネフリユードフが目を覺ました時は何事か身の上の一大事があ

るやうな蟲の報知がして、而も其事たるや重大な吉事であるやうな気がした。

『カチユーシヤ——再審！』こりや依違と臥てゐる幕で無い。早速一伍一什を話しに行かずばなるない。

すると、不思議な事には此朝、待ちに待ち焦れた貴族長の妻のマーリヤからの手紙——今となれば益々入用である其手紙が届いたから、急いで開封して見ると、今迄の関係を綺麗サツパリと切つて呉れて目出度く婚禮して呉れと祝つて来た。

『婚禮！』と冷かに繰返した。『何時になつたら婚禮する事やら。』

昨夕は何も彼も男らしく一切マーリヤの良人に打明けて、身潔くして些かなりとも先方も満足させれば此方も氣安くならうと決心したが、扱て今朝になつて見ると爾う容易くは輕辛に實行するわけに行かぬ。といふは、今迄何にも知らない人に何も彼もを暴露けて了つたら、折角知らぬが佛で幸福であつた人に不幸の種子を播くやうなものではないか。

先方から聞きにでも来たなら知らず、此方から態々話しに出掛けるなどは——無用、無

用、無用の沙汰だ。

ミッシー嬢に平たく打明けやうと云ふ一條も、今朝になつて見れば矢張爾うは行かぬ。這般な話は得て感情を害し勝ちなもので、世の中には口に出さない處に面白味のあるものが澤山ある。何も更めて打明けないでも、之から斷じて往來しないとさへ決めれば夫で宜いので、若し其理由を聞かれたなら、其時初めて打明けても遅くはない。

唯單りカチユーシヤに對する覺悟だけは事理明白、一點の惑も無く即時決行せにやならぬ。

『監獄を尋ねて何も彼もを打明けて、自分の罪を赦して呉れと詫まらう。若し又結婚する必要があるなら——爾うとも、必要があるなら結婚もしやう、』と心中に思つた。

此考——即ち道徳上の見地から萬障を排しても必ずカチユーシヤと結婚しやうといふ考は、此場合死中に活を求むる慰藉となつた。

財産一條に就ても土地私有が不正であると云ふ自分の確信と成るべく合するやうに處分しやうと思つた。實際何も彼も思切つて悉皆捨て、了はうと云ふほど強くなれなかつたにしろ、人

も己れも欺かずに力の成し得る限りを實行しやうと覺悟した。

是程堅い決心を起したは近頃久し振であつた。處へ家事取締のアグラフキョーナが來たのを幸ひに、實際心中に期待するよりは一層輪を掛けた斷乎とした調子で、此邸宅は拙者には最早不用となつた。随つてアグラフキョーナ御身に取締つて貰ふ必要も無くなつたと思切つて火蓋を切つた。

元來恁んな大きな邸宅を構へてるのは聽て結婚する意があるからだといふは言はず語らず解つてゐたので、俄に不用となつたといふ主人の心持が如何にも請取憎くて意味ありけなので、アグラフキョーナは呆れ果て、眼を圓くして主人の顔を不測さうに見た。

『是迄種々面倒を見てくれたお前の親切は誠に忝けない。が、恁んな大きな邸を構へて多勢奉公人を抱へて置く必要は最う無いのだ。此先き若し世話をして呉れる氣があるなら、家財道具の面倒でも見て貰うのだが、之だつてもお母さんの存生中と同様に放擲らかして置けば、其中には妹のナターシャが來て何とか處置をするだらうから……』

と言掛けると、アグラフキョーナは首を振つて、

『お邸も家財も要らないなんて、其様な事を仰しやつて、若し復たお入用になつたら怎う遊ばします。』

『イヤ、最う斷じて二度と要るやうな事は無い、』とネフリユードフは瀟乎と答へた。『コルネーにも二た月分の手當をして暇をやると言つて呉れ。』

『夫りや不可ません。失禮ながら御了簡違ひでムいます。怎ういふ御都合か存じませんが、外國へでも御旅行遊ばすお意なら、お歸り遊ばしてから復たお邸が要るのが目に見えてをります。』

『お前は見當違ひをしてをる。私は外國へ行くんぢやアない。尤も何處かへ行くかも知れんが、少と風變りの處へ行く……』と忽ちさつと顔を赤くした。

『寧ろ話して了はうか、』と心中に、『何も祕す事はない。所詮晚かれ早かれ話して了はにやならんのだ、』と思案しつゝ、『實は昨日、私の一身上に不思議な大事件を生じた、』と思切つて打明け

やうと決心して言葉を更め、『お前は田舎のマーリヤ伯母の許にゐたカチューシャを覚えてるか
ネ？』

『覚えてます段か。あの子には裁縫を教習んでやりました。』

『其のカチューシャがノウ、昨日裁判へ引出されたのだ。私が陪審員で列席してをる處へナ。』

『へエ、裁判所へ。先ア可憫相に！』とアグラフキヨーナは思はず顔を上げた。『怎うして先ア
裁判へ引出されたのでムいます？』

『殺人犯でノウ！』

『えッ、殺人犯！』と老女は偏呆れに呆れて了つた。

『殺人犯だ。爾ういふ目に會はしたのは悉く私の爲た業でノウ。』

『えッ、何でムいますと？』と訝かしさうに主人の顔を見つ、『變な事と仰しやいますネ。爾う
いふ大罪を犯されたのが閣下様のお仕業だといふのは怎ういふ仔細——妙でムいますネ、』とア
グラフキヨーナは老眼に電閃をピカリとさせた。此老女は其昔し主人がカチューシャに關係し

た一を善く知つてをるのだ。

『といふのは私の一端の過失が渠女の墮落犯罪の原因となつてゐるから、私は此罪にほしの爲め
現在の拙者の生活を更めやうと思つてゐる。』

『妙でムいますネ？ 怎うして閣下様がカチューシャの犯罪の原因になつてをります？』と老
女は不測の度を越して笑止しくなつたのを凝平と堪へた。

『夫はナ、カチューシャが重罪犯の嫌疑を受けるほどに墮落したのは畢竟私の過失が原因とな
つたのであつて見ると、カチューシャの今日は即ち私が作つた罪だから、全力を盡してなりと
助けてやらにやならんのだ。』

『それは閣下様、結構なお道樂ではムいますが、何も其様なに御自分でお咎めなさるほどなお
誤失でもないかと存じます。閣下様ばかりぢやない、殿方には誰方にもある事で、お話しへ解
れば圓く納まつて平氣で忘れてお了ひになります、』と老女は眞摯に更たまつて、『本とくお若
い時分の些細なお誤失でムいますもの。そんなに深くお咎めになつて、何の關係もない犯罪ま

で御自分の咎にお脊負遊ばすつてのは失禮ながらお氣がお弱過ぎます。手前には一向其お心持が合點めませぬ。其様な御遠慮は全く御無用と存じます。第一カチューシャは道に外れた渡世をしてをつたやうに承りましたが、豈夫か夫までが貴下様の罪ではムいませぬまい。』

『イヤ、私の罪だ！ 夫だから是非眞人間にしてやらんと私の義務が濟まん。』

『でも折角お盡力遊ばしても眞人間になれば結構でムいませぬが、難かしくらうと存じます。』
『難かしいかも知れんが、夫が拙者の義務だ。お前は若し自分一身の處置に就て心配するならお前に話して置かう、死んだ母が遺言いたに……』

『いゝエ、飛んでもない。自分の事などは決して考へません。お逝去れ遊ばした大奥様には一と方ならない御恩を戴きましたから、此上に何の手前が身勝手な申しませう。嫁に行つた姫のリーゼンカが引取つて呉れると度々申しますから、愈々お暇を戴きます時は姪の處へ参ります。ですから手前一身の振方は何にも心配はムいませぬが、閣下様が其様な向ふ見ずを遊ばすのが何分氣懸でムいませぬ。お若い時分ですもの、あの位なお誤失は誰にもある事でムいませぬ。』

『いや、私の考は大分違つてをる。何でもない些細な過失だとは思つてをらん。兎に角拙者には私の了簡があるから、此邸を始め家財一式の處分をするのを手傳つて貰ひたいものだ。宜いか、腹を立てて呉れる勿よ。是まで面倒を見て呉れたお前の親切は呉れなくも忝なく思ふのだから。』

不思議にネフリユードフは世の中に最も悪むべく厭ふべきものは誰よりも自分自身であると思ふ氣が付いてからは、人を嫌つたり憎んだりする念は全く失くなつて了つた。況してやアグラフキヨーナやコルネーの平生の忠實かな心掛には心底から嬉しく思つてゐたから、實はコルネーにも自分の不徳を懺悔したかつたのであるが、コルネーは平生からシカツべらしく四角張つてるので、其前で懺悔するだけの勇氣が何分出なかつたのだ。

で、裁判所へ行かうと昨日と同じ辻馬車で同じ町を通る路すがら、情々一身の變化の甚だしいのに呆れて了つた。昨日はミッシー嬢と婚禮するもしないも此方の都合次第で、ミッシー嬢に取つては自分の妻となるが一生の幸福、一期の榮耀のは云ふまでも無いと思つてゐたが、今

日は婚禮は扱置き交際するだけの資格さへ自分には缺けてるやうな気がした。

『若しミツシー嬢が自分の人物の真相を知つたなら、中々傍へも寄せ付けやうとはすまい。昨日ミツシー嬢が他の男と調戯けてゐるのを見て餘り快い氣持がしなかつたが、今日は夫どころの詮議ではない。假にミツシー嬢が婚禮すると云つたところで、爰に一人監獄に留置されて今日か明日にも西伯利亞へ遣られるものがあるといふのが解つてゐるは、幸福は扱置き虚心平氣に冷ましてゐられない。一方には欺して棄てた以前の情人が西伯利亞へ護送されやうといふ中で、若い妻と一緒に披露の訪問をして他人から祝つて貰へやうか。又女敵の關係を有つてる貴族長と一緒に議席に列なつて、ヌク／＼と平氣な顔して地方視學の議案に投票するなんて事が出来やうか。又何時になつたら物になるか解らぬ畫の稽古などを氣樂に仕てゐられやうか。』と瀟然と氣が付いて、『そんな暢氣な暇潰しをしてゐる時では無い。何を措いても辯護士を尋ねて意見を聞き——夫から監獄へ行つて、是迄の一伍一什をカチューシャに打明けけるのだ。』と恚う決心して、扱て愈々カチューシャに面會して一伍一什を打明け、自分の過去の罪を懺

悔して其罪を償ふためなら何なりと力の能ふ限りを盡して見やう、次第に由つたら進んで結婚までもしやうと、カチューシャに合つて懺悔する時の模様を胸中に描くと、歡喜の念が油然として涙が兩眼に溢れて來た。

第三十四回

其心持でネフリユードフは再び裁判所へ出頭すると、丁度廊下で昨日の廷吏と摺れ違つたので、昨日の囚徒は何處の監獄で、何處から免許を得たら面會出来るかと訊くと、宣告済の囚徒なら諸方に收容されてをる、愈々宣告が確定するまでは檢事の許可で面會が出来ると答へ、

『裁判が済みましたら檢事局に御案内致しませう。檢事は唯今法廷に出てるますから、何れ済みましてからですナ。さア、何半彼方へ。手前の受持は唯今初まる處でムいます。』

と、昨日に比べると氣の毒らしいほど叮嚀過ぎる應待振である。ネフリユードフも慇懃に會釋しつゝ、聽て陪審員の控所近くまで來ると、陪審員連は之から法廷へ出やうとする處で、紳

商バクラシヨーフ君は相變らずの御機嫌で、例に由て少々喫飲してゐた。學校教師のビョートル先生も例の通りの無遠慮な口を叩いて傍若無人な高笑ひをしてゐたが、昨日ほどには不快な感情がしなかつた。

ネフリユードフは實は自分とマースロワとの關係の一伍一什を陪審員の前で告白したかつた。『一體なら昨日法廷で、公判中に起立して衆人列座の中で懺悔すべき筈である、』と心中に思つた。が、扱て陪審員達と一緒に出廷して、前日通りの順序——先づ『開廷』と宣言され、昨日と同じ顔の三人の判事が金モールの襟付きの制服で正座に就き、昨日と同じ顔の陪審員が同じ背の高い椅子に着席し、同じ憲兵、同じ僧侶、同じ宣誓と、版で捺したやうな順序で壯嚴に行はれるを目撃すると、縦令心では懺悔する意でも昨日と同様に氣怯れがして此壯嚴を侵されなかつた。

裁判の次第は昨日と少しも變らなかつたが、陪審員の宣誓と陪審員に對する裁判長の辯論だけは省略された。

此日法廷に持出された事件は竊盜犯である。拔劍の憲兵に引張出された被告は二十歳ばかりの瘦細の胸幅の狭い若者で、血色の悪い黄ばんだ顔をして、鼠の霜降の上着を着て、唯つた一人で被告席に就き、萎れ返つて俯向いたまゝ、法廷に入つて來る人を一々上眼で見つてゐた。此若者は合棒と二人で差掛小屋の鎖鑰を破つて三圓六十七錢に値る古席數枚を盗出したので捕縛つたのだ。告訴狀に由ると、共犯者と二人で盗んだ席を擔いで通行る處を巡査に捕まつたので二人とも直ぐ自白して了つて監獄に入れられたが、共犯の錠前職は間もなく牢死して此男だけが法廷に引張出されたのだ。盗品の古席は證據物件として卓上に提出された。

審問の順序は總て昨日の通りで、證據書類、證據物件、證人、宣誓、尋問、鑑定人、對審と一と山ほどの手續をした。

證人の一人たる巡査に向つて裁判長や檢事や辯護士が代る／＼に種々雜多の質問を亂發する毎に、巡査は一々『然り』とか『知らず』とか云ふ紋切形の答辯をした。が、此巡査は平素の教練で神経が鈍くなり殆んど器械的となつてゐたが、夫でも矢張此凶犯の捕縛始末を申立てる

のが嫌さうなが現然と容子で解つた。確かに心中では罪人を氣の毒がつてゐるのだ。

最一人の證人は被害者たる家の戸主で、一見性急な肝癪持で、此古席は汝のかと訊かれた時、濫々自分の所有らしいと申立てた。で、副検事から元來此席を何にする、汝に取つては大切の品かと訊かれると、忽ち焦りくと肝癪を起して、『役に立たねエ古席を盗みやアがつて、俺ア要りましたねエ。如此エな七面倒臭エ事を訊かれるなら、古席ぐれるを捜すんぢやアがアせん。十圓札の一枚や二枚小附けにして捨てた方が文句が無くて氣が利いてるだ。俺ア、お前さん、辻馬車に最う五圓領奪くられてやさア。調戲ぢやアがアせんぜ、加之に持病の僕麻斯までが痛んで来りやア世話アねエや。』

證人の陳述は斯くの通りであつた。が、被告自身は何も彼も悉く白狀して、強繩に掛つた獸のやうにキョト／＼して恐かな怯／＼に四邊を見廻してゐた。

事件は極明瞭であつた。が、副検事は前日通りに肩を聳やかし、狡猾こくも犯人を巧く強繩に陥め込まうとして、中々巧い質問を掛けた。

其辯論に由ると、此犯罪は人家の鎖鑰を破壊して闖入した重罪で、其故に最も重き刑に處さねばならぬと論告した。裁判所指定の辯護士は検事の説を論駁して、犯罪の行はれたは人家ではなくて物置小屋だから、犯罪其物を否定する事は出来ぬが、検事の論告する如く社會の安寧に危険を及ぼすべき性質のものでないと辯明した。裁判長は前日通りに絶對中立の不偏不黨の役目を勤めて、陪審員に對つて解り切つてる事實と當然解り切つてをるべき筈の理窟とを執拗く説明して聞かせて後、前日通りに休憩を命じた。で、陪審員共は復た紙頁を喫つたりタワイもない下らぬ話をしたりする中に、再び廷吏が来て『開廷』と通告した。其間二人の憲兵は抜劍して犯人に座睡りさせまいと脅かしてゐた。

調書に由ると、此若者は親許から煙草製造場の丁稚に遣られて五年間奉公してゐたが、同盟罷工の野次馬をして追出されて了ひ、夫からは奉公口が無くて浮浪してゐる中に、持つてゐるだけは飲んで了つて、町中の彼方此方ウロ／＼してゐた。すると或る居酒屋で、矢張同じやうに長い間、口が無くて浮浪してゐる鏡前職の飲んだくれ男と一緒になつた。で、其晩二人が酒に喰酔

つた擧句に共謀して、差掛小屋の錠前を破して手當り任せに古蓆を撥ぎ出したのださうだ。二人ともに直ぐ捕縛つて直ぐ白状して監獄に入れられたが、錠前職の男は公判にならない中に死んで了つたので、若い方だけが危険な動物と見做されて社會から隔離すべく論告された。

『昨日の犯人と同様に矢張危険な動物なんだな、』とネフリユードフは進行する一伍一什を聞き取りつゝ心中に考へた。『渠等は危険だらう。が、彼等を裁判する吾々は危険でなからうか。餘人は兎も角、斯くいふ自分は人を欺き人に禍ひしたものだ、夫にも關らず、朋友知己郷黨等は皆少しも自分を卑めない。卑めるどころか、却て敬つてをる——』

『この小僧めが大した悪人でなく、尋常普通の人間なのは知れ切つてをる。誰にも能く解る。境遇が境遇だから出來心に誤られたので、根が罪の無い單純な男であるは解り切つてをる。であるから怎ういふ青年の惡に走るを防ぐには何よりも先づ墮落の原因たる周圍の誘惑を除いてやるのが急務である。小僧めが零落れて田舎から町へ奉公に來た抑もの初めに心あるものが若し慈悲を掛けて救つてやつたなら——』とネフリユードフは若者の意氣地無さうなキョトキ

ョトする顔を見つゝ、『町へ來て奉公に住込んでからでも猶だ遅くは無い。十二時間の仕事を済ましてから年長の職人仲間に伴れられて居酒屋へ出掛ける時に、誰でも關はぬが、那樣な處へ行つてはならぬ、汝の利益にならぬ、』と一言云つて聞かしたなら、小兒だもの、必ず行かなかつたに違ひない。随つて悪い横道に外れもせず、惡事もしなかつたらうに——

『然るにダ、長い間の奉公中、誰一人此若者を不便がる者もなく、可哀相に犬や猫のやうに風が生いてはならぬと頭の毛を短かく刈込まれて、職人原の走り使ひに虐使れてゐた。其上に酒を飲んだり虚言を吐いたり欺瞞したり喧嘩をしたり怠けたりするものを立派なお手本となる人間だと年長の職人達から教へられてゐた——』

『加之ならず、過度な勞働と不養生とで身體を破損し、氣が違つた同様に夢現で無我夢中に目的もなく往來を漂泊して、其果が人に欺瞞られてツイ浮か／＼と差掛小屋に忍込んで、三文の足しにもならぬ腐つた古蓆を盗出したのだ。然るに吾々は無垢なる少年を此の如くに墮落せしめた原因を尋ねて除かうとしないで、渠一人を處刑すれば惡を減ほし得たものと思つてゐる——』

『恐るべき哉！』

と、ネフリユードフは頻りに反覆熟慮しつつ、眼前の裁判などは目にも耳にも入らず、此の痛切なる實例を目のあたりに見て懾然として恐れた。怎うして之が今まで自分に解らなかつたらう。何故又他の連中は猶だ解らずにゐるだらう。何とも合點が行かぬ事だ。

第三十五回

休憩時間にネフリユードフは二度と再び法廷に戻らぬ決心で廊下へ出た。渠等をして渠等の欲する儘に裁判せしめやう。此の惨らしい不見目なお茶番のお仲間には逆も最う辛抱がならぬ。何しろ検事局を尋ねて検事に直接に面會しやうとした。廷吏は検事の事務繁忙を楯にして取次がうともしなかつたが、其様な事には頓着なく検事局の入口まで行くと、丁度中から出て来た他の廷吏に邂逅はしたので、自分は陪審員の一人だが緊急事件で検事に面會したいと申込んだ。

公爵の肩書と衣服の立派なお蔭に廷吏は煙に巻かれて検事に通じ、ネフリユードフは首尾よく通されたが、遮二無二面會を要求して止まぬ強情に検事は困り抜いた顔をして突立つた儘、『何御用事です？』と嚴格に云つた。

『私は陪審員ネフリユードフといふもの。實は折入つた用事があつて女囚マースロワに面會したいのですが、何卒許可して戴きたい——』と口早に凜乎と言退けつ、今や一生の運命に大變化を來す序の口に飛込まうとするを自覺しつゝ、サツと顔を赤くした。

検事は脊の低い色の黒い眼のキョロついた男で、胡麻鹽になりかゝつた五分刈頭髮と同じやうに短かく刈込んだ鬚鬚を生やした下顔を突出しつゝ、

『マースロワ？ あッ、あの毒殺一件のですナ、』と沈拂つた調子で、『だが、怎ういふ用事でマースロワに面會したいのです？』と更に物柔かな低音で、『用事が解らないと許す事が出来ませぬ』

『實は重大な用事があつて面會したいのでゐるが——』とネフリユードフは赤面しながら云つ

た。

『爾うですか』と検事は眼を釣上げてネフリユードフを睨と見ながら、『マースロワの裁判は怎うなつたか、御存じでせうナ？』

『知つてます。昨日公判になつて徒刑四年と云ふ不當な宣告を受けました。併し渠女は全く冤罪です。』

『昨日宣告が濟んだばかりだと、』とネフリユードフが無實を主張したのを耳にも入れずに検事は、『尙だ確定しないから、矢張未決監に居る筈です。面會日が定つてますから其日に直接お出掛けなすつたら宜からう。』

『だが、實は一刻も早く面會したいので……』と云ひつゝネフリユードフは段々と最後の運が迫つて來たやうな感情がした。

『一刻も早く——何故そんなにお急ぎになります？』と検事は堪り兼ねた容子で眉を釣上げた。

『何故でも——マースロワが此の如き不當な重刑に處せられたに就ては私が大に責任があるの

で……』と慄聲で云つて、云つて了つてから要でもない事を口外したもんだと思つた。

『怎うして？』

『實はマースロワといふは昔し私が若氣の失策で騙して棄てた女。畢竟夫が原因で墮落したので、若し私が棄てなかつたなら、恐らくは墮落もせず従つて今度のやうな馬鹿々々しい目にも會うまいと思ひます。』

『さア、怎うですかナ、矢張同じ事でせう。だが、夫が爲めに面會する必要があると云ふのは——』

『有るぢやアありませんか、爾ういふわけですもの。マースロワに對する私の責任上飽くまでも嫌疑を晴らしてやる手段を盡して、愈々百計盡きたなら是非が無い。私も共に西伯利亞まで跡を追つて、随分場合に由つたら婚禮……まで仕やうと……』とネフリユードフは口訥りながら云ひつゝ、我知らずホロリと涙を覆した。

『えッ、何ですと……飛んでもない、意外千萬な——』と云ふ内、検事は偶つと以前にネフリ

ユードフの話を誰からか聞いた事があるのを憶出し、「貴下は確かクラスペールスク郡會の議員でしたナヤ」

「其様な事は怎でも宜しい。私のお願ひする一條とは何の関係もありませんまい。」とネフリユードフは腹立たしげに顔を赤めながら云つた。

「勿論」と検事は一向平氣で腹の底に微笑を含みながら、「唯餘り意外な、餘り常識を外れた事を仰しやるから……」

「常識を外れてるやうとるまいとお關ひなさるな。面會を許して下さいさるか、下さらんか。」

「許す事は許します。今直ぐ面會許可の命令書を書いて上げますからナ、暫らくお待ちなさい。」
 検事は直ぐ書卓へ行つてスラノと書きつゝ、「先ア、腰をお掛けになつたら宜からう。」と云つたが、ネフリユードフは突立つたまゝ凝焉としてゐた。

廳で検事は認可狀を書いてネフリユードフに渡しながら、暫らく不思議さうに其顔を睨つと見てゐた。

『最う一ツお話しして置く事がある。私は以來陪審員として出廷致しませぬから……』

『それなら法廷へ然るべき理由を具してお届けなさらんけりやならぬ。』

『私の理由と云ふは外でもムらぬ。一體裁判と云ふものは總て無用で且人道に背いたものだと考へます。』

『如何にも、』と検事は底知れぬ微笑を洩しつ、其様な説は誰も知つてゐる笑止な沙汰だと云はぬばかりに、『御道理ですが、検事の職として下官はお説に同意し兼ねると御承知置き願ひたい。左に右く理由を具して法廷へお届けなさらんけりやならぬ。法廷が其理由を相當と認めるか不相當と認めるか、何方か知りませんが、若し不相當と認めたら罰金を科するだけですから、其のお意でお届けなさるが宜しいでせう。』

『いや、爰で貴下にお話しすれば此上更に外で繰返す必要はムらぬ、』とネフリユードフは腹立たしげに云つた。

『では失禮します、』と検事は此の變挺來なお客を一刻も早く外して逃さうとして軽く頭を下

けた。

で、ネフリユードフが室を去ると直ぐ

『誰だい、君の話してゐるのは？』と一人の同僚が壁を掛けた。

『ネフリユードフ公爵さ。君も知つてゐるだらう、クラスノペールスクの郡會で不思議な説を吐く著名の男さ。先生、陪審員になつてゐるさうだが、昨日徒刑に宣告した女囚ナ、あの女を昔し騙した事があるんださうで、其女と婚禮しやうと仰しやるのだ。』

『えッ、何だと？……そんな馬鹿けた咄があるもんか。』

『あつても無くて爾う仰しやるんだから仕方が無い。加之も彼の通り興奮してゐる。』

『困り者だナ。此頃の青年は得て其様な不健全な思想に耽りたるが。』

『だが、公爵は既う青年でもないぜ。』

『併しネフリユードフ君も困り者だが、君の有名なイワシエーンコフ君にも閉口してうナ。毎日／＼困らせられる。無休に際限もなく饒舌るとも、饒舌るとも。』

『那樣いふ人間は絶対に滅すべしだ。那樣いふのが眞に社會の妨害者といふものだ。』

第三十六回

検事局を去ると直ぐ其足で未決監へ行つた。が、マースロワは爰には在不在で、典獄が多分假留置監だらうと教へて呉れた。

假留置監までは大分遠方だから、行き着いた前は日がトボ／＼になつた。で、大きな陰氣臭い監獄の門を入らうとすると、門衛は引留めて鉦を鳴らし、其音に應じて押丁が忽ち現はれて來た。

ネフリユードフは面會許可の命令書を出して示すと、典獄の許可が無ければ取計ひが出来ぬと云つた。夫なら典獄に會はうと二階の典獄の私室へと階段を登つて、丁度登り切つた時、面白い、節の細かい、手の急いピアノの音色が何邊からか微かに聞え、只ある室から片眼を繙帯した意地の悪るさうな下婢が突と飛出し、手荒くガタンと鬨を掛ける其途端、曲調が中から漏

れてネフリユードフの耳を打つた。誰も聞き飽きてるリストの亂曲だが、中々面白く上手に弾いてゐた。が、其中の或る一節だけで、一節の切まで弾くと復た初から繰返してゐた。

ネフリユードフは典獄は在宿かと訊くと、繻帶の下婢は不在だと答へたので、

『何時歸つて來ます？』と訊いた。

其時曲は待た止つて、復た初めから繰返した。音色が段々と冴えて手が段々と籠んで來た。

『訊いて參りませう、』と云つて、下婢は内へ入つた。

曲は嫻々として次第に興を増したが、忽ちブツと切れて、それと共に人の聲がした。

『何時歸るか解らないッとお云ひ。訪問に行らしたんだからネ。人う、折角油が乗つた處を邪魔ッけだよ、』と戸の背後から女の聲がした。曲は復た初まつたが、復た切れて、今度は椅子を引摺る音が聞えた。ムシヤクシャ腹のピアニストが時ならぬ時分の厄介客に邪魔されたのをブリ／＼怒つて、到頭堪りかねて肝癪を破裂させた容子が眼に見えるやうだ。

『お父さんは在ませんよ。』と青白い病身らしい散らし髪の眼の縁の黒い娘は金切聲で怒鳴つて

次の室へと飛出して來て見ると、意外に立派な扮装をした紳士が在たので、俄かに言葉を改めて丁寧な、『父は在ませんが、何卒此室へ。何御用でまいりますの？』

『當監内の囚人に面會を願ひに來ました。』

『國事犯でムいませうネ？』

『いや、國事犯ぢやアありません。檢事からの認可状を持つてゐます。』

『左様でまいりますか。生憎と父は出掛けましたし、妾には一向解りませんが、何卒、先アお入り遊ばせ。あッ、副典獄にお話し遊ばしたら宜しうまいります。多分猶だ役所に居りませうから、役所へ行らしてお頼み遊ばせ。貴下のお名前は？』

『難有う、』とネフリユードフは娘の間には答へないで、急いで挨拶をして歸つた。

お客が歸つてからも入口の戸は開放したまゝで、凭ういふ場所柄に不似合な病身然たる娘の柄に無い陽氣な調が再た初まつた。儲かにお稽古のお練習をしてゐるのだらう。

廣庭まで來ると、短かい口髯の生えた役人に會つたから、副典獄の所在を尋ねると、其人が

即ち副典獄であつたので、檢事認可の命令書を見せると、未決監への認可状では許す事が出来ぬと云つた。其上に此日は時刻が遅かつたので、『明日復た入來つしやい。明日の十時からなら誰にでも面會を許します。典獄も多分居りますから。すれば普通面會室なり、或は典獄さへ許せば事務所でも面會が出来ます。』

恚ういふわけで此日は到頭面會が出来ずに歸つた。が、唯一圖にマースロワに面會しやうとばかり凝固まつてゐたから、歸路の途中も法廷の事などは少しも考へないで、檢事や副典獄と交渉した顛末ばかりが胸に浮んで來た。

マースロワに面會したさに檢事と面白くもない問答をしたり、少とも早く會はうと二箇所の監獄へ草臥足を引摺つたりした一日の骨折で神經は非常に興奮して容易に沈着かれなかつた。で、家へ歸ると直ぐ、暫らく手を附けなかつた日記を出して、彼處此處を拾ひ讀みしてから次のやうに書き留めた。

『余は日記を廢する事二年間、再び此兒戯をすまじと決したり。然れども日記は兒戯に非ずし

て各自の心内に住する神聖なる眞我との交通談話なり。余の眞我は恰も二年間昏睡し、其間余は眞理を語るの友なく眞我と交會する能はざりしが、爰に此年四月二十八日陪審員として法廷に出廷するや端なくも意外なる事件に逢着して余の眞我は翩然として昏睡より覺めたり。其昔し余が誘惑したる後弊履の如く棄て、顧みざりし少女カチューシャは思ひきや獄衣を纏うて被告席に座し、偶然の錯誤よりして何等の罪なくして徒刑に宣告せられたり。此事たるや、畢竟余が曩日の非理非道に基ひし、余の浮薄なる行爲の爲めに此可憐なる少女をして暗黒の底に墮落せしめ終に無辜の冤罪に泣くの不幸に陥らしめたるや明かなれば、余は能ふ限りの力を盡して救ふべく決心し、此日檢事局の許可を得て監獄に行きたれども時刻遅れて面會を許されざりき。併し乍ら余は必ずカチューシャに面會し、叩頭して曩日の罪を謝し、罪過を償ふためには結婚さへもすべく覺悟したり。神よ、助け給へ。余が心は平和なり、余が心は歡喜に充てり。』

其晩マースロワは暫らく就眠ねむかれないで、何時いつまでも眼まなこが冴さえくして、見る氣もなく教會の長老の娘が往つたり來つたりする入口の方角を睥ひらめつゝ頻りに過去こしかたや將來ゆくまゝを思ひ暮らしてゐた。此後は最う怎う間違はうとも薩哈連サハリンの囚徒さむらいづれの妻となるやうな爾んな所爲まゝは決して爲なまい。成るなら監獄吏——書記なり看守なり、間違つたら見習みならひでも關はぬから役人の端くれと名のつくものと夫婦いづしよになつて世を渡らうと考へた。尤も蜂が蜜を搜すと同様に多勢おほぜいが自分の踵かかとを尾けて廻るのだから怎んな男でも撰擇せんたく見取みとりなのだ。衆人みんな如此このやうな目に會つて行着ゆきついちまうんだ。妾わたしだけは石にかぶり着いたつて瘦かせなんかするもんか！

と口裡くちうちで力ちからんだが、偶つと法廷で辯護士が自分の顔ばかり見てゐた事、辯護士は魯か裁判長初め判事も檢事も——夫どころかい、自分の顔を見たいばかりに態々法廷へ來たものさへあつた事やら、朋輩ともだちのベルタが面會に來て馴染客の或る學生が自分の安否を大變心配してゐると話した事やら、續いてツイ唯つた今の赤毛の女の大喧嘩やら、麵麩屋が大負けに麵麩めんぷを負けて呉れた事やら、何やら彼やら、夫から夫と種々雑多な記憶を順々に呼起したが、不思議とネフリ

ユードフの事ばかりは少しも憶出さなかつた。

尤も一生に再たと有るまじき幸福な眷こゝろかしい兒童時代こどものときや娘盛むすめりやネフリユードフとの初戀を憶出すのは何よりも一番悲しいから、心の奥の奥の最極さいごくの奥に秘藏ひそまひ込んで了ひ、今では全まるて忘れて憶出しもしなければ夢にさへも見なかつた。今日けふといふ日、久し振で法廷で顔を合はしても一向氣が付かなかつたは、最初はじめてからネフリユードフを念頭に置かなかつたからで、チョツピリ髻こむぎの五分刈頭の昔しの軍人姿が參々まぎまぎした八字鬚はちすげの前額まへかみの拔上ひきあつた禿顛かぶに變つて見違へたばかりでは無い。七年前にネフリユードフが出征軍から戻路もどきみちに、伯母の家を素通りして了つた彼の暗黒な恐ろしい晩以來ネフリユードフの一條を全で過去に葬つて了つたからである。

其時は既う妊娠したのに氣が付いて日がな毎日ネフリユードフの歸かへるのを待焦まちれてゐた。腹の中の子は少しも苦しないで、折々不意に柔かな塊かたまりが動き出すのを不思議に思ふばかりだったが、其の恐ろしい晩ばんから以來こゝろ急に容子が變つて猶だ産れもしない小兒こどもが既う荷厄にやうがひ介になつて來た。

伯母さん達もネフリユードフを待暮して、是非復た歸路に寄つて呉れと手紙を出した。が、今度は命令通りの時刻に必ずホテルブルグへ歸らねばならぬから途中で下車する事は出来ぬと電報を打つて来た。此事を聞くとカチューシヤは當日停車場まで行つて會はうと決心した。

汽車の着くのは夜の二時だから、二人の老主人を寢床へ入れてから後暗方の娘のマーシカを伴れ、肩掛を頭からスッポリ被り、古靴を穿いて裾を端折つて停車場へと駈付けた。

生暖かい風交りに緩い大粒の雨が車軸を流すやうに一とき降り降つて復た止んだ後、田圃の小徑が漸と解る位の暗夜の中を、林の近路を抜けやうとして入ると鼻を摘まれても解らぬ眞暗三寶で、常から道馴れてるカチューシヤでさへがツイ踏迷つたので、着車の時刻より餘程早くから裕然と待受ける筈の豫定が外れて、唯つた三分しか停車しない此停車場まで漸と着いた時は、早や二番目の鈴が鳴つた處である。

マースロワは周章して、ブラットフォームに駈込んで一等室の前まで行つた。車室の内は油燈が燦爛してゐる上に、太い蠟燭を二本まで點けた卓子を中央に、二人の士官が天鷲絨張の椅子に

倚掛つて相對ひに骨牌戯をしてゐた。ネフリユードフは緊合と適つた洋袴に白襦衣を着け、後ろに倚掛りつゝ椅子に眩を凭れて笑ひながら紙煙を燻かしてゐた。其顔を見るや否、凍んだ手で車室の窓を叩く其途端に、三番目の鈴が鳴つて、列車は不意に後ろへガタツと一と下りして後徐々と一車宛進行を始めた。骨牌組の一人は手に札を持ちつゝ突と起つて窓外を見た。恰も同時にカチューシヤは再び窓を叩いて顔を出す、其時此車室は徐ろに動き出したので、カチューシヤも車室と並行して歩き出した。此容子を見て骨牌組の士官は頻りに窓の戸を降さうとガタ／＼させる處へネフリユードフが来て、士官を推退けて自分が代つて降さうとした。其中に汽車は段々早く進行し初し、カチューシヤも愈々疾足に駈出して、漸とこさと窓の下りたのを見たが、既う間に合はなかつた。車掌は意地悪くカチューシヤを推退けつヒラリと車へ飛び移ると共に汽車の進行は一段急速力を増した。カチューシヤは雨に濡れたブラットフォームを一散走りに駈けて、危なく其端から轉がり落ちやうとしたのを漸とこさと段を駈下りて、死的狂ひに線路に沿つて益々駈出したが其中に一等室は二等室となり、終には三等室となつて瞬一瞬

毎に速力を増し、到頭背後にランプの附いてる最終の車が通越して見えなくなつて了つた時、漸く機關へ水を供給する水槽の傍まで來た。風は頭を包む肩掛を吹いて、裾はヒタ／＼に濡れて足に纏はり、到頭肩掛を吹飛ばされて了つたが、矢張夢中に駈けてゐた。

『カテリーナ、肩掛が落ちてよ、』と後から息せきと追付かうと駈けて來る小娘は金切聲を出した。其聲が附いたカチューシャは初めて顧盼りざま肩掛を拾取ると共にワツと聲を上げて『行つて了つた!』と泣出した。

『那樣な立派な一等室に天鵝絨の肘掛椅子に座つて、戯談を云つたりお酒を飲んだりしてゐるのに、妾は此處で泥塗れになつて、眞暗闇に雨風に揉まれて泣いて立つてゐる』と心に思ひつゝ、地面にベツタリと座つてシク／＼戯取上げた。小娘も悲しくなつて。全濡れのカチューシャに縋り付いて一緒に泣いた。

『さッ、家へ歸らう』と云つた。が、心中は一緒に伴れて來た娘の事など考へないで、『今度の汽車が通つたら、寧ろ一と思ひに轢かれて死んで了はう、』と思ひつ覺悟を定めたが、前後不覺



に頂顛まで登詰めて夢中になつた後、段々と沈着き掛つた時、能く有る事で、腹の中の子即ちネフリユードフの紀念の子が不意に伸びをしたらしく、細くて繊弱い強い棒のやうなものがウツと突張つた。するとツ、今がた逆も生きてゐられない程にネフリユードフを怨んで、寧ろのこと面當に死なうとさへ思詰めた心持が忽ち何處へか消えて了ひ、此子が可哀相だと思ひ直して泣く泣く起上つて、肩掛を被りつ悄然と停車場を去つた。

其晩遅くカチューシャは全濡れの泥だらけとなつて、勞れ切つて家へ歸つたが、其瞬間からカチューシャの心持は段々と變つて到頭現在の境涯に墮落し初めたのだ。

此晩からカチューシャは神の存在や人間の至善を信する事を止めて了つた。夫迄は自分も神を信すれば他も亦神を信する事と信じてゐたが、其晩からは眞摯に神を信するものは世間に一人もないので、神だの神の掟だのといふは悉く虚偽の塊だと思込んで了つた。又自分一人が戀したわけではなく互に思ひ思はれてゐたに違ひないのだが、戀に焦がれた男は己れの慾を遂げると忽ちケロリと忘れて了つて、女の大切な戀を玩弄にした。然も其人は自分が知つてゐる範圍の

最高級の人であつたが、其人でさへが此通りなら、おしなべての男の悪性は推して知るべきである。

恚う思込んで了つてから後、カチユーシヤが遭逢はした事は事毎に益々此確信を強めざるは無いネフリユードフの伯母なる親切な實意のある老婦人でさへが、カチユーシヤが今まで通りに働く事が出来なくなると暇を出して了つた。夫から以後に出會つた人間は、女といふ女はカチユーシヤを金儲けの道具に使用ひ、男といふ男は初手の警察の好い齡をした老爺を始め監獄の押丁まで、皆カチユーシヤを快樂の目的物と考へてゐた。で、世の中に誰一人として此の汚ない快樂以外に心を留めるものはないやうな氣がしたが、取別けて一本立になつた二年目に一時世話になつた老操觚者の説を聞いてからは益々此信仰を深くした。此老先生は常から口癖のやうに、人生の快樂を組成するは唯此一義で、之を詩的生活とも美的生活とも云ふのだと極露骨にカチユーシヤに話して呉れた。

で、人に誰でも己れの爲め、己れの快樂の爲めに生きてるので、神とか正義とかは皆虚偽であると思つた。勿論、時偶は、何故世の中は恚うも間違つて互に苦め合つたり辛め合つたりするのかと不思議に思はぬでもなかつたが、恚ういふ時は何時でも這般な世の中には住はないのが一番の上分別だと直ぐ定めて了ひ、氣が鬱いだり結ほれたりした時は煙草を喫んだり酒を飲んだりして紛らした。何よりも氣が利いてるのは情夫を作らへてやっさもツさを忘れて了うのが一番であつた。

第三十八回

翌れば日曜日の朝の五時、婦人檻房の廊下から例刻の笛が鳴つた時、既から目が覺めてるコラブリヨーフはマースロワを起した。

『あッ、妾は罪人だ——最う罪人なんだ、』とマースロワは心中慄然としつゝ、目を摩りながら夜が明けると最う徐々と汚なくなる悪空氣を嫌々呼吸し、最一度グツスリと二度睡をして楽しい夢でも見たかつたが監獄の怯氣癖が睡氣に勝つて、足だけ踏伸して四邊を見廻した。

大抵は眼を覺ましてゐるが、年嵩の小兒だけが猶だ睡つてゐた。酒の密賣をした女は小兒の枕とした上衣を目を覺まさないやうに祕と抜取つた。線路番人の娘は襦袢の襦袢を乾さうと煖爐の傍に釣るしてゐた。碧い瞳のフ井ヨードーシヤは泣叫ぶ赤兒を抱いて柔しい聲で和してゐた。肺病患者は激しく咳込んで兩手を胸へ當て、顔を眞赤にして、咳の途切れ目には嘆息といふよりは泣くと云つた方が當りさうた漢息を洩らした。赤毛の肥満女は膝を折曲けて仰向になつたまま前夜の夢を面白さうに話してゐた。放火犯の老婆は聖像の前に立つて一々十字を切つて折腰をしては一ツ言葉を何遍も繰返してお祈禱を上げてゐた。教會の長老の娘は床の上に座つて茫然した睡さうな目をして前面の方を見てゐた。お洒落さんは脂氣のある黒い硬い髪の毛を指に巻付けてゐた。

忽ち上靴の音が廊下から聞えると共に鬨が排き、ジャケットに鼠の短かい袴の掃除役の囚徒が二人ツ、カ、カ、と入つて来て臭い桶を房外へ持出した。女囚達は顔を洗ひに廊下の水槽へ出掛けたが、赤毛の女は隣房の女囚と落合つて復た喧嘩を初めた。復たしても悪口、怒鳴り合、それ

から泣言だ。

『獨房へ行きてエのか』と老押丁は赤毛の女の肌拔ぎのボテ／＼した脊中を平手で、ビ、シャリと廊下の隅まで鳴るほどに喰はせながら、『好い加減に吐くの止めねエと諸かねエぞ。』

『何だねエ、阿爺さん、』と女は茶にして了つて、『お調戯けでないよ。』

『さッ、依違しちやア不可ねエ。』と老押丁はヤイ／＼急ぎ立てた。『急いで支度をしや。日曜のお勤めに行くんだ。』

マースロワが衣服を着更へて頭髮を拵る間もない中に、典獄は副典獄を伴れて遣つて來た。

『さッ、檢閲だぞ、』と押丁は呼ばはつた。

すると、其邊此邊の檻房から女囚たちがゾロ／＼と現はれて廊下に二列に並び各自が前列の肩へ手を掛けると共に點呼が初まつて、無事に檢閲を済ますと直ぐ女囚の取締が一同を引率して禮拜堂へと行つた。

マースロワとフ井ヨードーシヤは彼地此地の檻房から集まつた百人以上の女囚の行列の中央

にゐた。一同は悉く白い獄衣の揃ひに白い手巾を頭に巻いてゐたが、其中で色物の普通の衣服で交つてゐたのは西伯利亞の良人の許へ小兒を伴つて行く流人の女房達であつた。

階段は此囚人の行列で一杯になつて、上靴の軽いバタ／＼といふ音が、折々は笑聲も交るがヤ／＼した話聲の中へ聞えた。中段の廊下の曲り角でマースロワは敵のボーチコワが前の方に行くのを發見して、俄に顔色を變へてフキヨードーシヤを見た。段を下り切ると女囚達一同鳴を鎮めて、各自に十字を切つて頭を下けながら、尙だ一人も入つてゐない金光燦爛たる禮拜堂の中へと、互に押合ひ壓合ひつゝ、右手の女囚席に着いた。

女囚が後席した後から、淡鼠の獄衣の男囚、即ち流人、收檻人、教會破門者等の面々が大きな咳拂ひをしながらゴタクサと左側と中央の席に着いた。

廻廊の一方は最先きに入場した西伯利亞の徒刑囚で、頭を半分だけ剝落ちて重い鐵鎖を足に引摺つてゐた。

此の監獄の禮拜堂は或る富豪の商人が數萬圓を寄捨して新築粧飾したので、金銀五彩照り輝いてピカ／＼してゐた。

暫時は寂として聲なく、唯咳拂ひと鼻を拭む音と赤兒の泣聲と、彼方此方で鏗々鏘々たる鐵鎖の響きだけが絶間なかつた。が、中央に立つ囚徒達は徐々と動き出して、互に押したり押されたりして、到頭禮拜堂の中央に通ずる一條の道を作ると、典獄は此道を通つて滿堂の囚徒の最前なる第一列の中央の自席に就いた。

第三十九回

儀式は始まつた、先づ次のやうな順序で。

一種奇々妙々な狀をした到つて勝手の惡るさうな金襴の法衣を纏つた司祭は、細かに刻んだ麵麩を叮嚀に皿に列べ、一々昔の聖の名や祈禱を繰返しては葡萄酒の杯に片々々残り少なに摘み入れた。其時、長老は第一にスラヴ語の祈禱を讀上げたが、左らぬだに中々難かしくて解り悪いのを早口に讀むんだから愈々以て何の事ツたか全然解らなかつた。夫から囚徒等と一

緒に代る／＼に歌つた。祈禱は重に皇帝と皇族との健康を祈つたものばかりで、此願文を一々各別に或は他の祈禱と一緒に何度となく繰返した。其間會衆は跪いてゐた。其他に使徒行傳中の文句を度々讀上げたが、變に緊迫めたやうな苦しい聲を擧り出すので、何を讀んでるのか皆目解らなかつた。

夫が終ると、今度は司祭が燦々と馬可傳の第十六章を讀上げた。此章には基督は死人の中より甦つて、天に昇つて父なる神の右に坐するに先だちて、先づマゲダラのマリヤに現はれて七ツの惡鬼を逐出し、更に十一人の弟子に現はれて曰く、此福音は遍く世界を廻りて宣傳へよ、信ぜざるものは死し、信じてバプテスマを受くるものは救はるべく、彼等より惡鬼を逐出し、病に手を觸るれば忽ち醫し、異邦の新らしき言葉を語り、蛇を掴み又毒を飲むとも害なく死せざるべしとあつた。

元來此儀式の根元は、司祭が斷つて葡萄酒に入れた麵麩の片が或る供養をして手術を行ひ且祈禱する時は神の血と肉とに變化するといふ假定に始まつたのである。

で、此手術を行ふが即ち司祭の役目で、金欄の袈裟に纏はる手に規則的に擧げたり下げたりして、終ひに兩膝を突いて祭机と其上に列べた祭具に一々接吻する。一番大切なは兩手で布巾の兩端を握んで、靜かに拍子を取つて銀の皿と金の杯の上を右左へと引張つて動かすので、其間に麵麩と葡萄酒とが肉と血とに變じて了うのだから、儀式中の此手術が最も嚴かに行はれた。

『恵みある最も純潔き最も神聖なる處女マリヤに——』と司祭は金の中仕切の奥から聲を掛けると、唱歌團は其聲に應じて、處女の操を失はずしてキリストを産みたるが故に有らゆる諸天神女よりは更に尊く更に榮えある聖母マリヤの譽れを輝かすは正しき務なりといふ意味の歌を莊重に歌つた。此歌の間に葡萄酒と麵麩とが血と肉とに一變して了うのだから、司祭は布巾を取つて、先づ麵麩の片を中央から四つに切つて葡萄酒に漬けてから後己が口に入れた。神の肉の一片を食し、神の血を少々飲んだ意なのだ。夫が濟むと、帷帳を引き、金の中仕切の中央の扉を掛けて、手に金の杯を持つて現はれ、敬虔の心深き者は來つて神の肉と血とを享けよと

招いた。

五六人の小兒は忽ち現はれて来た。

司祭は一々小兒達に其名前を聞いてから、丁寧に杯から酒と一緒に麵麴の一片を抄ひ取つては一人々に代る／＼小兒の口の奥へと入れて與つた。長老は一々小兒の口を拭いて遣りながら神の肉を食し神の血を啜つたと云ふ意味の歌を面白く歌つた。之が終ると、司祭は再び中仕切の奥へ入つて、残りの血と残りの肉とを悉皆喰べて了つて、口鬚と口と杯とを拭いて、薄い牛の皮の靴の踵を鳴らしながら好い機嫌で現はれて来た。

大切な宗教の儀式は之で済んで了つたのだが、司祭は不幸なる囚徒を慰めやうとして普通の儀式以外に別な儀式をした。今度は無數の蠟燭で照らされてる顔と手だけの黒い鍍金の鍍金像即ち自分が食つた神に像つたと云ふ鍍金像の前へ行つて、妙な調子外れの聲で讀むのだから何方が解らぬが次の變挺な文句を列べ立てた。

『聖徒の中の榮えある最も美はしきエスよ、諸々の殉教者に頌へられたる全能の主エスよ、私

を助け給へ、私の救世主なるエスよ、最も美しくしきエスよ、救世主エスと汝を呼ぶものに恵を與へ玉へよ、祈禱に生れ結ふエスよ、總ての聖者よ、總ての豫言者よ、彼等を天に生るゝに値ひするものと認め玉へよ、人類を愛するエスよ。』

と爰で言葉を切つて息を吐き、再び十字を切つて叩頭した。典獄も看守も囚徒も皆同じやうな所爲をした。廻廊からは鐵鎖の摺合ふ音が前よりは一層絶間なく響いた。

司祭は更に言葉を續け、

『有らゆる天の使の中の造物主、有らゆる權威の神、有らゆる天の使の最も驚嘆したる不訶思議のエスよ、最も權威あるエスよ。吾々の有らゆる祖先の罪の贖ひ主よ、有らゆる王の讚美となれる最も美はしきエスよ、有らゆる王の力となれる最も榮えあるエスよ、有らゆる豫言者の満足となれる書も善なるエスよ、有らゆる殉教者の力となれる最も不訶思議力あるエスよ、有らゆる僧侶の喜びとなれる最も謙遜なるエスよ、有らゆる聖者の極美となれる大慈悲のエスよ、有らゆる持戒者の律となれる森嚴なるエスよ、正義の喜びとなれる最も美しくしきエスよ、有ら

ゆる獨身者の節操となれる最も純潔なるエスよ、有らゆる時代の有らゆる罪人の救ひ主なるエスよ、神の御子なるエスよ、願くは我儕を恵み給へ！』

此の無意味の長文句を繰返して、エスと云ふ度毎に聲が段々と掠れて塞つて來た。で、首尾よく言了つた時、絹裏の袈裟を捧けて跪いて拜をした。唱歌團からは再び『神の御子なるエスよ、恵み給へ、』と同じ言葉繰返して歌つた。囚徒達は立つたり膝を突いたりして亂髪を背後に振つて、疲れた踝骨に打撲を拵へた鐵鎖の音をチャラ／＼と響かした。

此式は中々長い時間續いて、先づ『私を恵み給へ、』で結ぶ讚美が終ると、次は又『ハレルヤ！』で終る讚美で、囚徒達は一句毎に十字を切つて拜をした。が、段々と叩頭の度数が減つて、初めは一句毎に一遍だつたのが、二句目に一遍、三句目に一遍となつて、到頭司祭が讚美を終り、救ひを濟ました嘆息を吐きつ、本を閉ぢて中仕切の奥に引退んだ時は、一同大喜びで莞爾々々者だつた。

尙だ最一つ仕残した事がある。司祭は廳で祭机に飾付けた七寶縁の金の大十字架を取つて禮

拜堂の中央に持出した。典獄は先づ其前へ行き、恭やしく跪つて頓首禮拜して十字架に接吻した。續いて看守押丁、夫から囚徒と互に低聲で無駄口を叩きながら押合ひ壓合ひした。司祭は典獄と談笑しながら十字架を彼方此方へと囚徒の鼻先へ突付けると、囚徒は争つて十字架と司祭の手に接吻しやうとワイ／＼騒ぎ立つた。之で先づ不幸にも横道へ外れた同胞を慰めたり導いたりする此日の宗教儀式を終つたのだ。

第四十回

此儀式に列なつたものは典獄からマースロワに至るまで、司祭が何度も讚美したエス其人が斯ういふ儀式を禁じてゐたのを知らないやうである。

エスは唯此の無意味な無用の祈禱や麵麴と葡萄酒とを材にする奇怪至極の誦詠を禁じたばかりではない。同じ人間同士でありながら勝手に教師とか牧師とか稱して禮拜堂で祈禱する事を明々白々の言葉で禁じてゐる。且人は唯單獨で人の在りない場所で祈禱せよと教へ、エスは無用な

る殿堂を破壊する爲めに來たのであると換言して禮拜堂の建造を禁じ、神を拜するは禮拜室に施すより精神又は眞理に於てせよと云つた。就中現に目前に行はるゝ如く、同じ罪ある人間同士で裁判したり禁錮したり拷問したり處刑したりするは勿論、エスは囚はれ人に自由を與ふべく來れる爲めに來たのであると云つて、凡そ人を困める暴虐といふ暴虐は悉く禁じた。

加之ならず、斯る儀式をエスの名に於て施行するはエスに對する最大無禮且最大侮辱である事を誰も氣が付かぬらしい。又司祭が會衆に接吻させる爲め持出した七寶の飾の附いた金の十字架はエスが愾ういふ種類の儀式を非難攻撃した爲めに處刑された刑具に型つたものである事に思ひ到らぬらしい。又麴と葡萄酒の形でエスの肉を食し血を啜つた意である坊主めらは、エスの肉や血ばかりではない、基督の活ける、分身たる可憐の我々同胞の肉や血までに實際飽いてをる。渠等を誑惑かし、渠等の最大なる幸福を奪ひて殘酷なる苦痛に忍ばしめ、エスが眞に齋らした大いなる喜びの音信は却て押秘して少しも與へない。其様な考へは爰に列席する面々は一向御存じが無いのだ。

勿論、司祭は幼さい時から、之が昔の有らゆる聖者から今まで傳はつて現に教會に行はれ國家に認可される眞實正銘の信仰だと吹込まれてゐるから、虚心平氣に鞠躬如として良心を以て自分の職を務めてゐられる。まさか麴麴が肉に化けるとも。ヘタ矢鱈に仰山な言葉繰返すのが心靈に必要だとも、又實際神の肉を食べたとも信じないが、併し人は必ず之を信すべき筈のものだと信じてゐた。殊に何よりも信仰を強くしたは。此役目を勤めてゐるお蔭に十八年間一家を支へ、倅を高等學校に送り娘を女學校に通はせるだけの收入を得られた事實であつた。長老も矢張同じやうに信じてゐた。が、司祭に比べると更に一層信仰の強かつたは、長老となると頭から信仰の教理の實質を全て忘れて了つて、信者が定つたお布施を拂ふ葬式の時の祈禱文やお布施次第で「アカシスタス」を歌つたり歌はなかつたりするお勤めの祈禱文ばかりを覚えてゐるたからである。夫故に長老は頗る得意に、「恵み給へ恵み給へ」と繰返し、薪や麥粉や諸を賣ると同様に必要缺くべからざるものと思つてお經を讀んだり讚美歌を歌つたりした。典獄や看守押丁たちになると、勿論教理や儀式が解りもせず、又深く研究しやうともしないが、ツアト

ルを初め貴顯高位の人々が信じてゐるのだから矢張信じなければならぬと信じてゐた。其上に何故だか説明出来ないが、此信仰が無慈悲な職業の罪亡ほしになるやうに茫然と思つてゐた。恐らく此信仰を外にしては彼等が現在行つてゐるやうに虚心平氣に良心に恥ぢもしないで全力を奮つて人を苦めるは中々出来難い、イヤ、到底出来ないだらう。元來此處の典獄は極の好人物であるから猶更此信仰が無かつたなら逆も恚うして安閑と暮してはゐられないだらう。夫故初めから終りまで不動の姿勢を作つて、腰を屈めては熱心に祈禱し、天使の歌が歌はれた時は心中から感動し、小兒が聖餐を受けに出た時は、一人を抱上げて司祭の傍へ突出した。

囚徒の大多數は金色の像や金欄の法衣や蠟燭や杯や『最も美はしきエス』とか『恵み給へ』とかいふ意味の解らぬ言葉の繰返して、現世及び來世の幸福が得られる不思議な力が生ずるものと思つてゐた。此の虚偽を明かに認めて心中に笑つてゐたは極少數だけで、多數のお難有やは祈禱とか勤行とか蠟燭とか何とか種々の所爲をして御利生に有附かうとし、散々祈禱をした擧句碌な御利生がない時でさへも信心甲斐のないのは全くの偶然で、大僧正初め立派な教育あ

る人が難有がる此儀式は縱令現世で御利生が無くとも來世は必ず功德になる肝腎な大切なものと思つてゐた。

マースロワも矢張御多分に洩れないので此通りに信じてゐた。尤も他の連中同様に儀式中は難有いと怠屈と混雜になつた心持がしてゐた。で、初めは勾欄の後ろの人の群に交つて誰にも顔を見られまいとしたが、聖餐が初まつた時フキョードーシャと一緒に前へ出て、只見ると典獄の後ろに髪の濃い薄鬚の生えた矮小けな百姓が立つてゐて、昵々とフキョードーシャを凝視めてゐた。此男はフキョードーシャの良人だから、「アカシスタス」の歌の最中マースロワはシゲシゲと容子を見ては頻りにフキョードーシャと私語り、誰も彼も揃つてゐる時だけ一緒に叩頭をして十字を切つてゐた。

第四十一回

同じ日曜日の朝、ネフリユードフは早から出掛けた。近在の農夫が裕々と荷車を輾らせなが

ら妙な聲を出して市街を呼ばつてゐた、『牛乳や牛乳！』

前夜温かな春雨が落ちたので、石を敷かない處には草が青々と萌出し、庭の樺の木は緑の綿を一面に散らしたやうに芽を吹き、山櫻やボブライは柔かな長い葉を開いた。で、其處此處の商店や住家は二重の窓框を外して綺麗に掃除してあつた。

廳で古着市まで来ると、軒並びの床見世の前に一杯の人集りがして、汚い扮装の男が深喉を兩脇に抱へ、火熨斗のかゝつたズボンや脚衣を肩に掛けて賣つて歩いてゐた。

此日は日曜日だから、工場を休んだ職工たちが小清潔した衣服にテカ／＼輝つた靴を穿き、女工は美華な手中を頭に巻き、南京玉の縁飾りをした羅紗のジャケットを着て居酒屋の四邊をウロウロしてゐた。黄筋入の制服巡査はピストルを手にして突立ちつゝ雑沓の警戒を加へてゐた。列樹通りの人道や青々とした芝生の上には小兒や犬が駆捲廻つてゐる。附添の保母達までが一緒に浮れて腰掛でベチャクチャ儂舌つてゐた。で、日蔭が猶だ濕つて中央だけが漸と乾いた大通りを通い荷馬車が絶間なくガダクリする、馬車が縦横に駈け違ふ、其中を鐵道馬車が鈴を鳴ら



しながら走つてゐた。教會の鐘の音は、ゴーン、ゴーンと空気を劈いて、監獄で行うのと同じ祭式に會衆を招集し、人は日曜の晴衣を着て思ひ／＼に所屬の教會へと道を急いだ。

ネフリユードフを乗せた辻馬車は監獄へ直附けにしないで、直ぐ手前の曲り角で車を駐めた。此角から監獄までは猶だ三四十間離れてゐたが、申合はしたやうに小さな包を一個宛抱へた男女が勢立つてゐた。右手には、五六軒の木造家があつた。左手には看板を出した二階家があつた。正面の宏大な煉瓦造りが即ち監獄である。面會人は直ぐ側まで行く事が出来ないで、門衛は始終彼方此方を歩いては近づくものを叱りつけてゐた。

右方の木造家の門に丁度門衛と相對して腰掛を据ゑ、金筋入の制服を着た看守が手帳を手に持つて腰を掛け、面會人が誰某に面會したいといふのを一々手帳に控へてゐた。ネフリユードフも其側へ行つてカテリーナ・マースロワの名を書付けて貰つた。

『何故直ぐ面會を許しません？』とネフリユードフが訊くと、

『日曜日の禮拜が始まつてますから、濟んだら直き許します』

ネフリユードフは待草臥れてる多勢の面會人から遠く離れてゐた。すると形の壞れた帽子を被つた、顔に赤い縞の出来てる蹠足の襤褸男が獨り群を離れて早足に抜駈をしやうとツカ／＼と監獄を目掛けて行くと、

『こらッ、何處へ行く？』と銃を持つてる門衛が大聲で呼留めた。

『何を號きやがる？』と襤褸男は門衛の叱咤ぐるに怯ともしないらしかつたが、併し後へ戻りながら、『行つて悪きやア行かねエだけだ。大將にでもなつた氣で大きな聲を出すなエ。』

多勢は喝采して笑つた。面會人は大抵汚い衣服。イヤ汚ないどころか、襤褸に纏まつてる者も澤山あつた。が、中には相應に着飾つた紳士風貴夫人風のも交つてゐた。ネフリユードフの傍に綺麗に鬚を剃つた肥胖した赤ら顔の男が下着然たるものを包んだ小包を持つて立つてゐたので、初めて面會に來たのかと訊くと、日曜日の度毎に必ず來ると答へた。夫から段々話して見ると、此男は銀行の門番ださうで、到つて好人物らしい。貨幣贓造犯で入獄してゐる兄弟に會ひに來るのたさうで、之が口火となつて身の上咄を始め、今度はネフリユードフの身の上を

訊かうとした時、覆面紗を被つた若い婦人と學生風の男が護謨輪の馬車に合乗して、筋骨肥大のサラブレッド(馬の品種)を駛らせて來た。此學生風の男は大きな包を抱へてゐるが、車を下りるとネフリユードフの前へツカ／＼と來て、囚徒一同に麵麩を差入れるには怎う云ふ手續をしたら宜からうと訊いた。自分の約婚婦即ち馬車に合乗して來た婦人と其兩親とが囚徒に麵麩を差入れたいといふ志ださうで。

『私は今日が初めてですから、』とネフリユードフは云つた。『能く存じませんナ。彼の男にお尋ねになつたら宜いでせう』と右方に腰を掛けて手帳を控へてゐる金筋入の制服の看守を指さした。

受附の看守と差入願ひの青年とが話してゐる最中、小窓の附いてゐる大きな鐵の扉が開いて看守を伴れた制服の役人が現はれ、受附の看守が面會人の入監を許すと呼ばつて門衛が道を開けると、待ちに待ち草臥れた面會人は一時にドヤ／＼と吾れ遅れじと壓合つた。入口には看守が立つて一々聲高く十六、十七、十八と面會人を勘定してゐた。其奥には又別の看守が張番し

て、二階へ上るものを一々肩や脊中を叩いて數へてゐた。面會人が歸る時分に一人も檻内に残らないやうに、又囚人が一人たりとも面會人に紛れて逃ささないやうにと念入りに人數を數へるのである。

尤も看守が人數を勘定する時一々顔を見ないから誰が誰だとも知らずにネフリユードフの肩をも叩いた。ネフリユードフは不吉な看守の手で叩かれたのを頗る忌々しく思つたが、併し翻つて何しに怨んな處へ來たのだらうと考へると、不平を起したり不快を感じたりするのを深く耻入つた。

入つてから直ぐ奥は鐵格子の小窓が若干もある圓天井の大廣間で、集會所と呼ばれてゐるさうだ。此室の壁の凹處に十字架の基督の大きな額が安置されてゐるのを見てネフリユードフは呆れて了つた。『怎ういふ了簡で怨んな畫を飾つたんだらう？』基督の像を見れば忌でも自由の聯想を生ずるが當然で、檻禁囚縛などは以ての外であるのに。

で、周章て臭る面會人をやり過ぎして、後から悠々へ行つたが、此建物に收容されてゐる罪人

の怖ろしさや、昨日の青年やカチューシャのやうに罪の無いのに呻吟する冤罪者に對する同情や、眼前に迫るカチューシャとの對面を思ふて生ずる恐ろしいやうな恥かしいやうな感情が一度に混雜になつて胸がワク／＼して來た。

集會所の端に立つてる看守は多勢の通る時何か云つたらしかつたが、左や右う思案に暮れたネフリユードフの耳には何の言葉も入らないで、多勢の人類れに壓されてツイ茫然と男囚徒の方へ行つた。

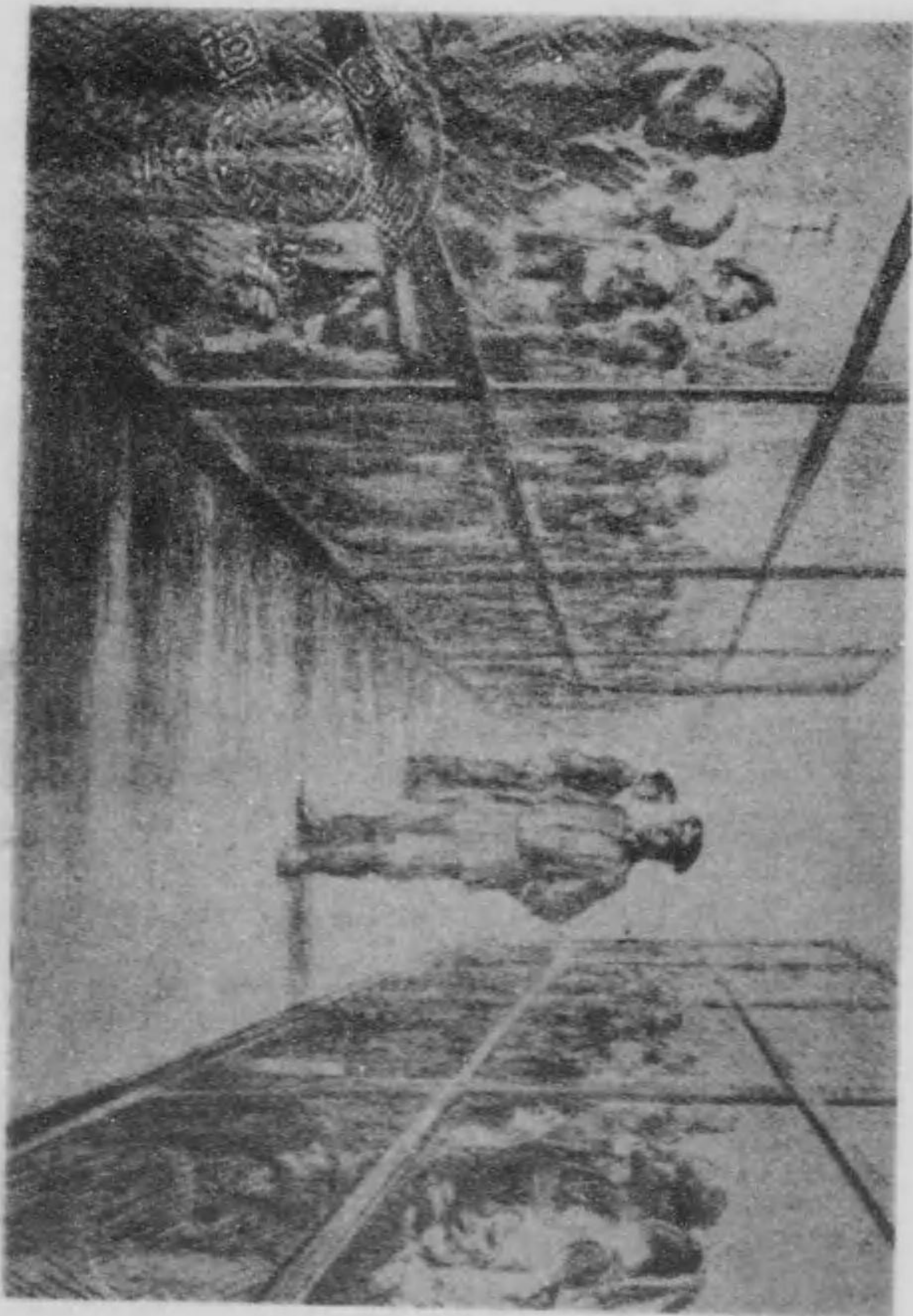
眞先に夢中になつてる人達を遣過して、ネフリユードフは一番後から行つて面會所の扉を開くと、一時にワツと云ふ何百の聲がグリーンと響いて、何が何にか解らなかつたが、近附いて見ると直ぐ合點が行つた。

面會室は二分されて、一方は面會人、一方は囚徒と、雙方共に天井から下までの鐵網を張つて分界し、網と網との間の約一間もある通路を看守や憲兵が往來して警戒し、囚徒と面會人は各々一方の網に緊密と粘着いて、丁度蟲籠に蟲が集つてるやうな有様である。何しろ一間も離

れて、加之に二重の鐵網起しだから、近眼のものは互に顔さへ能くは解らず、勢ひ大聲を出さなければ少しも通じないから、何十人が一緒になつて雙方からワイ／＼叫つてるのだ。

雙方の鐵網は一杯に顔だらけである。妻や良人や父や母や子や兄弟やが互に顔を見たり、用談を話したりしやうと一生懸命になつて各々對手に通ずるやうにと、一人が大きな聲を出すと隣りのものも負けずに一と調子張上げ、各自の聲が混雜になつてガーンと響くだけだ。

夫だから雙方とも互ひに談話が解らないで、顔を見合つては手振や容子で悟り合うのが結局である。ネフリユードフの隣りの手布で頭を巻いた婆さんは緊密と網へ粘着いて、顔を動かしては一生懸命に、頭を半分剥陥ちた青い顔の若者を目掛けて何か叫つてゐた。若者の方でも眞劍になつて眉を釣上げたり前額に皺を寄せたりして耳を引立つてゐた。その傍では百姓服の袖無しを着た若い男が面白くない顔をして頭を掉つては同じ年配の牢瘦れした鬚々鬚々の若者が何か何ふのを聞いてゐた。其次には襤褸を着た男が手を振つて笑ひながら叫つてゐた、其次にはリウとした毛織の肩掛をスツポリ纏つた女が乳赤兒を抱いたまゝオイ／＼と泣いてゐた。此



女は確かに彼方の網の中に立つてる坊主頭の胡麻鬚の男に初め 會ひに来て、鐵の鎖に繋がれた獄衣の變り果てた姿を見て泣いてゐるらしい。其又傍には門外でネフリユードフと口を利いた銀行の門番が立つてゐて、彼方の胡麻鬚の犯人に向つて精一杯の大聲を振擗つてゐた。

ネフリユードフは自分も矢張恠んな混雜した中で話さねばならぬかと思ふと、ムラ／＼と肝癢が起つて、恠んな奇怪至極な制度を設けて強行する輩に反抗したくなつた。唯併しながら恠ういふ無禮な目に遇つても人情を虐ぐる暴惡を憤るでもなく、獄吏獄卒は勿論、囚徒自身すらも宛も之が當然であるやうに思つてゐるは實に不思議千萬だ。

ネフリユードフは此室に留まる事具そ五分間、何だか頭を壓へつけられるやうな氣がして、今更のやうに自分の力の頼み難い事、世間と自分とは到底相容れないのを悟つて、恰で舟に酔つたやうな一種奇妙な道德上の眩暈がフラ／＼として來た。

第四十二回

『左に右く爰へ来た用事だけは済まさんければ……』と惨憺たる囚徒面會室の光景に打たれたネフリユードフは漸くに思返して勇氣を引立てつ、『扱て怎したものだらう？』と四邊を見廻し、恰も制服を着た瘦せた小男が面會人の背後を往つたり來たりしてゐるのを見て其傍へ行き、

『女囚の面會室は何處です？』と故と重々しく丁寧に『何處で面會出来ます？』

『女囚の方ですか？』

『はア、女囚に面會したいのですが、』と愈々丁寧に云つた。

『集會所で爾う仰しやりやア宜かつた。併し何と云ふ女ですナ？』

『カテリーナ・マースロワ。』

『國事犯ですか？』

『イヤ、何ッ……』

『宣告済ですか？』

『一昨日宣告されたばかり、』とネフリユードフは親切らしい看守の感情を害すまいと勉めて物

柔らかに云つた。

『女囚の檻房なら、此道を斯う……』と云掛けてネフリユードフの風采の尋常ならぬを見て、

『デーシロフ君、此のお方を女囚檻へ御案内して呉れ、』と胸に勳章を佩けた鬚のある伍長に云つた。

『はア、承知しました、』

と伍長が云つた時、鐵網の傍で胸の裂けるやうな聲を出して泣くものがあつた。

ネフリユードフは事毎に奇怪に思つたが、殊に何よりも一番奇怪で堪らぬのは此人情を無視する制度を奉じて非理非道の暴行を肯てする當事者たる典獄や看守押丁輩に手数を掛けたお禮を云はねばならん事だ。

伍長は男囚徒の面會室から廊下へ出て、直ぐ向側の角を折れて眞直ぐに女囚の面會室へとネフリユードフを案内した。

女囚の面會室は男囚徒のと比べると少し狭かつたが、矢張同じやうに二重の網を張つてあつ

た。面會人や囚徒の數こそ少ないが、怒鳴つたり叫いたりする騒ぎや、網と網との間を看守が歩いて警戒してゐるのは同様であつた。唯違つてゐるのは看守が女で、袖に金筋の入つた青い縁付きのジャケットに青い帯を締めてゐた。男囚徒の面會室と同様に、一方の網には思ひ／＼の扮装をした町の人、片一方の網には白い獄衣や稀には色物の娑婆の衣服を着た女囚が雙方とも隅から隅まで一杯に網の目に集つて、爪尖立つて人の頭越しに怒鳴るのもあれば躊躇んで人の裾の間から叫くのもあつた。

女囚の中で一番目に立つたはキイ／＼聲を出す妙な風采の瘦細ちの散らし髪のジブシー(浮賤民族)で、縮髪の頭から半巾を滑らかして、腰の下を緊く帯で締めた青い上衣のジブシーの男囚と叫き合つてゐた。此男は丁度囚徒側の中央に立つてゐて、目眩らしい身振をしながら黄色い聲を出してゐた。

此のジブシー男の隣には兵士がベツタリ板の間に座つて女囚と話してゐた。其次にビツタリ網の目に粘着してゐるのは鬚の綺麗な若い男で、顔をボウツと赤くし涙を一杯溜めて凝つと堪へ

てゐた。此男の對手は髪の房々した美しい女囚で、即ちフォードーシャ夫婦である。其次に大顔の女と話してゐるのは無宿者で、續いて女が二人、其次が一人の男を置いて復た女で、各自に囚人と相對つてゐた。

マースロワは此中には見えなかつたが、後ろの方の窓際に立つてゐるのに氣が附くと、ネフリユードフの胸は早鐘を撞いて息が止まるやうな心地がした。愈々絶體絶命の時が近附いて來た。

ネフリユードフは網の側へ行つて精々とマースロワを見ると、マースロワは青い瞳のフォードーシャの背後に立つて夫婦が眷しさうに話してゐるのを聞きつゝ微笑してゐた。此日は昨日のやうな獄衣に引換えて白いジャケットの腰の邊りをキウと緊く帯で締め、胸を一杯に突出し、法廷で見掛けた時と同様な眞黒な縮れた前髪を頭巾の下から前額に垂らしてゐた。

『即時決心せにやならぬ、』とネフリユードフは心中に、『此方から呼んで見たもんか、夫とも先方から聲を掛けるを待つてゐるか?』と迷つてゐた。

マースロワは朋輩のベルタを待構へてゐた。ネフリユードフが會ひに來やうとは夢にも思つ

てゐなかつた。

「貴下は誰に面會なさるんです？」と網の間を見張つてる女看守はネフリユードフの側へ行つて訊くと、

「カテリーナ・マースロワ」とネフリユードフは苦しうに答へた。

「カテリーナ」と女看守はマースロワを呼んで、「お前に面會の方がある。」

マースロワは四邊を見廻し、反身になつて胸突出しつゝ、昔しから見覚えある暢然した顔をして二人の囚徒を割つて前へ出て、ネフリユードフを睨と見て合點の行かぬ怪訝な顔をした。が、衣服のリウとしたのを見て早くも金持の紳士と見て取つて、然と微笑した。

「貴郎ですか、妾に面會し度いと仰しやるのは？」と例の斜視の瞳を寄せた笑顔おぼろげな笑顔を網の目に近寄せた。

「私だ……私が面會に來たのだ……」とネフリユードフは「お前」と云はうか「貴嬢」と云はうかと躊躇したが、聽て常とは違つた調子外れの聲で、「お前に會ひに來たのだ！」

「馬鹿を云つちやア不可ねエ、」とネフリユードフの隣の無宿者は大きな聲を出した。「お前は取つたのか、取らねエのかよ？」

「虚弱で死掛つてるんだよ、」と一方からは誰だかが怒鳴つた。

マースロワはネフリユードフが何を云つてるのか少しも聞えなかつたが、段々顔を凝視みつめてゐる中に今の今まで心のドン底に秘めて一生憶出すまいとした或るものが俄に浮んで來て、見ると、笑顔が失せて苦悶の刻まれた深い皺が前額ひたひたに寄つて來た。

「何を仰しやツてるか聞えませんよ、」とマースロワは眉を擧めた。

「會ひに來たんだ——」とネフリユードフは口咄りながら云ひつゝ、心中に、「爲なければならぬ義務を行ふのだ、懺悔をするのだ、」と思ふと忽ち涙が一杯溜つて咽喉が塞るやうな氣がしたので、両手で鐵網を掴んで泣くまいとした。

「渠女が壯健なら來やしないやナ、」と誰だか直ぐ傍で叫つた。

「神様が證人だよ。妾やア何にも知らないやネ、」と今度は囚徒側から號んだものがある。

マースロワはネフリユードフが逆上せてる容子を情々と見てゐる中に段々氣が付き、
 『貴郎はアノ……のやうだが——誰方でしたネ、怎うしても憶出せませんよ、』と男の顔を見な
 いで云つた。が、ホンノリと赤かつた顔が次第に曇つて來た。

『お前に勘辨して貰ひたさに來たのだ、』とネフリユードフは聲だけは高かつたが、恰で學校の
 兒童が暗踊するやうに無抑揚にヌラ／＼と率氣なく云つた。が、豫て期した贖罪の口火を切る
 や否、俄に胸がワク／＼と顛倒返るやうな氣がして四邊を見廻し、人の見る目も耻かしいやう
 な心地がしたが、耻かしく思ふのが當然だから耻かしく思はねばならぬのだと氣を取直して、
 復た聲高に言葉を繼ぎ、『勘辨して呉れ、私はお前に濟まない事をした。飛んでもない恐ろしい
 罪を作つた。』

マースロワは斜視の眼を放さずに昵とネフリユードフを見つゝ身動きもしなかつた。

ネフリユードフは既う口が利けなくなつて、網から離れて迫み上げて來る涙の聲を制へやう
 とした。

ネフリユードフを案内した伍長、最前からの様子を不思議に思つてゐるが、丁度此時再た面
 會室に來て、ネフリユードフが網の傍を離れてゐるのを見て、何故面會を請求した女囚と談話し
 ませんかと訊いた。

ネフリユードフは鼻を拭みつゝ身體を伸ばして漸くに心を沈着け、
 『網を距てゝは談話が仕悪いんで……少しも聞えませんが、』

伍長は暫らく考へてゐるが、『宜うムんす。少との間なら伴れて來て上げませう……マール
 ヤ、』と女看守を呼んで、『マースロワを外へ出せ。』

第四十三回

マースロワは忽ち横の口から出て靜々とネフリユードフの傍まで來て、佇立つて流涕に昵と
 見た。二日前に法廷で見た時のやうに黒い縮れた前髪を何本も前額に垂らしてゐた。容貌は病
 人然と青白く少し脹んでゐるが、如何にも美しく沈着があつて、燦々した黒い眼が眼縁の

下から怪しく光つてゐた。

『爰でお話しなさい、』と伍長は云棄て、退いて了つた。

ネフリユードフは壁側の腰掛へ行つた。マースロワは怪訝な顔をして伍長を送りつゝ不思議さうに肩を揺つてネフリユードフの踵に隨いて腰掛へ行き、ユラリと裾を捌いて其傍に列んだ。

『お前は容易に勘辨して呉れまいと思ふが、』とネフリユードフは口を切つた。が、忽ち涙に聲を塞らせて、『今更過去つた事は怎うすることも出来んが、併し之からは私の身に及う事なら何でも爲る意だから、何卒打解けて何なりと……』

『怎うして妾が解りました、』とマースロワは男の言葉は耳にも入れずに、男の顔を見るでもなく見ないでもなく訊いた。

『オウ神よ、私を助け給へ！私が爲すべき事を教へ給へ！』とネフリユードフは心に念じつゝ昔しとは變つて少しも樂しさうな氣色を留めない女の顔をしげく打守りつ、『私は一昨日陪

審員の席に列してゐたが、お前は氣が附かなかつたかネ？』

『少とも氣が付きませんでしたワ。氣が附くだけの時間が無かつたから、全でお顔を見もしませんでしたワ。』

『お前は小兒が出来たさうだがノウ？』とネフリユードフは訊きながら自づと面熱りしたやうな氣がした。

『はア、出来ましたが、幸福と直ぐ死にました、』とマースロワは外方を向きながら平氣な顔をしてゐた。

『怎うして、死んだのが何故幸福だネ？』

『妾も産後に病氣になりました、既んでの事生命を取られ損なひました。』と矢張俯向けた眼を上げないで云つた。

『一體怎ういふ理由で伯母はお前に暇を呉れたのだ？』

『誰が貴郎、赤ン坊を産まうて女を抱へて置く結構人があるもんですか。お腹にお氣が付くと

直ぐお暇が出ました。だが貴郎、何しに开んな話を遊ばすんです？ 最う既に済んぢまつた事を——お止め遊ばせよ。妾やア何にも覚えてやしませんワ。』

『いや、猶だ済まない。私の罪を償はん内は決して済んでをらんのだ。』

『否エ、何にも貴郎に償つて戴くやうなものは有りませんワ。有つた事は有つた事で既う済んぢまひました。』とマースロワは意外千萬にも媚びるやうな哀憐を乞ふやうな淫らしい眼をして昵とネフリユードフを見た。

マースロワは二度とネフリユードフに會うとは夢にも思つてゐなかつた。況してや怎ういふ場所柄で今日といふ今日邂逅はうとは思ひも寄らないから、互に顔を合はして夫と氣が附いた時は唯呆氣に取られて了つた。夫故一端忘れて了はうと決心した昔日の記憶は俄に呼起せないで、初めは愛しつ愛されつした青春の嬉しい戀の爲めに洞開した情や義理の微妙な新天地を臆ろけに憶出し、夫から後に、男の薄情から身を棄鉢に持壞した墮落の徑路、夢のやうな歡樂の後に、續いた長い憂き艱難を憶起して、徐ろに胸の張裂ける心持がして來たが、扱て此の亂れ搔

た感懐を解く力もないので、長い年月仕慣れたやうに眞摯な記憶を浮いた夢現の中に採み込んで了はうとした。

初めの内こそ現在同じ腰掛に竝んでる男を昔の思はれ人の様な氣がしてゐたが、昔を憶出すと忽ち胸がキリ／＼と痛んで來たから、再び紛らさうとして眼前のコスメチックを燥つかした美服の紳士と昔しの愛い眷しい純潔無垢の青年ドミートリとを全く別物として了ひ、矢張自分のやうな動物が時々入用になる一匹の人間だと決め込み、爾ういふ人間に對しては何時でも御用の時動物のお役を勤めて其代りに金を儲けてやれば宜いといふ氣になつて、そこで媚びるやうな微笑を呉れて蕩かさうとしたので、暫らくは怎うして利用して呉れやうと考込んでゐた。

『开んな事は済んぢまひましたワ。夫よりかアノ、妾は西伯利亞へ流されるのよ、』と云つた時は有繋に唇が慄へてゐた。

『知つてる、知つてる。お前の冤罪なのも知つてる。』

『冤罪ですとも、冤罪ですとも。何にも覺えがありませんワ。竊盜だの殺人犯だのと、飛んで

もないワ。辯護士さんに頼めば怎うにかなるつてますが、控訴したくてもお金が大變要るつてますからネ。』

『無論控 すれば何とかなる。私、其考で、既う辯護士に頼んで置いた。』

『お金を費はなくても承 つて呉れる辯護士さんがあつて。好いお方ネエ。』

『金の事は私が怎うにでもする。』

二人は暫らく言葉を途切らした。マースロワは再び媚びるやうな微笑を洩らして、『妾、お願があるワ、』と唐突けに、『ネエ貴郎、お金を呉れない……澤山ぢやなくて……十圓ばかり……』

『宜しく、』とネフリユードフは不意を喰つて狼狽しながら懐中物を搜つた。

するとマースロワは恰も面會室を往つたり來たりする副典獄をジロリと見つゝ、低音になつて『彼の人の前で出すと取上げられつちまひますから。』

ネフリユードフは點頭きつゝ、副典獄が後ろを向いてる隙を見澄まし、急いで紙入から紙幣

を出して渡さうとする途端、副典獄が此方に向いたので手の中に握つて了つた。

『此女は既う死んで了つた哩、』と心に思ひつ其顔を見ると、昔は無邪氣で可憐であつたが、今では浮世の波風に揉まれ抜いて活き／＼した艶が抜けた上に險相を帯び、唯黒い瞳だけが異しく光つて、ネフリユードフの手の中の紙幣と副典獄の容子とを交み代りに見てキョロ／＼してゐた。ネフリユードフは最うウンザリして了つた。

すると前夜自分の耳に私語いた誘惑者が復たもや腹の底に頭を持上げて心霊外の生活にネフリユードフを誘き出さうとし、『怎うして罪を贖はう？』と云ふ疑問を轉じて、『罪を贖う道を盡した後の結果は怎うなる？』又『怎うした方が實際的だらう？』と云ふ新らしい疑問を起させやうとした。

『如此な女の世話をやいて怎うする？自分の首へ石を結び附けて入水するやうなもんだ。夫よるか寧そ爰に持合はした金を悉く呉れて綺麗に「あばよ」と別れて了つた方が得策ぢやアないか、』と其聲が腹の底で囁いた。

此一那利、實に一大事の場合である。心靈の生活を取るべき乎、乃至心靈外の生活を取るべき乎。心の權衡に丁度平均を保つてゐたから。何方にでも毫釐の斤量が如はれば直ぐ秤皿が下つて了う。飽くまでも罪を償はうとする潔よき覺悟を貫ぬかう乎、但し手輕に責任を免れて夫なりけりに濟まして了はう乎と、グラ／＼して何方が何方とも定らるので、天に在ます神の御告を伺つて進退しやうと決心し、一心に瞑目して祈念を凝らすと、何事も正義を則とせよと宜示し給ふ仰せ畏いさに一端の迷はサラリと消え、何も彼も残る限なくカチユーシヤに打開けやうとした。

『カチユーシヤ、』とネフリユードフは言葉を更めて、『拙者はお前に勘辨して貰ひたさに來たのだが、お前は何とも云つて呉れない。赦して呉れるのか、怎うか。勿論今直ぐ赦して呉れないでも、長い間には勘辨して貰へやうか？』

マースロワの耳には開んな言葉は入らなかつた。唯一心にネフリユードフの手と副典獄の舉動とばかりを注意けてゐて、副典獄が一寸くらゐ後ろを向いた際に素早く手を伸ばしてネフリ

ユードフの手中の紙幣を引奪つて急いで帶の間に挟んだ。

『オホ、ハ、ツ、笑止しいワネエ。何を仰しやつてらッしやるの？』と馬鹿にするとしか思はれない笑ひ方をした。

ネフリユードフは思つた。マースロワの心中には飽くまで自分を敵視する恨みが結んで、用心堅固に身構へして心に食込まうとする自分を寄せ附けまいとしてゐるに違ひないと思つた。が、不思議に怎う思へば思ふほど、マースロワが曲くれば曲くるほど益々新しい不思議な勇氣が加はつて來て、縱令マースロワの目を覺ますのがドレ程難かしいにしろ、必ず目を覺ましてやらずば自分の義務が濟まない心地がして、愈々難かしいと思ふと愈々勇氣を振ひ起した。怎んな例は從來無い事で、餘人は本より初戀のカチユーシヤに對した時すら是程までに熱情を煽やさなかつた。而も此熱情の中には寸毫の利己心なく、自分の爲めには何の求むるものがなく、只一圖に女の今日の境涯を變じ、再び眼を覺まして昔しの無邪氣なカチユーシヤに復したいばツかりであつた。

『何故開んな事を云ふエ？私はお前を知つてゐる、お前を覚えてゐる。パノーヴォ（ネフリユードフの伯母の領地の名）時代の昔を決して忘れやしない。』

『濟んぢまつた事を——そんな昔し咄を遊ばして怎うなさるんです、』とマースロワは愛想氣なく云つた。

『私がお前の一生を誤ました罪亡ほしをしやうといふのだ、』と言葉を切つて、罪を償う爲めには結婚までもする意だと打明けやうとしたが、此時、偶つと相互の眼と眼を見合はすと、女の眼中に氣味の悪い陰險な相と残忍輕薄の色とが見えたので、何とも云はれない不快な感情がして、最う口が利けなくなつて了つた。

恰も其時、面會人は段々と歸り初め、副典獄はネフリユードフの傍へ來て面會時間が切れましたと云つた。

『夫では尙だ澤山話す事もあるが、時間が切れたさうだから……』と云ひつゝ手を出して、『復た來やう。』

マースロワは飽き／＼したやうに座を起つて、『既う仰しやるだけは仰しやつたぢやありませんか、』とネフリユードフの手を把つたが、軽く觸つたばかりで緊く握らなかつた。

『いや猶だ云残した事がある。今度の時にユツクリ話さう。猶だ／＼肝腎な大切な話がある。』

『そんなら復た入來つしやい、』と男を蕩さうとする眼眸に嬌然と愛嬌を覆した。

『お前は私の妹以上なんだ、』とネフリユードフは云つた。

『笑止しいワネ』とマースロワは首を掉て忽ち網の後ろへと隠れて了つた。

第四十四回

マースロワに面會する際間までは、ネフリユードフは久し振で面會して先非を悔ひて泣いて昔しの罪を謝し、之までの罪亡ほしに今後は十分力にならうと話したなら、喜んで感泣して直ぐ昔しのカチューシャに返るだらうと堅く信じ切つてゐた。然るに愈々會つて見ると、驚く可き哉、マースロワは最早昔しの無邪氣なカチューシャでは無くなつてゐて金看板の娼妓リユー